

平成28年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉 川 大 学
大学 FD 委員会
大学院 FD 委員会

はじめに

—FDの組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をマイクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。マイクロ・レベルのFDの目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学でFDの名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学FD委員会が中心になって行うFD活動はマイクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的なFD研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業がFD活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルのFD活動は、その性格上、全学的な視点と学部的な視点が要求されますが、マイクロ・レベルのFDは、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや研修会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。しかし、平成19年以降、本学では、複数の学部で、また教学部教育学修支援課が中心となって積極的に授業改善に取り組んでいます。特に、平成26年度以降は文部科学省の教育再生加速プログラム（AP）の採択を受け、アクティブ・ラーニングやルーブリック等に関する研修会やワークショップを開催し、アクティブ・ラーニングの推進と学生の学修成果の可視化に努めています。

今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的にFDにかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

大学FD委員会・大学院FD委員会委員長
教学部長 稲葉興己

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画および課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	5
(6) 今後に向けて	5
2. 学部の活動.....	6
3. 教師教育リサーチセンターの活動.....	65
4. ELFセンターの活動.....	68
5. ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」	77

II 大学院 FD 活動報告

各研究科の活動	106
---------------	-----

III 教員研修

新任教員研修会

(1) 研修プログラム内容	116
(2) 配付資料・参考資料	118
(3) 実施の成果	119

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容	122
2. 「授業評価アンケート」用紙.....	124
3. 玉川大学 FD 委員会規程	126

※本文中の記載内容について

- ・本文中の文字表記については、原文のままとした。
- ・役職名称は、平成 28 年度当時の記載とした。

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長	稲葉興己
委員	FDer	小島佐恵子
委員	文学部	岡本裕一朗
委員	農学部	宮田徹
委員	工学部	黒田潔
委員	経営学部	伊藤良二
委員	教育学部	高平小百合
委員	芸術学部	田中敬一
委員	リベラルアーツ学部	小嶋正敏
委員	観光学部	小林直樹
委員	通信教育部	松山巖
委員	ELFセンター	ミリナー、ブレット
事務担当	教学部教育学修支援課	山崎千鶴
事務担当	教師教育リサーチセンター	高橋正彦
事務担当	教学部教務課	光森多佳子
事務担当	教育企画部教育企画課	金子勲
事務担当	人事部人事課	伊従記章

(3) 今年度の活動計画および課題

昨年度に引き続き、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2016 に沿って取り組んだ。すなわち、

1. 各分野の学問分野に応じた教授法の研究開発の開始

大学教育再生加速プログラムの取組に伴い、ティーチング・ポートフォリオ、アクティブ・ラーニング、ルーブリック等の研修会を継続的に開催する。また、非常勤教員を対象に、授業改善、高等教育改革、本学の教育理念などをテーマとした研修会を継続して開催していく。

2. 双方向型授業、問題解決型授業（PBL）の研究会発足
発足したアクティブ・ラーニングの推進委員会を中心に、より効果的なアクティブ・ラーニングの実践、成績評価の可視化について検討していく。
3. 全授業科目の成績評価分布を公表する
ルーブリック指標による成績評価についてのワークショップを継続して開催する。
4. FDer の養成プログラムの作成と実施
アクティブ・ラーニング推進委員会を中心に、各学部から FDer 予定者を募る。また、学内における養成プログラムを検討するとともに、学外にて実施される養成プログラムに派遣をする。
5. 玉川大学教職員 Credo の草稿の作成
引き続き、本学 Credo の素案を検討する。

（４）活動状況

＜平成 27 年度＞

4 月 7 日	教員対象 Blackboard@Tamagawa 操作説明会を開催（20 日まで 5 回）
4 月 16 日	第 1 回ティーチング・ポートフォリオ ワークショップ①を開催
4 月 27 日	第 1 回 大学 FD 委員会 開催
4 月 28 日	TA 研修会「効果的に授業を支援するための TA の役割」（講師：教育学部 小島佐恵子）開催
5 月 16 日	教員対象 Blackboard@Tamagawa 活用相談会を開催（27 日まで 20 回）
5 月 18 日	TA 研修会「TA を考える」「防災 緊急時の対応」開催
5 月 20 日	第 7 回教育 IT ソリューション EXPO に職員派遣
5 月 31 日	ユニアデックス株式会社主催セミナー「事例に学ぶサーバーとストレージの最適な選び方」に職員派遣
6 月 11 日～12 日	大学教育学会年次大会（大阪府 立命館大学）職員派遣
6 月 16 日	教員対象 Blackboard@Tamagawa 操作説明会を開催
6 月 17 日	第 2 回 大学 FD 委員会 開催
7 月 1 日	大阪府立大学高等教育開発センター主催 FD ワークショップ「学生の自己学習を促す『教材開発アプリ』の活用術」に職員派遣
7 月 6 日	教員対象 Blackboard@Tamagawa 操作説明会を開催
7 月 9 日	第 1 回ティーチング・ポートフォリオ ワークショップ②を開催
7 月 22 日	日本経済新聞社主催シンポジウム「デジタル変革期における ICT イノベーションーIoT、AI が生み出す新たな社会、ビジネス」に職員派遣
7 月 26 日	千葉大学アカデミック・リンク・セミナー「大学教育における ICT

	<p>の効果的な活用—北海道大学オープンエデュケーションセンターの事例から」に職員派遣</p>
7月27日	<p>ユニアデックス株式会社主催教育 ICT セミナー「全学生 BYOD 化による仮想デスクトップ先進事例」に職員派遣</p>
8月5日	<p>第11回神奈川大学高大連携協議会フォーラム「主体的・能動的な学修者を育成するために—アクティブ・ラーニングのもたらすもの」に職員派遣</p>
9月9日	<p>千葉大学アカデミック・リンク・センター主催「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム 教育の ICT 化と教材開発支援」に職員派遣</p>
9月23日	<p>第3回 大学 FD 委員会 開催</p>
10月11日	<p>教員対象 Blackboard@Tamagawa 操作説明会を開催（18日までに4回）</p>
10月21日	<p>専任教員対象 FD ワークショップ「ルーブリック評価スタートアップ—評価の原則から組織での活用まで」（講師 高知大学 俣野秀典）を開催</p> <p>大学 ICT 推進協議会主催講座「著作権法改正と教育情報化」に職員派遣</p>
11月4日	<p>教員対象 Blackboard@Tamagawa 操作説明会を開催（11日までに3回）</p>
11月10日	<p>関西国際大学・淑徳大学・北陸学院大学・くらしき作陽大学主催平成24年度文部科学省大学間連携共同教育推進事業採択「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」シンポジウム「質保証を実現するためのアセスメント」に職員派遣</p>
11月23日	<p>第4回 大学 FD 委員会 開催</p>
12月8日	<p>大阪大学主催 FD ワークショップ「自学自習を促すシラバス作成法」に職員派遣</p>
12月12日	<p>千葉大学アカデミック・リンク・セミナー「グローバル化するキャンパスにおける学修支援の在り方」に職員派遣</p>
2月21日	<p>第2回ティーチング・ポートフォリオ ワークショップを開催（23日まで）</p>
2月24日	<p>平成27年度 大学教育力研修 開催</p> <p>基調講演「アクティブ・ラーニングの実践と課題」（講師：愛媛大学 中井俊樹）</p> <p>分科会①アクティブ・ラーニング ワークショップ「学生の学修を促進させる教育評価」（講師：愛媛大学 中井俊樹）</p> <p>分科会②ルーブリック ワークショップ「ルーブリック評価スタートアップ—評価の原則から組織での活用まで」（講師：高知大学 俣野秀典）</p> <p>分科会③コンテンツ授業英語化 ワークショップ「授業英語化</p>

	<p>のための具体案づくり：CLIL (Content & Language Integrated Learning) を足がかりに」(講師：福岡女子大学 和栗百恵)</p> <p>分科会④学修支援ワークショップ「学修支援担当者に必要なスキルとは？」(講師：愛媛大学 清水栄子)</p> <p>分科会⑤～⑧「各学部事例報告」</p>
3月9日・10日	平成29年度新任教員研修会 開催
3月14日	お茶の水女子大学主催全学FD/SD会「教学IR：内部質保証の漸進—シラバス・授業アンケート・学修行動調査」に職員派遣
3月15日	第5回 大学FD委員会 開催
3月27日	「非常勤教員対象研修会」 開催

その他、学生による授業評価アンケート、第三者によるシラバス確認など、例年どおりに実施した。授業評価アンケートは、US 科目については教育学部教育学修支援課が、各学部開講科目については開講学部が実施した。これまでいずれのアンケートも期末に紙面にて実施してきたが、秋学期に試験的に学期中のWEBを活用したアンケートを一部で実施した。今後、学期中のアンケートについて、また、WEBを活用したアンケートについての2側面について、期末アンケートとの比較などから検証していく。

第三者によるシラバス確認は平成16年度開講科目より実施しており、ある程度定着したと考えてよいであろう。シラバスを前半(履修登録に資するために公開するもの)と後半(履修登録をした学生のみ見られるもの)に分け、前半については科目開講年度の前年度1月に全科目を確認、後半については春学期科目は前年度の3月、秋学期科目は当該年度の8月に確認している。また、科目の特性により確認する点が異なることから、教育職員免許状取得に関わる科目については教師教育リサーチセンターが、また、それ以外の科目については教育学修支援課が確認を担当した。

また、10月のルーブリックワークショップおよび2月の「大学教育力研修(FD・SD)」は、平成26年度に採択された「文部科学省 大学教育再生加速プログラム(AP)」の取組として実施した。当該研修の午後には分科会を行っているが、今年度は8件の分科会を開催した。一方、すべての分科会を撮影し、学内限定にて動画を配信している。これにより参加できなかった分科会についても内容を確認することができるだけでなく、振り返りとして活用することができると考えている。

非常勤教員のみを対象とした研修会もAPの取組の一環である。当該研修会は昨年度より実施しているものであるが、それまでは本学の教育方針や今後の方向性などは専任教員に対してのみ情報共有が図られてきた。しかし、非常勤の教員であっても本学の教育方針に基づいた教育および授業を行うことを求めており、今の本学の取組について説明する機会を設けた。

なお、これまでも実施しているものであるが、Blackboardの一層の活用を目指して、教員を対象にその操作説明や活用方法の相談の機会を多く設けた。同時に、ICT教育に関する学外でのセミナー等に参加する機会を増やした。今後の取組の参考としたい。

(5) 活動の成果

今年度の活動計画に基づき、活発な取組をすることができた。とくに、他機関が開催する関連研修会等には職員も多く参加し、教職協働を実現すると同時に、教員と職員が同じスタンスに立って FD 活動を推進することができた。

また、前項のとおり、AP に沿って複数の研修会等を開催した。これらは、アクティブ・ラーニングの活用と学修成果の可視化を目的とするものであり、一定の理解は得られたものと考えている。

FDer の養成については、今年度には大きな動きはできなかった。次年度以降、学内で養成講座を開催する可能性などを探りつつ、平成 31 年度までに合計 9 名の FDer を養成できるよう、学部との調整を図りつつ検討していく。

(6) 今後に向けて

次年度においても、他機関主催の関連研究会等には積極的に参加し、関係教職員への情報提供を行いたい。また、学内で開催する研修会等についても多様な内容のものを開催していきたい。とくに、AP の取組を中心に、ティーチング・ポートフォリオ ワークショップ、アクティブ・ラーニング ワークショップ、ルーブリック指標による評価に関するワークショップ、非常勤教員対象研修会等は継続して開催していく。次年度からは学内の教員のみを対象とするだけでなく、学外にも公開する予定である。

詳細については、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2017 に沿って進めていく。

2. 学部の活動

平成 28 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価アンケートの実施			学部研修会
			実施時期	専任 対象	公表	
文学部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後*1	全員	学内外 (Web)*2	学内外実施
農学部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
工学部	6 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学外(Web) 学内(冊子) *3	学内実施 各学期終了後
経営学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
教育学部 (通信教育 部含)	8 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施
芸術学部	7 名	5 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施
リベラルアーツ 学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	-	学内外実施
観光学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施

*1: 対象全科目を春学期、秋学期いずれかで 1 回実施（重複実施はせず）。

*2: 文学部における学生によるアンケート結果の公表は、比較文化学科と英語教育学科で実施している。

*3: 学生による授業評価アンケート結果については、学外向けには総括内容を大学 HP (Web) で、学内向けには全内容の詳細を冊子として 8 号館玄関ロビーにて、それぞれ公表している。

※ユニバーシティ・スタンダード科目についての学生によるアンケートは別途実施している。

§ 文学部

1 FD 活動への取組理念・目標

基本的な理念は従来と変わらず、社会の大学に対する期待とニーズの多様化と、大学生の学力低下という現実に対応すべく、FD による役割意識と方法論の変革によって、時代に即した、そして普遍性を兼ね備えた大学教育を実現すべく努力するということである。また学生の就労意識の変化に対応した学生へのキャリアないし就職指導も、大学にとって重要性を増しているのに加え、文学部では比較文化学科が英語教育学科に移行する過程にあり、より FD の重要性は増しているといえる。

かかる現状認識の下、文学部では、一人ひとりの教員が文学部の理念や教育目標の実現に向けて意識を高め、職能成長できるような FD 活動を心がけている。そして、一部の教員のみが FD 活動を担うのではなく、全員が主体的に FD 活動に参加し、組織的な FD 活動を実現できるような体制を構築することを目標にしている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部長および主任会（教務主任、学生主任、人間学科主任、比較文化学科・英語教育学科主任）のもとに、文学部 FD 委員と人間学科・比較文化学科・英語教育学科の FD 担当（比較文化学科・英語教育学科は FD 委員が兼務）で、文学部 FD 委員会を組織している。

この FD 委員会は、年に 2 回の FD 委員会を招集する他、各学科の学科会あるいは運営委員会等においても定例的に FD 活動の企画・運営に関する事項の審議を行っている。

3 平成 28 年度の活動内容

(1) 研修会－文学部におけるの研究教育活動の意義に関する研修

① 概要（目的を含む）

世界的に人文科学研究教育の意義が問い直されている状況において、玉川大学の文学部としてどのような展望があるか確認するとともに、今後の研究教育活動への活用法を考える。

② 到達目標

文学部の将来性をを知り、何ができるかを理解する。

③ 活動内容

12 月 1 日（木）の 17 時 00 分から 1 時間 40 分にわたって、教育学術情報図書館 3 階アカデミック・スクエアにおいて文学部岡本教員の講演を受け、最後に質疑応答を行なった。

④ 評価

文学部の専任教員・経営学部教員が多数参加し、今後の大学教育のあり方を理解した。

(2) 授業設計・成績評価ミーティング（人間学科）

① 概要（目的を含む）

複数教員が授業担当をする諸科目について、とりまとめ役を座長として授業の計

画・内容・成績評価に関する合意形成を目的としたミーティングを行なった。

② 到達目標

各科目の授業担当者間において科目の教育目標達成のための合意形成を得る。

③ 活動内容

授業経験の報告と意見交換、授業改善の提案、成績評価に関する検討、他科目との連携の可能性、教員による授業評価

a) 「人間学演習」「人間学名著購読」授業内容の検討

授業内容の向上のため、授業の進め方と評価方法の統一に関して、学科教員全体で意見交換と検討を行った。

b) 「人間学特殊講義」(集中) 授業内容の検討

この科目は、フィールドワークを中心とした学生参加型の授業であるが、担当する複数の教員間で意見交換と内容の検討を行った。平成 24 年度から広島大学大学院工学研究科で開発したキットビルド概念マップを導入し、受講生の授業の理解度を可視化し、授業者がそれを把握できるようにした。

④ 評価

上記授業において、授業展開のための合意形成と、今後に向けての指針、さらに学生による授業評価の点において、掲げた目標は 100%達成できた。

a)については、必要に応じて随時行った意見交換の結果、情報共有が進み、授業内容の向上に効果があった。

b)については、授業者が前年度の受講生の授業理解度を踏まえた授業改善を行うことによって、受講生の授業の理解度の向上という成果を得た。この成果は第 22 回大学教育フォーラムにおいて発表し、好評を得た。(「(4) 学外セミナーへの教員派遣」の項参照)

(3) 授業評価アンケート (比較文化学科・英語教育学科)

① 概要 (目的を含む)

比較文化学科および英語教育学科で開設している授業について、授業評価アンケートを実施した。個々の教員が、担当する授業を点検し、改善するための指標を得ることが目的である。

② 到達目標

教員の意図と学生の受け止め方の間にどのような差があるかを検証し、次の学期あるいは次の年度の授業改善に具体的に生かす。

③ 活動内容

実施時期：

春秋両学期に開講している科目は春学期末に、秋のみの科目は秋学期末に実施した。

対象科目：

比較文化学科・英語教育学科で今年度開講した全科目(ただし FYE 科目、US 科目、「比較文化セミナー」、「比較文化基礎セミナー」、教職関連科目、履修者が 10 名以下のクラスを除く)で実施した。

集計：

集計は業者に委託して、各クラス別、カテゴリー別、全体の 3 レベルで集計し、か

っクラスごとにアンケート各項目と総合的満足度の相関分析を加えている。

フィードバック：

各授業担当者にはアンケート原票、クラスの集計結果、カテゴリーおよび全体の集計結果、各項目と総合的満足度との相関分析をフィードバックした。

また、全体の集計結果は大学ホームページ上で公開する予定である。

④ 評価

アンケートおよび集計は予定通り実施、前記の方針で抽出した比較文化学科（3年生・4年生）および英語教育学科（1年生・2年生は春セメのみ）の48科目（春29科目、秋19科目）中、46クラスでアンケートを回収（春27科目、秋19科目）、総有効回答者数1,641（春1,108、秋533）、回答率は85.15%であった。

学生による総合評価の評点（5点満点）は比較文化学科が4.3、英語教育学科が3.9であった。内容の分析は4月以降行う予定である。

なお、今後の問題として、新学科への移行に伴い、内容と実施方法の見直しが必要である。

（4）学外セミナー等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

他大学でのFD活動の取組方法やその成果についての情報を収集し、文学部のFD活動に活かすため、学外で開催されるセミナーに教員を派遣する。

② 到達目標

文学部専任教員の20%を何らかの学外FD研修会に派遣する。

③ 活動内容

1. 大学コンソーシアム京都主催 第22回FDフォーラム

開催日：平成29年3月4日～3月5日

派遣：3名（人間学科教員2名、比較文化学科教員1名）

2. キッドビルドによる授業リフレクション研究会

開催日：平成29年2月25日～27日

派遣：3名（人間学科教員3名）

発表：以下の研究発表を行ない、好評であった。

成功的教育観を取り入れた授業リフレクションの検討

茅島路子、小田部進一、宇井美代子、宮崎真由、林大悟、林雄介、平嶋崇

④ 評価

参加者数延べ6名は学部専任教員の25%であり、数値目標は達成した。

昨年度の20.8%に比べると少し改善したが、これは英語教育学科の教員の大半が、この時期、留学準備のための海外出張をしていたためである。

（5）授業参観

① 概要（目的を含む）

文学部教員の授業力向上のため、授業参観を実施。授業を公開する教員は、参観者からの意見を聞くことによって改善に役立て、参観した教員は、他の教員の授業運営の方法を参考に自分の授業改善に結びつける。

② 到達目標

参観を通して授業実施者と参観者のそれぞれが自らの長短所を自覚し、授業力の向上の方法論的手がかりを得る。

③ 活動内容

実施時期：秋学期

実施内容：

人間学科：全科目・随時参観可とした。

比較文化学科・英語教育学科：「EIC in Mass Media」「中国語Ⅱ」（参観随時）

および「英語科指導法（総合）」「英語科指導法Ⅰ」（日時指定）計4科目

→ 比較文化・英語教育 設定なし

④ 評価

参観者数は、人間学科がのべ12名、比較文化学科・英語教育学科は1名であった。参観後は担当教員との率直な意見交換があり、今後の参考に資するところが多かったが、参観者が少ないというのが現状である。これは参観の時間のやりくりが困難であることが主たる原因である。時間設定の工夫をするか、さらには他の方策を考える必要もあるであろう。

4 昨年度（平成27年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度の目標は、ほぼ一通り達成することができた。ただ今年度は新学科が立ち上がったばかりでもあり、一部のFD活動は、その影響で十分に遂行することができなかった。

5 今後（平成29年度以降）の予定・課題について

来年度以降に関しても、まずは従来からの活動の継続と活性化が基本である。それに加えて、あらたな環境に対応した、ないしは対応するためのFD活動も行っていく必要がある。また近年関心の高まりをみせているアクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善については、文学部がこれまで培ってきた授業改善を踏まえて積極的に取り組んでいく。各教員が担う学内業務も多様性を増しているが、学部内、学科内および複数担当授業内でコンセンサスをとる機会を捻出しながらしっかりと対応していきたい。

§ 農学部

1 FD 活動への取組理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現し、さらに授業改善、学生理解を向上するため、大学 FD 委員会と協調しつつ、全ての教員に研修会への積極的な参加を促す。農学部では実験実習科目が多く、講義科目との連携により学生が、主体的に学修できる教育環境の充実を考える。専任教員および非常勤講師は学生による授業評価を実施し、授業改善への意識を高める。さらに授業評価の結果に基づき授業参観を実施し、教員間での授業改善への理解を共有できるようにする。学部内では、主任会メンバーを中心に各教員との情報交換を行い、学修環境の向上に努める。これらを通して、教員は自らの資質向上に対する意識をさらに高め、社会に貢献できる卒業生を農学部として育成するために組織的な FD 活動を推進する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生物資源学科主任、生物環境システム学科主任、生命化学科主任、学生主任、教務主任、および大学 FD 委員の計 7 名が中心となり、目標達成にあたる。

3 平成 28 年度の活動内容

(1) 研修会

① 概要（目的を含む）

学部内での研修会は 1)「農学部-ハラスメント防止研修会(桑島英美弁護士)」、2)「農学部-心の健康について考える研修会(神谷路子先生、健康院カウンセラー)」、3)「農学部-共通分析機器の使用について(農学部教員代表)」を実施した。

1)、2)については、農学部、農学研究科全教員を対象とし、研究と教育活動の円滑な実施と、院生、学生への適切な指導を目的に、また 3) については、共通分析機器の利用予定者を対象に、研究活動の促進を目的として、使用方法や手続きなどについて説明を行った。

② 到達目標

1)については、教員と学生間または教職員間のハラスメント防止、2)については、コミュニケーションに困る学生の理解と対応、3)は、共通分析機器が利用しやすくなり、研究活動が加速するために行った。

③ 活動内容

1)は、大学で起きているセクシャルハラスメント、アカデミックハラスメント、パワーハラスメントの具体的な事例を中心に講義してもらった。ハラスメントが起きる原因として、加害者が自覚をしていない、過去の指導方法から改善がないなどがある。職場環境の改善や意思表示、コミュニケーションのとり方によってハラスメントをなくす心構えを聞いた。2)は学内のカウンセラーとしての立場から、コミュニケーションがとりにくい学生、精神的に不安定になっている学生の特徴と具体的な接し方について、最近見られた例を含めて講義してもらった。3)では、DNA シークエンサー、電子顕微鏡、NMR、LC-MS の使用方法について説明があった。それぞれの分析機器で解析できること、材料や試薬の準備、コストなどについて説明があった。また現在ま

での利用実績についても紹介があった。

④ 評価

1)については、具体的なハラスメントの事例を聞き、教員と学生または院生でのハラスメントについて知った。特にその原因については、研究を第一に考えている教員とそうでない学生との考え方の違い、教員からの指示に対して学生はほとんど No とは言えないという状況の理解不足など、教員の配慮に注意が必要であると感じた。ハラスメントを初期の段階で見過ごさず、起こさないまたは受けないための職場および教育環境の改善について理解できた。2)は、コミュニケーションが困難な学生への対応を聞いた。教員としてできることとできないことを区別して、専門家と連携しながら進める話があった。また、学生へは気になる態度への気づきと声かけ、傾聴といった対応をもとに信頼関係を築いていくことの重要性が理解できた。3)では、メンテナンス費用を農学部共通予算で捻出していることから、多くの教員が利用できるよう各分析機器の使用法の説明があった。材料によって前処理の方法が異なったり、分析結果の解析が困難な機器もあるが、説明を行った教員のサポートで研究が進められることが確認できた。

(2) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部科目担当の教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、講義科目と実験・実習科目の受講生 30 名以上の必修科目を中心に、授業評価アンケートを実施した。

② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に結果を公開することで受験生および関係者に対し、授業の健全性をアピールする。

③ 活動内容

春学期 54 クラス、4,375 名、秋学期 49 クラス、3,968 名に対して授業評価アンケートを実施した。

アンケートを集計後、結果を各教員に送付した。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。また、アンケートの記述欄を活用するために原本を各担当教員へ返却した。

④ 評価

アンケートは各学科の必修科目を中心に講義科目と実験・実習科目で実施した。領域の実験実習科目は 30 名以下の場合もあった。新任の教員に対しては選択科目で 30 名以下でも実施した。授業外での学修時間(設問 I-2)や教員の授業に対する取組(設問 II-13~15)が、科目によって変動した。どの科目も設問 III および総合評価の設問 IV は評価が高く、全体として概ね良好であった。講義科目に比べ、実験・実習科目での総合評価が高かった。身体を動かし体験する実験実習の授業での学修効果が高いことを示し、アクティブ・ラーニングの要素を取り入れ、学生の理解向上を図るべきであると考えられた。

表. 平成 28 年度の授業評価アンケート集計結果 (3 学科のアンケート実施科目すべて)

(春学期-講義科目)

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全く思わ	無効 回答数	
			う	思う	えない	わいな	ない		
			5	4	3	2	1		
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.9	22.3%	48.4%	25.5%	3.1%	0.7%	4	
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.1	12.4%	19.3%	37.7%	25.2%	5.4%	4	
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.5	13.9%	34.4%	41.4%	7.8%	2.5%	7	
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.7	17.3%	43.2%	33.7%	4.7%	1.1%	18	
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	3.8	23.6%	42.1%	30.4%	3.1%	0.8%	8	
	6 授業の進行速度は適切でしたか	3.8	23.3%	40.0%	27.1%	8.2%	1.5%	57	
						82.7%	17.3%	101	
	7 授業内容の難易度は適切でしたか	3.6	18.9%	38.4%	30.6%	10.3%	1.7%	63	
						95.5%	4.5%	142	
	8 教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったか	3.9	31.4%	36.4%	24.6%	6.0%	1.7%	14	
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	34.5%	37.6%	22.2%	4.3%	1.4%	11	
	10 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	4.0	35.5%	36.5%	22.7%	3.6%	1.7%	10	
	11 授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	4.0	31.9%	40.6%	23.5%	3.1%	1.0%	14	
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.8	25.6%	36.6%	30.2%	5.8%	1.8%	64	
						86.9%	13.1%	84	
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.8	23.5%	38.0%	31.2%	5.4%	1.2%	11	
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	3.9	25.2%	41.8%	27.3%	4.3%	1.4%	3	
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.0	33.9%	39.6%	23.9%	2.0%	0.6%	5	
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	3.7	18.0%	44.0%	30.2%	6.7%	1.2%	3
19 この授業の内容に興味・関心が持てた		3.8	25.6%	41.3%	26.2%	5.7%	1.2%	3	
20 自分で調べ、考える姿勢が身についた		3.7	20.5%	40.3%	32.8%	5.4%	1.1%	5	
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		4.0	28.6%	44.3%	23.3%	3.1%	0.8%	6	
総合評価		平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全く思わ	無効	
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.0	30.4%	40.5%	24.1%	3.8%	1.2%	18	

(春学期-実験・実習科目)

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全く思わ	無効 回答数	
			う	思う	えない	わいな	ない		
			5	4	3	2	1		
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	43.3%	45.3%	10.5%	0.7%	0.2%	0	
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.6	28.7%	22.9%	29.4%	16.7%	2.3%	0	
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	4.0	27.3%	50.1%	20.4%	1.8%	0.4%	3	
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	4.1	37.4%	38.4%	21.4%	1.9%	0.9%	5	
II	6 実験・実習内容の量は適切でしたか	3.8	28.2%	39.6%	22.0%	8.1%	2.1%	14	
						96.4%	3.6%	41	
	7 実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.8	26.4%	39.0%	26.4%	7.1%	1.1%	16	
						94.9%	5.1%	38	
	8 実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったか	4.0	30.3%	45.6%	20.0%	3.3%	0.8%	8	
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	35.5%	43.0%	19.4%	1.3%	0.8%	5	
	10 映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	4.0	31.2%	41.1%	23.2%	2.9%	1.6%	1	
	11 実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.3	45.8%	37.3%	14.1%	2.0%	0.8%	5	
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.8	26.2%	40.6%	21.7%	10.3%	1.3%	23	
						100.0%	0.0%	34	
	14 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習)への取り組みを促しましたか	4.1	35.1%	43.3%	19.1%	1.8%	0.8%	1	
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.2	42.9%	39.5%	15.9%	1.0%	0.6%	1	
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	4.1	27.9%	53.2%	17.3%	1.3%	0.3%	0
		19 この授業の内容に興味・関心が持てた	4.2	37.7%	45.1%	15.3%	1.5%	0.4%	0
		20 自分で調べ、考える姿勢が身についた	4.3	42.2%	43.2%	13.2%	1.2%	0.2%	0
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		4.4	48.0%	40.6%	10.5%	0.7%	0.2%	0	
総合評価		平均値	強く思う	ややそう	どちらとも	あまりそう	全く思わ	無効	
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.3	49.0%	36.8%	12.9%	0.9%	0.3%	6	

(秋学期-講義科目)

分野	設問	平均値	強く思う	やや思う	どちらとも言えない	あまり思うわ	全く思わない	無効回答数	
			5	4	3	2	1		
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.9	24.3%	46.4%	25.4%	3.3%	0.7%	1	
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	2.9	8.2%	17.7%	35.5%	29.5%	9.1%	3	
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.5	15.3%	34.1%	42.2%	6.3%	2.1%	10	
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.7	19.9%	41.4%	32.8%	4.5%	1.3%	11	
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	3.8	23.1%	40.2%	33.3%	2.8%	0.6%	7	
	6 授業の進行速度は適切でしたか	3.8	23.0%	40.1%	27.8%	7.5%	1.5%	43	
	7 授業内容の難易度は適切でしたか	3.6	20.6%	38.4%	27.9%	11.2%	1.9%	61	
	8 教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったか	4.0	31.7%	38.5%	24.8%	3.9%	1.1%	11	
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	36.6%	36.7%	22.4%	3.3%	0.9%	7	
	10 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	4.0	36.4%	37.4%	21.6%	3.4%	1.2%	9	
	11 授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	3.9	27.2%	37.5%	31.6%	2.7%	1.1%	49	
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	2) 多かった 1) 少なかった				60.4%	39.6%	46	
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.8	25.3%	35.6%	31.5%	5.6%	2.0%	9	
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	3.9	29.2%	37.7%	26.9%	4.4%	1.7%	9	
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.1	36.4%	37.3%	23.4%	2.1%	0.8%	12	
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	3.8	21.0%	43.3%	28.3%	5.5%	1.9%	6
		19 この授業の内容に興味・関心が持てた	3.9	27.4%	40.2%	25.6%	5.1%	1.7%	8
		20 自分で調べ、考える姿勢が身についた	3.7	21.4%	40.0%	31.8%	5.2%	1.6%	7
		21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.0	29.4%	42.8%	24.1%	2.6%	1.2%	5
総合評価		IV 22 この授業を受講して有意義であった	4.0	32.3%	40.6%	22.7%	2.8%	1.7%	13

(秋学期-実験・実習科目)

分野	設問	平均値	強く思う	やや思う	どちらとも言えない	あまり思うわ	全く思わない	無効回答数	
			5	4	3	2	1		
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	43.0%	45.4%	9.7%	1.3%	0.6%	0	
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.6	29.8%	24.1%	28.9%	14.4%	2.8%	3	
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.7	20.2%	36.6%	35.5%	5.1%	2.6%	1	
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	4.0	28.6%	49.5%	20.1%	1.4%	0.4%	7	
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	4.0	33.9%	40.8%	22.2%	1.9%	1.2%	0	
	6 実験・実習内容の量は適切でしたか	3.9	30.2%	41.0%	22.1%	5.9%	0.9%	18	
	7 実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.9	27.5%	41.7%	23.9%	6.1%	0.9%	13	
	8 実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったか	4.0	30.1%	43.1%	21.9%	4.0%	1.0%	5	
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	32.3%	43.6%	20.7%	2.6%	1.1%	4	
	10 映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	3.9	27.8%	41.9%	25.5%	3.6%	1.2%	3	
	11 実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.2	43.5%	38.9%	14.9%	1.7%	1.0%	3	
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	2) 多かった 1) 少なかった				92.9%	7.1%	20	
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習への取り組み)を促しましたか	4.1	36.2%	39.7%	20.6%	2.5%	1.0%	8	
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.1	36.3%	39.3%	20.2%	2.8%	1.4%	4	
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.2	42.0%	36.4%	18.8%	1.7%	1.1%	3	
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	4.1	30.4%	48.9%	17.0%	3.0%	0.6%	4
		19 この授業の内容に興味・関心が持てた	4.1	36.3%	45.1%	15.7%	2.1%	0.7%	4
		20 自分で調べ、考える姿勢が身についた	4.2	39.4%	43.2%	15.4%	1.6%	0.4%	3
		21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.3	44.6%	41.1%	12.5%	1.3%	0.4%	4
総合評価		IV 22 この授業を受講して有意義であった	4.3	45.2%	37.8%	14.6%	1.6%	0.8%	8

(3) 教職員を対象とした公開授業

① 概要（目的を含む）

教員の講義力・教育力向上を目指し、授業参観を実施した。今年度は春学期の科目を対象として、学生による授業評価アンケートの総合評価の高かった授業を参観した。授業参観の後、報告書を作成してもらった。

② 到達目標

公開授業の実施意義を各教員が理解するとともに、教授方法などを参考とする。授業内容や授業規模に対する設備施設活用を考える。

③ 活動内容

教員相互の授業参観を実施すべく、全学の専任および非常勤の教員に対して授業を公開した。授業を公開した教員は3学科で合計3名とした。

④ 評価

授業参観への参加数は、生物資源学科 11 名、生物環境システム学科 5 名、生命化学科 4 名であった。学科によって参加率に差があり、ほとんどの教員が参加した学科と4分の1程度の学科があった。スライドの授業資料や教室のつくりに合わせて授業展開が参考になったと回答する教員が多かった。また、学生への発問やアイスブレイクの入れ方に教員の独自性があり参考になった。教室、設備に対しての意見もあり、授業の規模や内容にあわせた学修環境の整備が必要であると考えられた。

4 昨年度（平成 27 年度）に提案された予定・課題の達成度について

ハラスメント防止研修は毎年実施している。農学部では実験実習や卒業研究などの科目があり、学生に個別に指導する場面が多い。一方、グループでの実験や実習など複数の学生が共同で学修する場面もあり、教員と学生たちとの対峙の仕方は様々に変化する。その中で場面場面にあった適切な教育指導が望まれるが、学生の受け取り方によってはハラスメントとなる場合がある。そのことから今年度はアカデミックハラスメントの事例を多く紹介してもらい、具体例をもとにその原因を追究するかたちをとった。行動監視、報告強要、個人の尊厳の侵害、威圧的言動など、教員と学生という地位、立場の違いを不当に利用したハラスメントや、教育を受ける権利を無視し、正当な客観性のある評価を行わない事例が紹介された。ハラスメントを起す教員はそれを繰り返すということもあるようで、常に指導方法を見直し、学生の立場に立った教育ができるよう心掛ける必要がある。

コミュニケーションが困難な学生が最近見受けられる。挨拶ができない、返答が全くないといったケースがある。大学生活や家庭環境に問題を抱え、精神的に不安定になっている場合や発達障害など、原因は様々である。気になる学生への対応の仕方を、研修では話してもらった。場合によっては教員だけでは対応出来ないこともあるので、専門家と相談しながら進める必要がある。

今年度は、ここ数年で導入された農学部での共通分析機器の使用方法について、研修を行った。利用状況が報告されたが使用する教員は限られており、メンテナンス費用が共通予算から捻出されていることから、多くの教員が利用でき研究に活用できることを目的とした。学部内の共同研究の促進にもなり、研究活動が活性化することが期待できた。

新入生プレースメントテストと1年次指導研修会を計画していたが、スケジュールが合

わず開催できなかった。来年度早々に計画し実施することとする。

学生による授業評価アンケートは春学期および秋学期の学期終了時に、必修科目を中心に実施している。学生の授業外での学修時間、授業の難易度や量、教員の授業に対する取組など項目が多く、様々な尺度から評価できる。また記述欄も多くなっており学生の多様な意見が聞けるようになっている。総合評価は全体的に良好であった。アンケートの質問項目によって、科目毎に評価が異なるので、担当教員が授業改善に役立てられると考える。

今年度も授業改善のための授業参観の科目を、授業評価アンケートの結果より選出した。授業参観への参加教員数は、学科によりばらつきがあった。授業改善をするための一つの方法としては、授業評価アンケートの結果を参考に、授業のどの部分をどのように変更するか検討することが挙げられる。その際にアクティブ・ラーニングを含めた教授法のバリエーションが求められるので、授業参観への参加は教授法を学ぶ良い機会と考える。これは同時に教員間の情報交換の場としても機能することが望まれる。さらに学外の研修会にも参加し、授業改善に向けた取組は活性化していく必要がある。毎学期行っている授業評価アンケートを基に、授業改善に対する学部としての取組を再検討していく必要がある。

5 今後（平成 29 年度以降）の予定・課題について

- ・ 各種研修会（学内、学外）への参加への啓蒙的活動
- ・ 基礎学力不足の学生の把握と分析
- ・ 入学後の学生の適切な指導対応
- ・ 新カリキュラムの適切な運営と点検
- ・ 授業評価アンケートの公開方法および範囲の検討
- ・ 授業評価アンケートの授業への還元方法の検討
- ・ 教員相互の授業参観の組織的な取組と授業改善
- ・ 大学院 FD 委員会との連携強化

§ 工学部

1 FD 活動への取り組み理念・目標

工学部全教員が Tamagawa Vision 2020 を共有し、「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」との工学部の理念・目標に向けて、教育内容・教育環境の向上をはかることを従来通り継続している。

昨年度まで報告しているように、平成 25 年度入学生に適用されたカリキュラム改定では、入学生の学力不足対応のため、1 年次には専門科目を入れずに基礎教育を 3 学科共通で用意した。同時に平成 25 年度入学生から 16 単位キャップ制および GPA による警告制度・卒業要件が適用された。さらに、平成 26 年度入学生に適用されたカリキュラムでは開講科目数が削減された。また、平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が新設され学部 4 学科体制となり、平成 29 年度には情報通信工学科が新設され学部 5 学科体制（一部教員は学科併任）となる予定である。

学科の新設やそれに伴うカリキュラム数の増加、また各年度に更新されたカリキュラム更新という複雑な状況下において、工学部全教員が、学生の学修の現状を適切に理解すること、例えば 16 単位キャップ制および GPA 警告制度における学生の学修状況の分析、その結果と課題の把握と共有、次期へ向けてより効果的で充実した指導の在り方の議論・検討、等は工学部の理念・目標の検討・具現化のために非常に重要である。これらの取組は工学部の過去と現在と未来において最重要課題であるとともに FD 活動の目標であり、主たる FD 活動である「工学部 FD 研修会」、「授業評価検討会」、「授業評価アンケート」および各学科で常に行われている種々の会議体等において恒常的になされるものである。

昨今、アクティブ・ラーニングの重要性がさまざまに強調されているが、この件に関しては大学全体での研修会等開催されているため、昨年度同様、現状においてはそちらにその展開をゆだねることとする。ただし、ミクロ的に実施されているアクティブ・ラーニングについては、後段において簡単に記述する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

昨年度まで報告しているように、工学部 FD 活動の多くが ISO9001 教育クオリティマネジメントシステムの運用・継続によるものである。平成 26 年度からは、機械情報システム学科、ソフトウェアサイエンス学科、マネジメントサイエンス学科の工学部 3 学科で ISO9001 運用を実施することとなった。また、平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が新設されたことにより、ISO9001 運用は学部 4 学科へと拡張され、平成 28 年 10 月に全学科が ISO9001 認証継続を受けた。平成 28 年度においても、ISO9001 教育クオリティマネジメントシステムは運用・継続中である。

以上のことにより、工学部では全学科において ISO9001 運用の中で FD 活動の多くが実施・継続されている。そこでは、学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観、工学部 FD 研修会の実施などが、各学科会、各学科授業評価検討会、教務担当者会、工学部授業評価検討会、主任会等の組織構成によって相互に確認・補完し、運営されている。ISO9001 運用にかかる組織構成と役割は、工学部発行「教育クオリティマニュアル」において記述されているが、そこに掲載されている組織図を図 1 に示す。

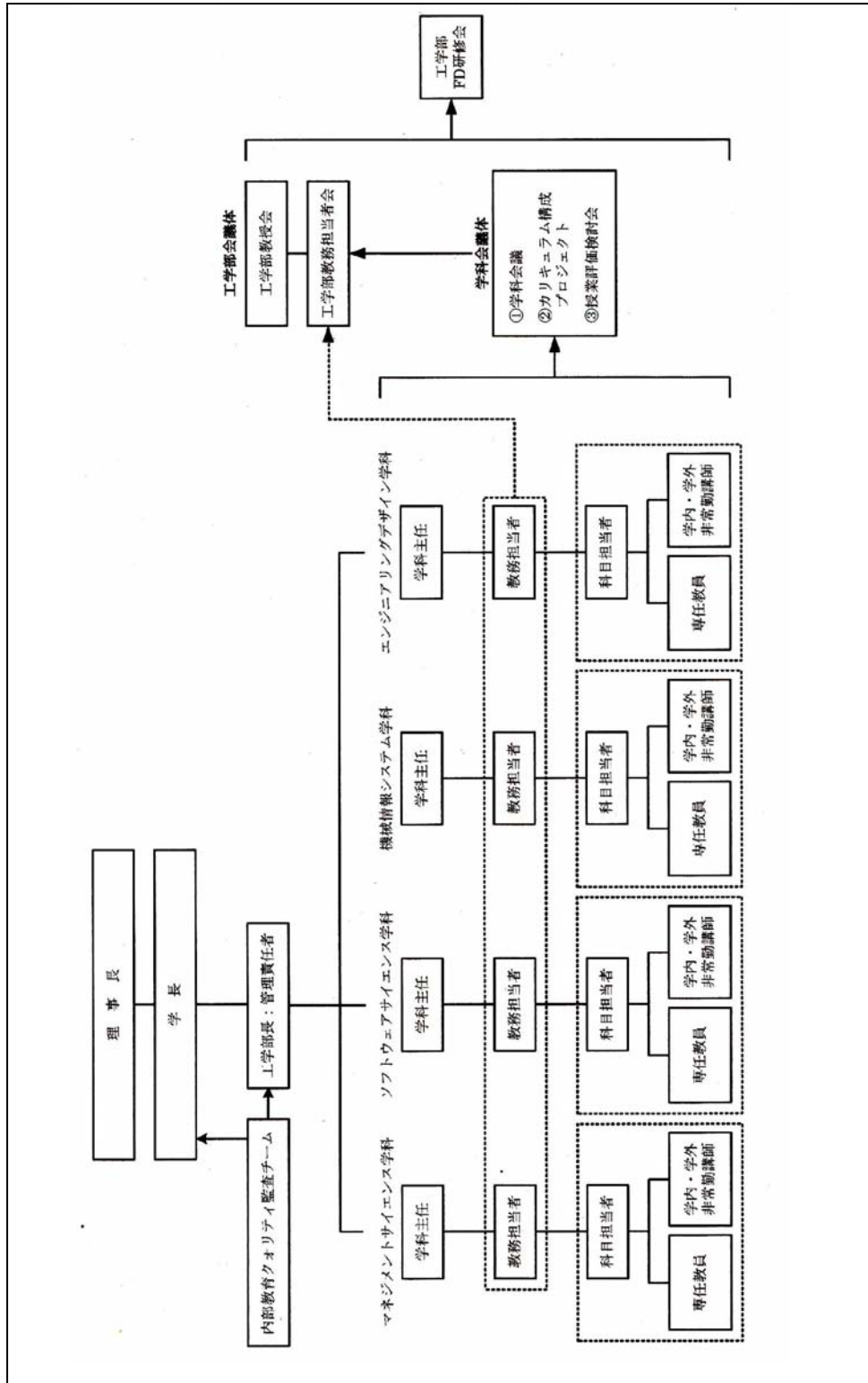


図1 教育クオリティマネジメントシステム組織図

現状では、毎年のカリキュラム改定、16 単位キャップ制・GPA 警告制度への移行・新学科学生動向等、教育システム上見逃せない課題が多いため、工学部全専任教員参加による工学部 FD 研修会の年 2 回開催を平成 24 年度以来継続しており、このことが工学部の最重要の FD 活動となっている。

3 平成 28 年度の活動内容

平成 28 年度工学部 FD 活動計画にそって、その詳細について以下のように記述する。

(3-1) 工学部 FD 研修会

① 概要

工学部最重要 FD 活動の一つである。春学期（第 1 回）・秋学期（第 2 回）にそれぞれ開催された工学部 FD 研修会のまとめ冊子（工学部長・各学科主任・教務主任・学生主任・工学研究科長・FD 委員において保管）の目次を図 2 および図 3 に示す。テーマと目的は図 2 および図 3 に記載のとおりである。

② 到達目標

FD 活動への取組の項で記したように、本活動において工学部全専任教員が全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的指導展開の構築と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること、が到達目標である。

③ 活動内容

報告内容はまとめ冊子（工学部長・各学科主任・教務主任・学生主任・工学研究科長・FD 委員において保管）を参照されたい。ここでは各報告の概要について簡単に記述する。

第 1 回

1. 本年度春学期学修状況分析結果報告（GPA・単位取得率・経年比較 等）
 - (1) 機械情報システム学科：春学期 16 単位キャップ制下の学修状況、成績比較、警告者比較
 - (2) ソフトウェアサイエンス学科：入学生の分析、平成 25、26、27 年度と比べた平成 28 年度の GPA の比較、数学プレイスメントテストと GPA の因果関係、平均 GPA と平均単位取得率、警告者数
 - (3) マネジメントサイエンス学科：平成 25、26、27、28 年度入学生の入試形態と警告の比較
 - (4) エンジニアリングデザイン学科：春学期 16 単位キャップ制下の学修状況、成績比較、警告者比較、確認テスト結果と履修モデル
 - (5) 数学研究室：入学生の数学学力確認テストの動向
 - (6) 物理研究室：入学生の物理学学力確認テストの動向
 - (7) 学部全体の状況：教務主任：学部全体の状況と今後（警告者の動向）
2. 授業評価アンケート結果：授業評価アンケートの全体結果報告（後述、図 6）

第 2 回

1. 本年度秋学期学修状況分析結果報告（GPA・単位取得率・経年比較 等）
 - (1) 機械情報システム学科：平成 27～28 年度秋学期成績比較、警告者比較
 - (2) ソフトウェアサイエンス学科：入学生の分析と警告者の動向
 - (3) マネジメントサイエンス学科：平成 24～28 年度入学生の初期試験と 1 年生春秋 GPA
 - (4) エンジニアリングデザイン学科：平成 27～28 年度秋学期成績比較、警告者比較
 - (5) 学部全体の状況：教務主任：学部全体の状況と今後（退学者・警告者の動向）

2. 最近の専門科目受講者動向

- (6) 機械情報システム学科：「情報理論」の授業について、内容、今後の課題、等
- (7) ソフトウェアサイエンス学科：「工学基礎 I」の授業について、内容、講義上の留意点、振り返り、成績分布、今後の課題、等
- (8) マネジメントサイエンス学科：「経営情報分析実習」の授業について、内容、単位修得状況、観察事項・発見事項、等
- (9) エンジニアリングデザイン学科：「材料力学」の授業について、内容、成績評価、中間・期末テスト不合格者のフォロー、改善事項、等

3. 授業評価アンケート結果：授業評価アンケートの全体結果報告（後述、図 7）

④ 評価

昨年度までの報告と同様に、各学科の総合的学修状況分析結果、専門科目学修状況分析結果、およびそれらの今後の対応方針を共有し、工学部のあり方や指導に効果的に反映できたと考えられる。工学部では FD 研修会終了後に「発表資料+発表者による解説」から成る記録冊子を作成しているが、詳細なデータは当該冊子に記載されており、必要に応じて学部内にて主任を経由して閲覧可能となっている。

教務主任による総括では、以下のことが報告された。

平成 22 年度から平成 28 年度までのデータをもとに工学部の退学者について数の推移、退学理由、入試種別、退学時期について調査した。すでに卒業年度を終了している平成 25 年度までを見ると、工学部における退学者の割合は 25% 前後である。さらに、学修継続条件が GPA へ変更された後、その割合は増加している。警告 3 回による退学処分が、退学の理由として全学科に共通して大きな割合を占めている。他に、進路変更が退学理由の比較的大きな割合を占めている。なお、進路変更で退学した学生の 4 割弱が 2 度の警告を受けている。これらより警告を減らすことにより、退学者を減少させることが期待される。また、工学部全体で警告 3 回により退学した学生の入試形態は、指定校推薦が約 38% で最も高く、学部別入試と全学統一入試がともに約 25% で続いている。工学部全体で警告 3 回以外の理由で退学した学生の入試形態は、指定校推薦が約 43% で最も高く、学部別入試と全学統一入試がともに約 20% で続いている。警告 3 回で退学した学生の多くは 3・4 セメスターで退学しており、全体の 56% を占めている。警告 3 回以外で退学した学生の 38% が 2 セメスター終了時まで、60% が 3 セメスター終了時まで退学しており、早い時期に退学する学生が目立つ。

これらの退学者の退学理由の分析により、警告を受ける学生を減少させ、ひいては退学者を減少させ、学生が学修に専念できる環境作りが重要であると考えられる。

教授会メンバーはほぼ全員が出席しており、警告を受けた学生への指導対応・対策が提示され、認識・共有できた。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算に計上し、項目は「FD 研修にかかわる消耗品」で資料印刷費であった。

2016年度（平成28年度）第1回 工学部FD研修会

【解説／まとめ付】

日時：平成28年9月15日（木）9時00分～9時55分

場所：8号館 第2会議室

テーマ：GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有

目的：① 1年生においてはGPA・単位取得率による成績の過去との比較

② 2年生以上においては主たる専門科目の成績動向の過去との比較

③ 以上により、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を鑑みつつ、
現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること

内容：① 学習状況分析結果報告（学部・各学科・数学/物理学・各学科専門科目）

② 授業評価アンケート結果報告

到達目標：全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること。

プログラム

頁

1. 本年度春学期学習状況分析結果報告

(1) 機械情報システム学科	教務担当 岡田 浩之	1
(2) ソフトウェアサイエンス学科	教務担当 大竹 敢	6
(3) マネジメントサイエンス学科	学科主任 菅原 昭博	12
(4) エンジニアリングデザイン学科	教務担当 福田 靖	16
(5) 数学系 マネジメントサイエンス学科	豊田 昌史	23
(6) 物理学系 マネジメントサイエンス学科	宮田 成紀	28
(7) 学部全体の状況	教務主任 山崎 浩一	38

2. 授業評価アンケートの結果から FD 委員 黒田 潔 43

○ 解説／まとめ （各報告の最終頁付記）

以上

図2 春学期開催工学部FD研修会プログラム

2016年度（平成28年度）第2回 工学部FD研修会

【解説／まとめ付】

日時：平成29年3月24日（金）13時00分～13時55分

場所：8号館 第2会議室

テーマ：GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有

目的：① 1年生においてはGPA・単位取得率による成績の過去との比較

② 2年生以上においては主たる専門科目の成績動向の過去との比較

③ 以上により、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を鑑みつつ、

現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること

内容：① 学習状況分析結果報告（学部・各学科・数学/物理学・各学科専門科目）

② 授業評価アンケート結果報告

到達目標：全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること。

プログラム

頁

1. 本年度秋学期学習状況分析結果報告		
(1) 機械情報システム学科	教務担当 岡田 浩之	1
(2) ソフトウェアサイエンス学科	教務担当 大竹 敢	6
(3) マネジメントサイエンス学科	教務担当 佐藤 健治	11
(4) エンジニアリングデザイン学科	教務担当 福田 靖	15
(5) 学部全体の状況	教務主任 山崎 浩一	21
2. 最近の専門科目受講者動向		
(6) 機械情報システム学科	「情報倫理」 相馬 正宜	27
(7) ソフトウェアサイエンス学科	「工学基礎Ⅰ」 樋田 栄揮	31
(8) マネジメントサイエンス学科	「経営情報分析実習」 三木 秀夫	38
(9) エンジニアリングデザイン学科	「材料力学」 川森 重弘	42
3. 授業評価アンケートの結果から	FD委員 黒田 潔	50
○ 解説／まとめ	(各報告の最終頁)	

以上

図3 秋学期開催工学部FD研修会プログラム

(3-2) ハラスメント防止研修会

① 概要（目的を含む）

平成 28 年度工学部 FD 活動計画に記載がないが、予算使用により簡単に記述する。
教員の学生または同僚に対するハラスメントの防止が目的である。

② 到達目標

教員の学生または同僚に対するハラスメントへの忌避感覚の醸成が目標である。

③ 活動内容

平成 28 年 12 月 15 日実施に依頼弁護士により実施された。

④ 評価

評価に関する定量的なデータは存在しないが、ハラスメント防止意識が向上したと考えられる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上し、項目は「ハラスメント防止研修講師費用および資料印刷費」であった。

(3-3) 授業評価検討会および工学部授業評価検討会

① 概要（目的を含む）

各授業の授業評価アンケート結果と、教員が授業ごとに作成している「授業実施チェックシート」（ISO9001 運用上の教育クォリティ記録・様式 No.7301-05、事実上のポートフォリオである）を基に、学科ごとに「授業評価検討会」を実施することが ISO9001 運用上定められている。ここでは主に授業上の不具合を抽出し、次期への課題を考察する。

Semester末の教務担当者会では、学科ごとの「授業評価検討会」においてなされた報告を各学科教務担当が持ち寄り、学部として「授業評価総合検討会」を実施することが ISO9001 運用上定められている。「授業評価総合検討会」は「工学部授業評価検討会」と同義である。ここでは各学科からの報告を基に、各学科教務担当が総合的に検討を加え、その結果を学部としての次期への授業改善の実施施策として各学科へフィードバックされ、各学科における改善の実施に寄与させる。

② 到達目標

授業評価と授業実施チェックシートを基にした授業改善の継続的な検討が目標である。学科の人材育成目標にかかる授業カリキュラムの継続的な検討へと常に移行できる体制の維持も二つ目の目標である。

③ 活動内容

工学部授業評価検討会実施日：春学期 平成 28 年 9 月 12 日
秋学期 平成 29 年 3 月 1 日

④ 評価

学生による授業評価アンケート・教員による授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クォリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）・各学科による授業評価検討会によって、授業改善サイクルが定着している。

授業評価検討会は、工学部授業評価検討会の数日前の各学科会時に各学科で開催さ

れ、授業評価アンケート・授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クオリティ目標一覧表 評価を用いて議論された。

工学部授業評価検討会では、各学科で議論された内容が ISO9001 運用上の科目別教育クオリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）・ISO9001 運用上の授業評価検討会議事録（様式 No.7302-05）を用いて説明され、その内容を構成員である教務主任各学科、教務担当および FD 担当が議した。

主に議論された内容は、例年通り科目別教育クオリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）における評価項目の「授業評価・成績 B 以上 60%」である。この範囲を外れる授業科目は当然存在するわけであるが、それは教授法に問題があるのか、あるいは学生の資質に問題があるのか、常に付きまとう解けない課題である。これはどちらかがどちらかに責任を押し付けあう問題ではなく、常に授業を改善していくという思想を持ち続けることに大きな意義がある。その意味で、この問題を結論が出ずとも議論しあうことが重要である。その対応について学科を超えて議論することによってより良い方向を検討した。

授業評価アンケートについても、できるだけ実施率が高くなるよう、その仕組みについて反省点が説明された。

以上の検討項目は、再び各学科へフィードバックされ、次期の授業展開へ資することとなる。春学期工学部授業評価検討会議事録を図 4 に、秋学期工学部授業評価検討会議事録を図 5 に示す。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、実際の使用はない。


平成 28 年度春semester工学部授業評価検討会議事録	
日時	平成 28 年 9 月 12 日, 14:15~15:00
場所	大学 8 号館第一会議室
出席者	黒田 (工学部 FD 担当), 山崎 (教務主任), 相馬 (機械情報システム学科教務担当), 大竹 (ソフトウェアサイエンス学科教務担当), 佐藤 (マネジメントサイエンス学科 教務担当), 福田 (エンジニアリングデザイン学科教務担当)
議事録作成	山崎 
資料	2016 年度春学期 授業評価検討会議事録 (IMS, SS, MS, ED) 2016 年度春学期 科目別教育クオリティ目標一覧表評価 (IMS, SS) 2016 年度春学期 授業評価集計結果 (SS, MS, ED) 2016 年度春学期 科目との関連 (MS) 2016 年度春学期 学生による授業評価アンケート 集計結果 ※ IMS : 機械情報システム学科, SS : ソフトウェアサイエンス学科, MS : マネジメントサイエンス学科, ED : エンジニアリングデザイン学科
各科で実施した授業評価検討会での検討事項を元に、本semesterにおける各科の取組みについて報告が行われた (詳細については各科の「授業評価検討会議事録」参照)。全学科、不満足授業は無かった。	

図 4 春学期工学部授業評価検討会議事録

平成 28 年度秋 semester 工学部授業評価検討会議事録	
日時：	平成 29 年 3 月 1 日, 15:15~16:00
場所：	大学 8 号館第一会議室
出席者：	黒田 (工学部 FD 担当), 山崎 (教務主任), 相馬 (機械情報システム学科教務担当), 佐藤 (マネジメントサイエンス学科教務担当), 福田 (エンジニアリングデザイン学 科教務担当)
議事録作成：	山崎
資料：	2016 年度秋学期 授業評価検討会議事録 (IMS, SS, MS, ED) 2016 年度秋学期 科目別教育クオリティ目標一覧表評価 (IMS, SS) 2016 年度秋学期 授業評価集計結果 (SS, MS, ED) 2016 年度秋学期 学生による授業評価アンケート 集計結果 ※ IMS: 機械情報システム学科, SS: ソフトウェアサイエンス学科, MS: マネジメントサイエンス学科, ED: エンジニアリングデザイン学科
	<p>各科で実施した授業評価検討会での検討事項を元に、本 semester における各科の取組みについて以下の報告がされた (詳細については各科の「授業評価検討会議事録」参照)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・IMS: シラバス未登録やチェックシート未提出が何年か続いている科目に対して改善に取り組む。 ・SS: 複数の科目が授業評価の目標である「成績 B 以上を 60%」を未達の理由として、学科の基盤科目であるため厳しく評価していることと能力別にクラス分けしている科目では、できない学生のクラスの成績が低い。 ・MS: 今年度入学した数学教員養成プログラムの学生の学力が低いことと、上級生で教職課程の科目のうち教科科目より教職科目を履修する学生多く、学生の士気の低下の問題点である。 ・ED: 授業評価の目標である「成績 B 以上を 60%」を未達のキャリアデザインについては、担当教員を増す、レポート指導を徹底するなどの対応をしてもなかなか状況が改善しない。 <p>全体として、学力不足の学生とそれなりの学力はあってもレポートなどの提出物が出せない学生が少なからずいることが指摘された。</p> <p>これらの報告内容を学部として共有し、学生指導に生かしておくことを確認した。</p> <p>なお、全学科、不満足授業は無かった。</p>
	以上

図 5 秋学期工学部授業評価検討会議事録

(3-4) 研究授業 (参観授業)

① 概要 (目的を含む)

春学期と秋学期に各学科より 1 名ずつの教員が各自の担当科目に関して参観授業を実施する。担当授業は所属学科専門科目に限る必要はなく、全学 US 科目・他学科科目でも問題としない。春学期は工学部教員に公開し、秋学期は全学教職員に公開している。各学科教員数は 8~9 名であるため、4~5 年で一巡する。本項目の実施目的は、学生による授業評価アンケートとは別の視点で、参観者 (各学科教員または全学教職員) からの評価を授業改善につなげることである。

② 到達目標

参観者 (工学部教員または全学教職員) からの評価を基にした授業改善の継続的な検討が目標である。

③ 活動内容

今年度の実施授業について表 1 に示す。

また、参観者が工学部教員である場合、「工学部教員授業参観者チェックシート」(昨年度 FD 活動報告書に提示) を参観しつつ記入した。さらにその評価を受けて、「研究授業 (科目担当者票)」(昨年度 FD 活動報告書に提示) を参観授業実施者が記入し FD

委員に提出する。「工学部教員授業参観者チェックシート」は授業担当者が保管し、「研究授業（科目担当者票）」は授業担当者と FD 委員が保管している。

④ 評価

参観授業実施者が記入し FD 委員に提出する「研究授業(科目担当者票)」によれば、それぞれの教員が実施する授業に対してさまざまな評価を受けていることがわかる。参観授業実施者が記述した「今後の対処計画」について表 2 に示す。1 年あたり 8 人がこれらの授業改善を実施すれば、数年で授業の質が大きく向上すると考えられる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、実際の使用はない。

表 1 平成 28 年度工学部研究授業（参観授業）実施概要

	学科	対象科目	担当教員	開催日時限	教室
春 学 期	機械情報システム学科	PBL I	岡田 浩之	7 月 15 日(月) 7・8 時限	⑧号館 ホット 工房
	ソフトウェアサイエンス学科	プログラミング I	大竹 敢	5 月 19 日(木) 5・6 時限	⑧号館 322
	マネジメントサイエンス学科	物理学 I	宮田 成紀	4 月 25 日(月) 3・4 時限	⑧号館 220
	エンジニアリングデザイン学科	ファブラボ実験	斉藤 純	5 月 12 日(木) 3・4 時限	⑧号館 222
秋 学 期	機械情報システム学科	プログラミング I	水野 真	11 月 29 日(火) 3・4 時限	⑧号館 321
	ソフトウェアサイエンス学科	情報理論	樋田 栄揮	11 月 4 日(金) 5・6 時限	⑧号館 421
	マネジメントサイエンス学科	オペレーションズリサーチ	三木 秀夫	11 月 9 日(水) 5・6 時限	⑧号館 224
	エンジニアリングデザイン学科	人間工学	阿久津 正大	11 月 25 日(金) 1・2 時限	⑧号館 322

表 2 参観授業実施者が記述した今後の対処計画

板書をより丁寧に書くよう心掛ける。

図による説明を増やす。

CAD 経験者と未経験者との習熟度の差が大きく、授業でのレベルをどこに合わせるのかが難しい現状にあります。できる学生にはどんどん取り組ませ、追いつこうとする学生には無理なくステップアップできるようなサポートをしていきます。

今回の授業ではあまり学生とのやり取りがなく、ほぼ一方的な解説になってしまったところがあるので、今後は進捗確認など積極的に学生に問いを投げかけていきたい。

またホワイトボードを使用する場合はペンの状況を授業前に確認しておくこと、板書はもう少し丁寧正確に書くように気を付けていきます。

表 2 続き 参観授業実施者が記述した今後の対処計画

PC を使用しているため、進度の早い学生が授業とは関係のないことをやり始めてしまったりするので、今後は発展課題を課すなど暇な時間を与えないような工夫をしていく予定です。(今回の授業でその発展課題を学生たちに展開しました。)
講義内容を説明する際に、意識的にアイコンタクトするように心がける。
同じ課題を全員で実施する場合、進度によって学生間にと組の温度差が生じる。学生の興味、能力の応じた班分けやテーマ設定を細かくすることを試みたい。
マイクの音量と向きに注意する。
学生に対してなるべく前列に着席するよう指導する。
授業の難易度とスピードは、この科目に限らず常に意識している課題である。
今回指摘していただいた、学生に尋ねる場面を作ることはすぐにできることであり、次回の授業から取り入れる。
1つ目の指摘、すなわち、%ile の求め方の理解における標準正規分布(表)の説明については、%ile 計算の演習問題で使い方(見方)だけを簡単に説明していたが、次回からは標準正規分布自体および標準正規分布表の内容を分かりやすく説明する。
2つ目の指摘については、板書の文字をくずして書かないよう、意識して丁寧に書字する。下位レベルの学生にとっては少し内容が難しいかもしれないとの意見があった。→今回の内容は上位レベルでもすぐにはピンと来ないところである。これは復習をしていけば問題なくクリアできる。復習させることが重要。
板書をより丁寧に書くよう心掛ける

(3-5) ISO9001 教育クオリティマネジメントシステム運用・継続

① 概要 (目的を含む)

平成 28 年度工学部 FD 活動計画に記載がないが、予算使用により簡単に記述する。既述のように、ISO9001 による教育クオリティマネジメントシステム運用・継続が目的である。

② 到達目標

確実に PDCA サイクルが循環し、定例の外部審査により評価を受けることが目標である。

③ 活動内容

今年度は平成 28 年 10 月 26～27 日に外部審査が実施され、認証継続を受けた。

④ 評価

評価に関する定量的データは存在しないが、外部審査による認証継続により確実に PDCA サイクルが循環していることが評価された。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を使用し、項目は「学生による授業評価アンケート調査関連」で、資料印刷費等であった。

(3-6) ティーチング・ポートフォリオ (TP) ワークショップへの参加

① 概要 (目的を含む)

平成 28 年度工学部 FD 活動計画に記載がないが、次年度以降継続される予定なので記述する。ティーチング・ポートフォリオを作成し、授業改善における自己省察を行うことが目的である。

② 到達目標

ティーチング・ポートフォリオのメンティーとしての記述とメンターとしての支援ができるようになることが目標である。

③ 活動内容

今年度は平成 28 年 4～7 月に第 1 回ワークショップが開催され、FD 委員（黒田）がメンティーとして参加しティーチング・ポートフォリオを作成した。また、平成 29 年 2 月 21～23 日に第 2 回ワークショップが開催され、マネジメントサイエンス学科根上 教授がメンティーとして、また FD 委員（黒田）がメンターとして参加し、ティーチング・ポートフォリオを作成・支援した。

④ 評価

評価に関する定量的データは存在しないが、4 学科中 2 学科の教員が作成を終え、残る 2 学科は次年度以降に実施予定である。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上してない。

(3-7) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

昨年度まで報告しているように、工学部では授業内容・方法・スキルの向上等の授業改善を具体化することを目的として、平成 12 年度秋学期より継続して学生による「授業評価アンケート」を春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施している。

② 到達目標

工学部各学科開講科目の全科目について担当教員の専任・非常勤の区別なく実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会および工学部授業評価検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改定に役立てる。

③ 活動内容

昨年度まで報告しているように、平成 24 年度以来、工学部学生のみを対象として設置された US 科目授業についても授業評価アンケート実施対象として組み入れており、平成 28 年度についても例年通りの方法で春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施した。授業評価アンケート用紙は昨年度報告と同一であり、本年の報告では割愛する。

集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに専任・非常勤の区別なく科目担当者に届けられた。集計結果は、科目担当者が作成した「授業実施チェックシート」と併せて、科目ごとおよび学科ごとに次期の授業に反映されるよう、PDCA を実行する努力を継続中である。学外向けには総括した内容を大学 HP で公開し、学内向けには各科目の詳細な内容を【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 32】および【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 33】として大学 8 号館玄関ロビー等で閲覧公開している。また、ISO9001 運用上その適切な保管が定められ

ており、ISO9001 認証時には、認証担当者（学外）の閲覧に供されている。

春学期の実施は 163 科目で、参加学生数は延べ人数で 6545 名であった。秋学期の実施は 145 科目で、参加学生数は延べ人数で 5278 名であった。実際には提出が間に合わなかった科目や、履修取り消しや欠席した学生が含まれているため、若干数この値より低い。

④ 評価

過去 3 年間の授業評価アンケートの参加状況について、春学期については図 6、秋学期については図 7 においてその変化を観ることができる。アンケート用紙の学生からのコメント欄は集計をしていないが、集計後、用紙そのものを科目担当者に返却し、コメント欄を含めて授業改善に役立ててもらっている。

工学部 FD 研修会記録冊子「発表資料+発表者による解説」に記載された春学期授業評価アンケート（図 6）の評価は以下のとおりである。

項目「1.」より、各学科専任教員はほぼ全員が参加している。非常勤講師に関しては、例年のことでもあるが、8 割の参加率である。この傾向は近年変わらず、十分な数値と考えてもよいと思われる。

項目「2. 3. 4.」より、各質問項目の総合平均値も例年と大きな変化はない。

項目「5.」より、質問項目ごとの変化に関しても大きな変化はない。一方、これも例年通り、評価 4 弱程度は「ややそう思う」を意味し、さらなる向上が望まれる。いずれの項目も僅かに上昇してきており、数年内に評価 4 を超えるであろう。ただし、実験設備の満足度は評価が復活した。

項目「7.」より、参加科目数は過去 3 年で減少した増加した。これは複数教員担当科目を各教員に分けていることが影響している。

工学部 FD 研修会記録冊子「発表資料+発表者による解説」に記載された秋学期授業評価アンケート（図 7）の評価は以下のとおりである。

項目「1.」より、各学科専任教員は全員が参加している。非常勤講師に関しては、例年のことでもあるが、8 割の参加率である。この傾向は近年変わらず、十分な数値と考えてもよいと思われる。

項目「2. 3. 4.」より、各質問項目の総合平均値も例年と大きな変化はない。

項目「5.」より、質問項目ごとの変化に関しても大きな変化はない。一方、これも例年通り、評価 4 弱程度は「ややそう思う」を意味し、さらなる向上が望まれる。多くの項目が前回よりもわずかに下降しており、評価 4 を超えるには諸将時間がかかる可能性がある。ただし、卒研設備の満足度は評価がわずかながらに上昇し続けており、すべての項目の中で常に評価が高い。卒研の重要性が伺える。

項目「6.」より、評価の最小値が過去 3 年で最低を示している。原因は不明であるが、アンケートのみならず多方面からの検討を要す。

項目「7.」より、参加科目数は過去 3 年で減少傾向にあるが、これは過去数年間のカリキュラム改定により、各学科の開講科目を厳選してきた結果による。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上し、項目は「学生による授業評価アンケート調査関連」で、マークシート印刷費・分析費・資料印刷費等であった。

2016年度（平成28年度）春学期 学生による授業評価アンケート 集計結果

工学部授業評価検討会

1. 参加状況

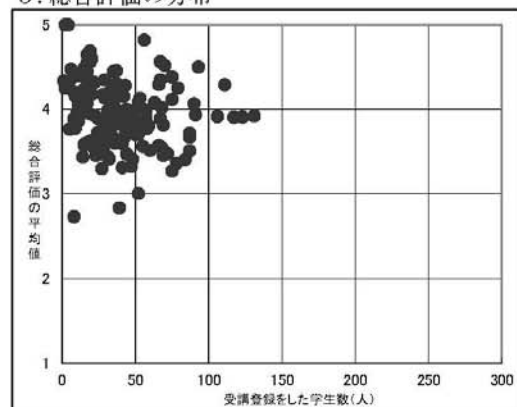
教員所属学科	参加科目数								参加教員数																	
	H25年秋	H26年春	H26年秋	H27年春	H27年秋	H28年春	H25年秋	H26年春	H26年秋	H27年春	H27年秋	H28年春														
機械情報システム学科	38	93%	31	100%	34	97%	31	91%	31	100%	25	96%	14	100%	14	100%	12	100%	11	100%	11	100%	9	100%		
ソフトウェアサイエンス学科	44	100%	32	100%	35	100%	35	97%	30	97%	35	100%	10	100%	10	100%	9	100%	10	100%	10	100%	10	100%	8	100%
マネジメントサイエンス学科	37	93%	49	100%	42	98%	33	97%	24	96%	27	100%	13	100%	14	100%	15	100%	10	100%	9	100%	9	100%	9	100%
エンジニアリングデザイン学科	-	-	-	-	-	-	23	100%	18	95%	28	97%	-	-	-	-	-	-	7	100%	8	100%	8	100%	8	100%
その他学科・非常勤	50	94%	45	79%	42	81%	33	75%	31	78%	44	81%	30	94%	31	82%	26	81%	24	77%	20	80%	29	83%	29	83%
合計	169	95%	157	93%	153	93%	155	91%	134	92%	159	93%	67	97%	69	91%	62	91%	62	90%	58	92%	63	91%	63	91%

開講学科	H27年秋 参加科目数				H28年春 参加科目数												
	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤									
U S 工学部共通	-	-	4	100%	-	-	4	100%	-	-	4	80%	-	-	4	80%	
工学部共通	-	-	8	100%	-	-	6	75%	-	-	-	0	0%	-	-	0	0%
機械情報システム学科	31	100%	6	100%	2	100%	12	100%	23	96%	11	100%	-	-	14	93%	
ソフトウェアサイエンス学科	29	97%	2	100%	0	0%	1	17%	34	100%	4	100%	3	75%	10	83%	
マネジメントサイエンス学科	13	93%	9	100%	2	100%	3	75%	17	100%	9	90%	1	100%	5	83%	
エンジニアリングデザイン学科	1	50%	-	-	-	-	1	100%	11	100%	2	100%	1	100%	6	67%	
合計	74	96%	29	100%	4	80%	27	77%	85	99%	30	97%	5	83%	39	81%	

2. 各質問項目の平均

質問	学生について		教員について			講義	実験について		卒研	科目
	意欲	自習	興味	理解	説明	教具	設備	指導書	設備	平均
平均	4.07	3.78	3.95	3.82	3.93	3.89	3.92	3.68	4.51	3.95
標準偏差	0.86	1.01	0.96	0.98	1.03	1.04	1.02	1.09	0.78	0.97

3. 総合評価の分布



4. 科目ごとの総合評価の平均値

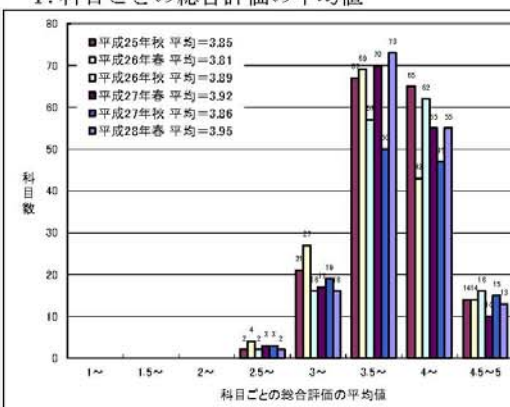
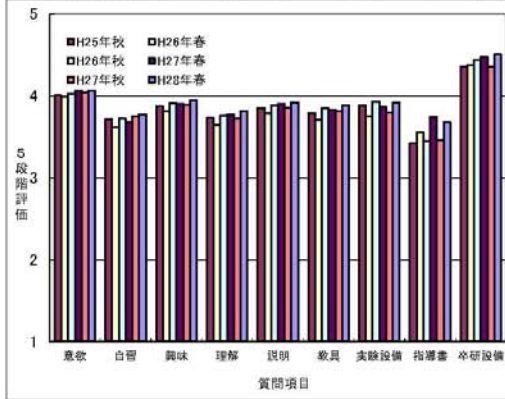
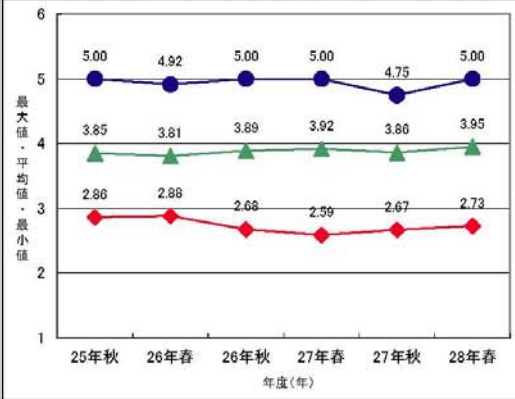


図 6-1 平成 28 年度春学期学生による授業評価アンケート集計結果

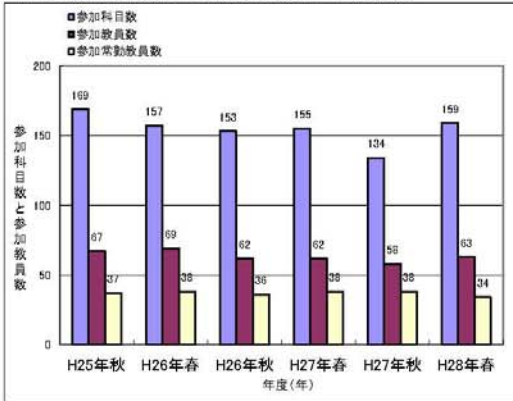
5. 全科目を通して回収されたアンケートの平均



6. 授業評価の平均値、最大、最小の年次推移



7. 参加科目数と参加教員数の年次推移



8. 質問項目と評価方法

学生の取り組み

- 1 授業には意欲的に取り組んだと思いますか(意欲)
- 2 授業に向けて予習・復習はしましたか(自習)

科目の内容

- 3 授業内容に興味は持てましたか(興味)
- 4 授業内容は理解できたと思いますか(理解)

指導方法

- 5 教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか(説明)

A 講義・演習

- 6 教具(OHPなど)・板書は見やすかったですか(教具)

B 実験科目

- 7 実験設備は整っていましたか(実験設備)
- 8 指導書は分かりやすかったですか(指導書)

C 卒業研究

- 9 研究設備は整っていましたか(卒研設備)

評価方法

- 5 : 強くそう思う(非常に良い)
- 4 : ややそう思う(良い)
- 3 : どちらとも言えない(普通)
- 2 : あまりそう思わない(あまり良くない)
- 1 : 全くそう思わない(良くない)

図 6-2 平成 28 年度春学期学生による授業評価アンケート集計結果

平成28年度秋 セメスタ 学生による授業評価 集計結果

工学部授業評価検討会

1. 参加状況

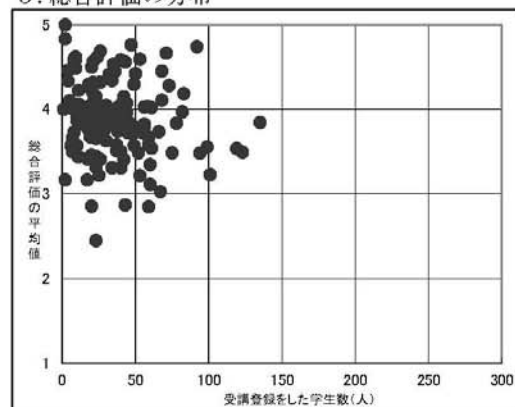
教員所属学科	参加科目数								参加教員数			
	H26年春	H26年秋	H27年春	H27年秋	H28年春	H28年秋	H26年春	H26年秋	H27年春	H27年秋	H28年春	H28年秋
機械情報システム学科	31	34	31	31	25	22	14	12	11	11	9	8
ソフトウェアサイエンス学科	32	35	30	35	23	10	9	10	10	8	8	
マネジメントサイエンス学科	49	42	24	27	28	14	15	10	9	9	9	
エンジニアリングデザイン学科	-	-	23	18	28	31	-	-	7	8	8	8
その他学科・非常勤	45	42	33	31	44	32	31	26	24	20	29	23
合計	157	153	155	134	159	136	69	62	62	58	63	56

開講学科	H28年春 参加科目数				H28年秋 参加科目数			
	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤	常勤	他学科常勤	他学部常勤	非常勤
U S 工学部共通	-	-	4	4	-	-	1	3
工学部共通	-	-	-	0	-	-	3	2
機械情報システム学科	23	11	-	14	22	10	-	10
ソフトウェアサイエンス学科	34	4	3	10	23	10	0	6
マネジメントサイエンス学科	17	9	1	5	12	9	-	5
エンジニアリングデザイン学科	11	2	1	6	12	2	-	6
合計	85	30	5	39	69	35	-	32

2. 各質問項目の平均

質問	学生について		教員について			講義	実験について		卒研	科目
	意欲	自習	興味	理解	説明	教具	設備	指導書	設備	平均
平均	4.02	3.76	3.87	3.73	3.81	3.78	3.75	3.48	4.54	3.86
標準偏差	0.90	1.01	1.04	1.05	1.11	1.09	1.22	1.25	0.76	1.05

3. 総合評価の分布



4. 科目ごとの総合評価の平均値

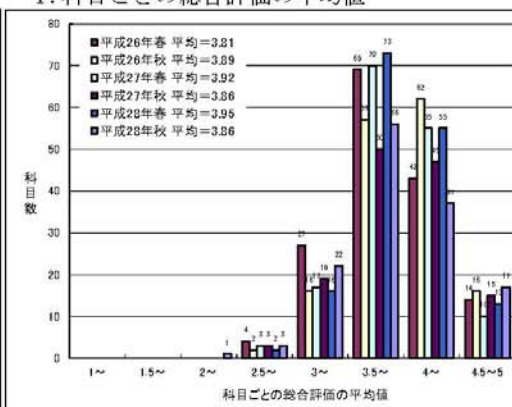
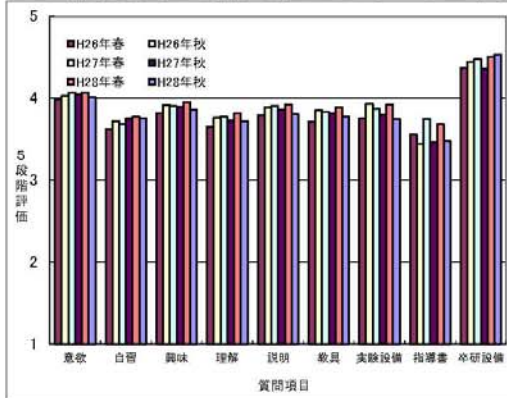
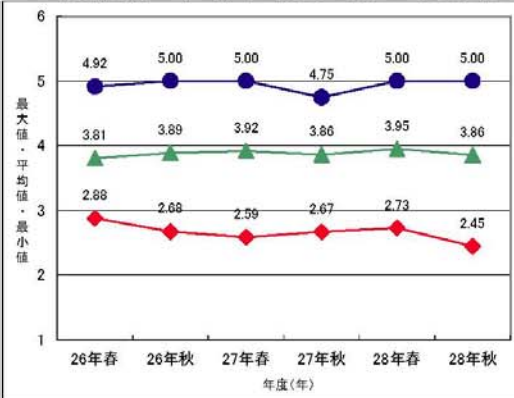


図 7-1 平成 28 年度秋学期学生による授業評価アンケート集計結果

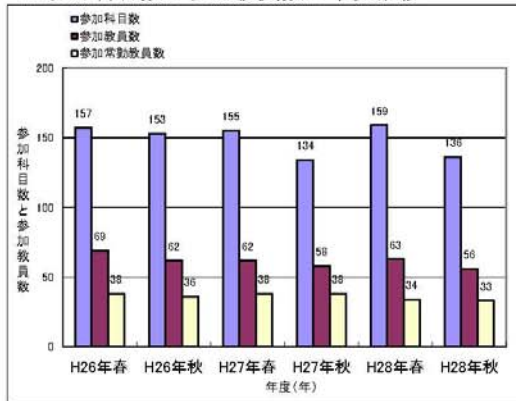
5. 全科目を通して回収されたアンケートの平均



6. 授業評価の平均値、最大、最小の年次推移



7. 参加科目数と参加教員数の年次推移



8. 質問項目と評価方法

学生の取り組み

- 1 授業には意欲的に取り組んだと思いますか(意欲)
- 2 授業に向けて予習・復習はしましたか(自習)

科目の内容

- 3 授業内容に興味は持てましたか(興味)
- 4 授業内容は理解できたと思いますか(理解)

指導方法

- 5 教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか(説明)

A 講義・演習

- 6 教具(OHPなど)・板書は見やすかったですか(教具)

B 実験科目

- 7 実験設備は整っていましたか(実験設備)
- 8 指導書は分かりやすかったですか(指導書)

C 卒業研究

- 9 研究設備は整っていましたか(卒研設備)

評価方法

- 5 : 強くそう思う(非常に良い)
- 4 : ややそう思う(良い)
- 3 : どちらとも言えない(普通)
- 2 : あまりそう思わない(あまり良くない)
- 1 : 全くそう思わない(良くない)

図 7-2 平成 28 年度秋学期学生による授業評価アンケート集計結果

(3-8) 学外セミナー・現況調査等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

現状における学生教育に関する課題、あるいは今後の教務上の改正にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容を FD 活動に活用する。

② 到達目標

参加研修等の内容を、本学工学部の学生学修指導に効果的に活用できるよう、その方策を検討することである。

③ 活動内容

当初以下の計画で実施予定であった。

派遣先：大学コンソーシアム京都主催 第 22 回 FD フォーラム

開催日：平成 29 年 3 月 4・5 日

派遣者：1～2 名検討中

派遣後の報告：工学部 FD 研修会

事情により、以下に変更した。

・下記会合に工学部長 相原教授が参加した。

派遣先：教育改革 FD/ICT 理事長・学長等会議

開催日：平成 28 年 8 月 1 日

派遣者：工学部長 相原教授

・下記学外セミナーに工学部 FD 委員（黒田）が参加・報告（共著）した。

派遣先：第 23 回大学教育研究フォーラム

日時：平成 29 年 3 月 20 日（月）09：00～13：30 個人研究発表

発表題目等：小島佐恵子・伊藤良二・黒田 潔・藤枝由美子・三村真紀子・南島永衣子、2017、「ティーチング・ポートフォリオを活用した教育活動の振り返りー全学プロジェクトの立ち上げと組織的運営の課題ー」

会場：京都大学 吉田南総合館北棟／1 号館

主催：京都大学高等教育研究開発推進センター

協賛：学校法人 河合塾教育イノベーション本部、関西地区 FD 連絡協議会

④ 評価

ティーチング・ポートフォリオ（以下、TP）の全学的な導入とその組織的運営に伴う課題を中心に報告した。高等教育における教育改善や質保証が求められる中、TP はその具体策として浸透しつつある。今回は、玉川大学における全学的な TP 導入の経緯とワークショップ事例（離散型・集中型）の概要を紹介するとともに、課題の整理を行った（以上要旨集から抜粋）。参加報告は工学部 FD 研修会にて実施することが基本であるが、研修会の時間の制約から省略し、資料等は必要に応じて学科会における報告や個別の報告回覧等により、活用されている。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算に計上し、項目は「FD 研修会参加費」であった。

4 昨年度（平成 27 年度）に提案された予定・課題の達成度について

（1）Tamagawa Vision 2020 の実現へ向けた課題

昨年度報告では、①16 単位キャップ制および GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムにおける指導上の問題点の認識や結果の評価と効果的な改善を継続することと、②“学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり”の目的のもと、アクティブ・ラーニング等への対応の検討を実施することを課題とした。

①の改善の継続は、確実に継続中である。②のアクティブ・ラーニング等への対応の検討は、現在端緒についたばかりであり、今後の動向に期待したい。しかしながら、例年 2 月に開催される学内の「大学教育力研修（FD・SD）」においては実践的な内容が既に工学部から複数件発信され続けており、拙速ではない着実な発展が望まれる。全学的な研修会も数多く開催されており、その気になれば授業再検討はそれほど難しくない。一方、アクティブ・ラーニングがその方法を目的化すると失敗することが多く言われている。これは学生を前にして木を見て森を見ない行為であり、要は学生が自らの頭で物事を考える姿勢の涵養が重要となる。そのための授業方法であれば、おそらくそれは種類を問わない。定型的方法は目的化しやすく、各教員が独自の立場で教育実践を実施するしかない。そういう意味で、ティーチング・ポートフォリオの作成はそれに資するものと考えられる。

（2）現状における課題

昨年度報告では、まず、入学生の学力不足対応の充実化、基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応、高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり、等が課題として挙げられた。これらは抽象的表現にとどまっており、より実践的な対策が必要である。そのための FD 活動が本稿で記載した、特に、工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価アンケートの三つである。ここでの議論による教員同士のコミュニケーションが教員に多くの気づきをもたらす。

学生が実際にアクティブ・ラーニングにより能動的に考察するには、実はその前に考える材料となる知識や姿勢が重要である。この部分が欠けているというのが、現場の教員の率直な感想である。こういった基礎知識は教え込むと受容可能か？と問われれば、実はそれも難しい。そうなるとそのための、つまり基礎知識の取得にもアクティブ・ラーニングが必要となる。ここまできると、教育すべき事項は一体何か、という疑念が持ち上がるが、その答えもまたティーチング・ポートフォリオの作成により少し解氷するかもしれない。いずれにしても、常日頃の PDC(S)A サイクルは循環しており、達成度は継続中である。

他に、新設学科対応が課題として挙げられていた。エンジニアリングデザイン学科は 2 年目を終え、大体の様子は他学科とそう大きく変わらないことが明らかになってきた。また来年度は情報通信工学科が新設されるが、機械情報システム学科の募集停止による新設なので機械情報システム学科的な様子が継承される可能性が高い。そのために、学科発足に先立ち、学科所属教員による事前打ち合わせが頻繁に実施されており、達成度は継続中である。

（3）FD 活動の在り方に関する課題

工学部 FD 研修会は年度に 2 回開催されているが、教授会の直前に実施していることもあり、教員の参加率は非常に高く、時によっては活発な議論が行われている。このことは、「教員の教育力の向上」にとって高い評価をして良いことであり、絶え間なく実施し

PDC(S)A サイクルの循環とともに継続的課題である。

参観授業については、参加者が極めて少ない状況は依然として続いており、これに関してはなかなか改善しない。他の授業が入っていたり、他の活動が多かったり、多忙な教員にとって時間を空けることはそれなりに難しい。検討継続予定である。

授業評価アンケートについて、完全実施とならない現状は改善しない。多くは非常勤講師によるが非実施であるが、これは無理からぬところもあり、最低限、専任教員が完全実施となればよいと考えている。現状はそれにほぼ近く、達成度が高いと考えられる。

5 今後（平成 29 年度以降）の予定・課題について

(1) Tamagawa Vision 2020 の実現へ向けた課題

これまで通り 16 単位キャップ制、および GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムにおける、指導上の問題点の認識や結果の評価を継続し、効果的な改善を継続することが課題である。同様にアクティブ・ラーニング等への対応の検討を継続・実施が課題である。アクティブ・ラーニング等の精密化については、昨年度同様に全学の動きと歩調を合わせ、手段が目的化することのないように努めつつ、またこれらが、学生が能動的自主的に実施する学修とその成果に資するような活動であることを継続して担保していくことが重要と考えられる。

(2) 現状における課題

課題は昨年度とほぼ同じである。基本的には、入学生の学力不足対応の充実化、基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応、高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり、等の PDC(S)A が求められる。また、平成 29 年度設置計画中の情報通信工学科への新入学生の学修環境整備体制の工学部全体として適切な準備が必要である。

(3) FD 活動の在り方に関する課題

課題は昨年度とほぼ同じである。最重要活動の工学部 FD 研修会に関しては、16 単位キャップ制、および GPA による警告制度に主眼を置いてきた、従来の実施のプロセスで大きな問題はないと考えられる。しかしながら発足から 4 年がたち、そろそろ学生の学修すべき内容自体について深く考察する時期であると考えられる。本学工学部では、学生の学修状況の把握に努めつつ、どのような学生を育てるべきか、という根本に立ち返った議論ができるよう、内容の再検討をすべきと思われる。

授業評価検討会および工学部授業評価検討会は、学科内および学科間での教員のコミュニケーション体制として重要である。学科ごとのカリキュラムポリシーおよびディプロマポリシーを念頭に、目指す方向を学科教員が共通して確認することが継続課題である。

学生による授業評価アンケートに関しても、従来どおり継続する。完全実施とすることが課題として挙げられるが、専任教員には周知徹底されているので大きな問題はない。非常勤講師の先生方に関しては、アンケート用紙の配布法など再検討を要す。

アクティブ・ラーニング等の精密化については、できるだけ多くの教員がこれに興味関心を持ち、授業評価アンケートの結果とティーチング・ポートフォリオの作成による自己省察の結果から学生の能動的学修に資する授業形態となるよう、環境整備に努めることが課題である。

§ 経営学部

1 FD 活動への取組理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部—少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、教務主任、国際経営学科主任、学生主任、FD 担当が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と FD 担当は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。

3 平成 28 年度の活動内容

(1) 研修会（平成 28 年 6 月 2 日）

① 概要（目的を含む）

ビジョン、ミッション及び教育課程に沿った専門教育と学修支援のあり方を検討するために、大学コンソーシアム京都主催第 21 回 FD フォーラム参加報告を起点として研修会を実施した。

② 到達目標

実践的な内容を予定している授業の進め方を具体的に示す。

③ 活動内容

長谷川英伸助教による報告を踏まえて議論を進めた。今回のフォーラムのテーマでもあった「大学教育を再考する～イマドキから見えるカタチ～」のシンポジウムと地域との連携を意識した教育活動に関する分科会の報告であった。

④ 評価

シンポジウムに関する報告のなかで退学者を減少させる取組の紹介に関連して、学生支援のあり方に関心が寄せられた。入学後、学生が進路を変更する前にどのような支援が可能かを引き続き検討する必要がある。一方で地域または学外との連携を含めて授業の進め方について踏み込んだ議論には至らなかった。

(2) 研修会（平成 28 年 7 月 7 日）

① 概要（目的を含む）

近年の受験動向を今後の学修プログラム開発につなげるために、経済・商・経営系学部を巡る受験動向と玉川大学経営学部の現状について研修会を実施した。

② 到達目標

- ・ 経済・商・経営系学部の入学希望者の動向を知る。
- ・ Dual Language Program (DLP) による学修プログラムの深化を図る。

③ 活動内容

まず予備校等を運営する企業から講師を招聘して入学希望者の動向について講演していただき、ここ数年の受験者の動向と他大学の最近の取組を伺った。受験者の動向としてあまり大きな変動は見られなかった。グローバルビジネス、国際会計、マーケティング戦略の各コースと同様の他大学ではバイリンガルのビジネスリーダーの養成、留学プログラム、公認会計士・税理士・FP等の資格取得支援が実施されていることを共有した。この他、フィールドワークやインターンシップ、産学連携の紹介があった。これを受けて教育プログラム及び学修支援のあり方を検討した。

④ 評価

本学と競合校の状況を中心に、経済・商・経営系学部の入学希望者の動向を知ることができた。また新たな教育プログラムに移行して2年であるため卒業を基準に明確な成果を得ることはできないが、学部・学科として、他大学との差別化を図り各コースの特徴を生かすプログラムをより詳細に検討するきっかけになった。受験市場におけるプログラム移行への本格的な評価はこれからであろう。

(3) 研修会（平成 28 年 12 月 1 日）

① 概要（目的を含む）

コースプログラムにおいて英語力及び専門性を高めるための授業を設計するために、平成 27 年度以降入学生の 3 コース制の学修実績及び計画等の進捗状況を確認し、平成 27 年度以降入学生の 3 年次ゼミナール科目の授業のあり方を検討した。

② 到達目標

- ・外部試験の受験を含めて学修を促進するための方法を示す。
- ・コース及び授業の目標にあわせた授業の進め方を示す。

③ 活動内容

平成 27 年度開始の教育プログラムにおけるこれまでの実績を共有した。とくに英語とコース別目標の達成度を確認し、今後の学修支援の進め方を検討した。3 年次のゼミナールの位置づけはこれまでと変わり、専門基礎ゼミナール A/B の延長線上に位置づけてコース別に授業を展開することを確認した。

④ 評価

英語力を高める必要があるという意見が多かった。この点は昨年度と同様に大きな課題になっている。3 年次以降、教材、講義等、英語で専門分野を学修する授業が増加する一方で英語の力を高めることを主たる目的とした授業が減少するため、学修が進んでいない学生への支援も必要になってくる。履修指導、他部署との連携など、学生の英語力向上の具体的な方法を検討する。

(4) 講演会（平成 28 年 12 月 1 日）

本学文学部 岡本裕一朗教授の著書『いま世界の哲学者が考えていること』（ダイヤモンド社）の出版を記念して、文学部、経営学部、文学研究科、マネジメント研究科、学術研究所人文科学研究センターの共催で、講演会「21 世紀における哲学の挑戦」を実施した。企業経営者にも広く読まれており、経営、経営学教育において求められる社会を見る目を養う貴重な機会になった。著書でも AI、生命倫理、仮想通貨、フィン

テック革命といった社会的・経済的、また企業経営に関する題材が取り上げられているが、講演ではより現実的にさらに踏み込んだ質疑応答があった。人間は AI とどう共存するのかといった、社会においてルールをどのようにするのか、そもそも人間はルールをつくり AI と共有することができるのかといった質疑もあった。講演会後にも取り上げられた題材について教員間で議論が続いた。われわれ教員が教育・研究に取り組むうえでより深く考えるべき課題に満ちていた証左である。

(5) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業評価アンケートを実施している。春学期・秋学期ともに実施した。

② 到達目標

学生の学修状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③ 活動内容

独自の方法で実施している科目及び演習科目を除く経営学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。マーク式の集計は外部業者に依頼し、その結果を科目担当者別に配付して FD 活動に活用するよう継続的に呼び掛けている。記述式は科目担当者が個別に活用している。

④ 評価

アンケートの活用は課題である。アクティブ・ラーニング推進の動向が加速するなかで、学外のフォーラムにおける事例報告なども参考にしながら今後の取組を検討したい。

(6) 学外セミナー等への教員派遣

大学コンソーシアム京都主催第 22 回 FD フォーラムに石田万由里准教授、神谷渉准教授が参加した。平成 29 年度 FD 研修会において報告と討議を予定している。

4 昨年度（平成 27 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に設定した予定は概ね達成できている。上記の他、今年度は本学顧問弁護士を講師とし、事例を中心としたハラスメント防止研修会を実施した。

これまで教育技法の修得を中心に FD 活動を進めてきたが、ここ 2、3 年はコースプログラムにおける授業方法と学修支援のあり方をより多く取り上げている。また FD 活動を通して教員間で意見を交換する機会も多くなっている。検定試験合格支援制度の利用では今年度も TOEIC、簿記、BATIC（国際会計検定）[®]の合格者による申請が多かった。平成 29 年度から資格取得・検定試験合格による単位認定を開始する。学生が切磋琢磨するとともに各コースの特徴を生かした学修とキャリア形成に資する取組を強化したい。

現在、学修意欲の低下・成績不振の学生は少なくない。日頃の学修を十分に支援することが退学者の減少につながると期待して、継続的・段階的に支援体制を検討する必要がある。

5 今後（平成 29 年度以降）の予定・課題について

平成 27 年度入学生から始まった教育プログラムで少しずつ成果が出始めている。研修会を通して教員間の議論も活発になっている。教育活動のより一層の拡充を図るために、まずは経営学部の教員がさまざまな研修に積極的に参加することが求められるであろう。教育課程、コースプログラム、教育方法と成果を関連づけ、その結果を今後どのように教育実践として展開するかについてさらに議論を深めたい。

教育技法、教育評価等に関しては全学的に各年度の研修、ルーブリックによる評価の導入、web における授業アンケートの実施の計画が進んでいる。経営学部における教育にあうものについてはこうした機会をうまく利用したい。

DP、CP、AP とアセスメント・ポリシー、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーに沿って、引き続き FD 活動を推進する。

§ 教育学部

1 FD 活動への取組理念・目標

本年度の FD 活動への取組理念・目標は、平成 27 年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェSSIONALの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及び FD 委員、通信教育部長、通信教育部教務主任、FD 委員の 8 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 委員会が学部における FD 活動計画(企画・運営)の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項を教授会への議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

3 平成 28 年度の活動内容

(1) 研修会等

【通学課程】

① 概要（目的を含む）

前年度に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、講演会に参加した。

② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取組や課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かしていく。また日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、また参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

③ 活動内容

以下のようにほぼ毎月、教授会開催前の 15 分～30 分を利用して研修会・講習会を開催し、教員の授業法や Blackboard (Bb) の使用方法、また発達障がい傾向にある大学生の理解やハラスメントの理解への知識の提供を行った。

春学期	種類	研修内容
6 月	研修会	「発達障がい傾向にある大学生についての理解」 講 師 : 西田麻野氏 (首都大学東京・博士課程後期) 実施日 : 平成 28 年 6 月 20 日 (月) 場 所 : 大学 1 号館 205 教室 時 間 : 11 時 00 分～12 時 30 分
7 月	研修会	「Bb 使用事例 1: 発表評価ツールとしてのアンケート機能の活用」 講 師 : 小島佐恵子 (教育学部) 実施日 : 平成 28 年 7 月 20 日 (水) 場 所 : 大学研究室棟 B104 会議室 時 間 : 17 時 15 分～17 時 30 分 (約 15 分)

9月	研修会	「小学校におけるアクティブ・ラーニング」 講師：石井恭子（教育学部） 実施日：平成28年9月21日（水） 場所：大学研究室棟 B104 会議室 時間：11時30分～11時50分（約20分）
9月	講習会	「救急救命」講習会 講師：山田信幸（教育学部）、国見保夫（教育学部） 実施日：平成28年9月21日（水） 場所：大学研究室棟 B104 会議室 時間：15時00分～16時00分（約60分）
11月	研修会	「オンラインビデオ（講義ビデオ）の作成」 講師：田畑忍（通信教育部） 実施日：平成28年11月23日（水） 場所：大学研究室棟 B104 会議室 時間：17時15分～17時35分（約20分）
12月	研修会	「Bbのディスカッションボードの活用」 講師：大谷千恵（教育学部） 実施日：平成28年12月21日（水） 場所：大学研究室棟 B104 会議室 時間：17時15分～17時30分（約15分）
2月	研修会	「ハラスメントについての講習」 講師：桑島英美（本学園顧問弁護士） 実施日：平成29年2月1日（水） 場所：大学研究室棟 B104 会議室 時間：17時15分～17時45分（約30分）

④ 評価

各研修会については、15分から30分以内という短い時間ではあるが、新しい授業手法や技術などの修得が感じられ、教員間で共有することができたことは成果であろうかと思われる。これらを通して、日常のなかで知識の定着・確認、知識の活用・創造に効果的なアクティブ・ラーニングの在り方及び組織的に推進していくための教学マネジメントの工夫について、社会と連携した発想型のアクティブ・ラーニングや、汎用的能力と専門的能力の獲得に向けた教育プログラムのテーマで意見交換を行うことができた。また、教員同士のコミュニケーションが活発となり、新しく取り入れた技術などをお互いに教えあう文化が生まれたのは、望ましい成果であろうかと思う。

(2) 学生による授業評価アンケート

【通学課程】

① 概要（目的を含む）

学生による授業評価（教育学部では「リフレクションシート」と称す）を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクション

シートを実施する。ただし授業評価アンケート実施日の出席者が 10 名未満の授業については集計せず、各担当教員が授業改善のために活用する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善および学生の傾向や課題の共有につなげる。

③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業評価アンケート（リフレクションシート）を実施した。

④ 評価

授業評価のアンケート結果は各授業のみならず、学部全体の平均値と比較できるようにし、学生の傾向や課題を各教員が共有することができた。また教育学部における授業評価のアンケート結果は各設問とも概ね高い評価を得ることができた。この結果は各教員の日頃の授業改善の賜物ではあるが、実施するアンケート内容の周知により、明確な評価基準として、教員の意識改革につながり、さらなる授業改善につながったと言える。

一方、前年度に引き続いて予習・復習の時間に関しては他項目よりも低くなっている。ただし、あくまでも平均であり、個々の授業特性および学生の予習や復習に対する時間的な意識の違いがあることや 10 名以下の授業の削除等の考慮も加味した上での評価と考えるべきである。この点に関してはアンケート設問内容の改善や設問に対する説明を加えるなど検討したい。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全教員が実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックするとともに、『玉川通信』で学生に公表する。目的は、各授業担当者が新年度に向けて授業改善することにある。

② 到達目標

- ・専任教員、非常勤講師を問わず、すべての授業において学生による授業評価アンケートを実施する。
- ・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

③ 活動内容

- ・夏期スクーリングにおいて、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての授業（一部の実技系科目を除く 92 科目）について、授業評価アンケートを実施した。回答数は延べ 2,740 名。
- ・質問内容は、前年度と同一のものを使用した。

④ 評価

各授業の結果は、全教員の結果をグラフ化したものと比較できる形で、通信教育部の全教員に配付し、結果と課題を共有することができた。また、補助教材『玉川通信』で結果の概要を学生に公表した。

授業評価の内容であるが、各設問とも概ね高い評価を得ている。今年は「自分は積極的に授業に取り組んだ」という自己評価について肯定的に答えた人の比率が高かつ

た。また、授業評価では「授業の目標が明確」「授業は知的な興味・関心を引いた、または技能を向上させた」「学生への対応・配慮」といった項目が高い評価を得た。予習時間に関しては科目によりばらつきが多かった。若干低めの評価となった項目としては、「学修目標を達成」「各回の授業の進捗」「各回の授業の学修量」「授業時間内に自分の考えや意見をまとめたり、学びを深めたりする機会や時間」といった項目があった。6日間短期集中型という学修形態のため、必ずしも十分な予習・復習の時間が確保できないという制約の中で、授業時間内にいかにして学修内容の定着・深化を図り学修目標を達成するかという課題が浮き彫りとなった。

また、クロス分析を試みた結果、「自分は積極的に授業に取り組んだ」に対する回答とそれ以外の各設問への回答との間には、明確に相関関係（積極性の高い学生ほど、各設問に対しても前向きな回答をするという傾向）があった。これは予想されたところではあるが、授業者には積極的に参加したくなるような授業が求められているといえよう。

(3) 教職員相互の授業公開と参観

【通学課程・通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

教員相互の授業参観を実施し、各自の教授法、教授内容についての振り返りを行い、授業改善につなげる。また関連する科目の教授内容の調整を検討する機会とする。

② 到達目標

大学FD委員会の提案に合わせ、通学課程は5名、通信教育課程は最低1名の教員が授業参観を行う。公開した教員の教育内容の振り返り、教授法の改善を図るとともに、参観した者の授業改善へ寄与することとする。

③ 活動内容

通学課程は教員4名の協力を得て、4つの授業の授業公開と参観を行った。

通信教育課程は教員1名の協力を得て、1つの授業の授業公開と参観を行った。

④ 評価

通学課程は若手・中堅および熟練者の授業参観を実施することができた。実施においては、多忙な大学教員の業務を考慮し、全100分の参観でなくとも良いこととしたが、参観者は前年度と同様に少なく、時間設定の方法や実施の在り方についての再検討が必要と思われる。しかし参観期間中の参加者数は少なかったが、参観期間に限らず、気兼ねなく教員同士がいつでも授業を参観できる環境・雰囲気は教育学部内で形成されている。特に関連する科目や共通科目が主ではあるが、教員間の教授法、教授内容についての意見交換が行われるようになったことは、授業公開を実施することの意義や成果の一つとして挙げられる。また、非常勤教員からの参観への参加があったことも意義深いと思われる。

通信教育課程は、昨年度のPR不足の反省を踏まえて積極的に授業公開への参加を呼びかけたが、結果的には本年度も1名・1件にとどまった。ただ、公開時期が秋学期だったので、春学期の授業なら公開したいという教員もおり、今後の課題としたい。

(4) FD 研修

【通学課程】

1) 鹿児島研修

① 概要

玉川学園創設者小原國芳の生誕地を訪問することにより、参加した教員同士が学び合い、各自が今後の教育活動、研究活動の活性化を図ることを目的とした教員自主企画および学部企画の学外（鹿児島）FD 研修「玉川学園の歴史および玉川の教育の背景」を実施した。自校の歴史や建学の精神を再確認し、玉川大学における全人教育の意義について理解を深めることを目的とした

② 到達目標

自校史の理解促進や鹿児島県の小原國芳生誕地等を巡りながらの玉川大学の歴史や建学の精神を学ぶと共に玉川の教員としての誇りを持ち、日々の教育活動につなげていく。また教育学部の教員間で小原國芳の生き方や信念を共有し、愛校心を高めることを目的とする。

③ 活動内容

本研修においては大隅半島から薩摩半島を 2 日で訪問するという強行軍の行程であったが、鹿児島時代の小原國芳に所縁ある多くの地を訪れることができ大変充実した。途中予定していたフェリーが欠航となり、天候に左右されやすいフェリー移動のデメリットが露呈したが、大型タクシー1 台で移動できたことにより大きな予定変更なく実施できた。公共交通手段は万が一に備え、計画時に予備対策を考えておく必要性を感じた。

研修内容を振り返ると現地の風土や自校史の背景を深く知る上で、石橋哲成先生に作成いただいた資料が大きな効果をもった。この資料をもとに事前学習をすることにより、現地での研修が客観性だけでなく、より五感で感得できたことは学外研修ならではの成果と言える。また石橋先生の解説により長い移動の車中も大変有意義な研修が実現できた。しかし石橋先生に代わる人材はいないとしながらも、今後発展的にこのような研修を計画できるようにしなければならない。

久志農場においては新設される寮の工事も視察した。FD 研修に留まらず学生に対する自校教育など鹿児島における拠点として期待ができる。（文責・朝日）

④ 評価

学部教員が創立者の生誕地である鹿児島を訪れ、その教育者としての原点に触れ、本学の創立理念を再確認し、教員個人の資質向上および学部組織としての教育力向上につながるものとなった。また多くの私大で進められる自校史教育の意義を確認することができ、教育学部としての新たなミッションや教育内容を構築する機会となり、今後の大学における教育活動に大きく寄与することが期待できる。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

本課程では、教員数が少なく独自の FD 研修を実施するのが難しいため、随時各種の学外 FD 研修の情報を提供するとともに、1 月に積極的な参加を呼びかけた。

② 到達目標

本校の全学で行われる FD 研修のほかに、専任教員の各自の問題意識にあった学外 FD 研修に参加することで、日々の教育活動の向上を図ることを目的とする。

③ 活動内容

「第 22 回 FD フォーラム」(3 月 4 日～5 日、京都府立大学)に 1 名参加。

④ 評価

結果としては学外研修への参加は 1 件にとどまったが、個人的な問い合わせなどもあり、反応は良かったと思われる。新年度は引き続き積極的な参加を呼びかけると共に、よりきめ細かに情報提供を行っていききたい。

4 昨年度(平成 27 年度)に提案された予定・課題の達成度について

【通学課程】

授業評価アンケートの全科目(専任・非常勤)実施を目標にしていたが、春学期には発注ミスにより一部の授業において実施できなかった。また、秋学期にも発注ミスがあり、最終授業に間に合わない事例がいくつかあった。これらは、FD 委員が発注に関する手順を見直すことで解決できる予定である。教育学部は、学部独自の教育課題を追及する学部企画 FD 研修を行っている。鹿児島の小原記念館を訪れ、創立者の理念を再確認し、教員個人の資質向上および学部組織としての教育力の向上につながったと言える。

また平成 25 年度より 16 単位キャップ制の導入など新しい大学教育において、これまで以上に教員間の信頼と協力・連携が必要である中、FD 活動や研修を機に多くの場面で学部教員が玉川大学や学生のため、より良い教育実践について意見交換を多く持つことができるようになったことも成果の一つであり、学部組織としての教育力の向上につながるものと思われる。

【通信教育課程】

スクーリングの授業評価アンケートは、授業者の多寡によらず原則として全科目で実施することができた。また、設問の内容を通学課程や他学部のものを見直してから 3 年連続で同一項目でデータを取っているため、経年変化の分析や、通学課程や他大学などの授業評価とある程度の比較は可能になったのであるが、時間がなく実施できなかった。次年度以降の課題としたい。

テキスト学修科目のアンケートについては、前年度に見送りを決めて以降、特段の進展はなかった。

5 今後(平成 29 年度以降)の予定・課題について

【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。授業評価アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。

教員の重要な職務である研究活動の活性化のために、文科省及び学術振興会の科学研究

費申請のための勉強会は今後も必要であり、平成 29 年度も開催予定である。

FD 研修の一つである鹿児島研修において学部教員が創立者の生誕地である鹿児島を訪れ、その教育者としての原点に触れることは大きな意義がある。とりわけ私学においては創立者の建学の精神を教育の出発点としているため、その精神を教職員や学生が共有することが大学教育の成果にも大きく影響すると考えられ、昨今「自校史教育」の重要性が強調されている。さらに教育学部では学生たちが創立者・小原國芳の教育精神を学ぶ機会を授業や行事など多数設けており、今後もその充実が求められている。そのため今後の大学における教育活動に大きく寄与する鹿児島研修は今後も引き続き行っていく予定である。特に新任教員には学外出身者も多く、このような研修の機会を設けることは玉川教育の精神を全教員間で共有するためにも必要であると考えられる。

【通信教育課程】

スクーリング科目については引き続き授業評価アンケートを実施する。通学課程や他大学などの授業評価との比較や、同一科目・同一教員の経年経過の分析も試みてみたい。また、テキスト学修科目についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる何らかの方法を検討したい。

§ 芸術学部

1 FD 活動への取組理念・目標

芸術学部のミッションは「芸術による社会貢献の実践力を育成する」であるが、現代の社会は経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化といった社会の変化が労働市場や産業・就業構造の流動化となって進行している。このような時代にあっては、我が国の人口動態も踏まえつつ、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していく必要がある。世論調査によると、国民の60%が世界に通用する人材や企業、社会が求めている人材を大学は育てているかの質問に否定的な回答をしているように、人材養成や研究の目的が社会の要求と乖離していると指摘されている。特に芸術や研究分野は新産業分野でも期待される感性や想像力などの育成と深くかかわり、豊かな創造力と人材養成を以て、社会の発展や改善に貢献できることを使命としている。

そのためには、従来の教育や福祉はもとより、芸術と産業分野との関連性と活用が高まっているように、常に社会とのかかわりを意識しながら教育体制や教授法の改善・開発をおこない、社会の要請に応えうる柔軟性、機動性をもった組織として教員団を編成しなければならない。また、学修の修得主義を推進していくためには、学生を主体とした授業方法の研究や、総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部との連携授業などを推進すると共に、教員団のチーム力形成が重要である。そのためには次のような4つの目標が考えられる。①情報収集力、②得た情報から問題や課題を発見する複眼的な分析力、③発見した問題や課題を共有し、教員個人の問題や課題とする仕組み、④問題や課題を解決するチーム力(チーム学校)の形成、⑤修得主義の実践が重要と考える。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及びFD委員がFD活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会で情報の共有や分析をおこない、目標や課題の設定、及び手段などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果、及び方策等を拡大教授会で報告し、全学部教職員の組織的な取組とする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部FDの中核メンバーであるので、学科内の取組をまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動してFD活動を推進させている。主任会構成員および大学FD委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達、及び他学部・他大学におけるFD活動の情報収集を行うと共に、学部内の情報共有を図り、FDの組織的活動が円滑におこなわれる役割を担っている。

3 平成28年度の活動報告

(1) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

① 概要・活動内容(目的を含む)

平成28年度は予定通り年2回の授業アンケートが芸術学部で開講されている全ての授業について実施された。個々の科目に関するデータおよび統計的データの全てを、Blackboardを通じて学部内の全学生および学部内の全教員に公開する。また、個々の科目についてのデータは伏せつつ、統計的データを、持ち出し不可の冊子として一

般の閲覧に供することを検討している。さらに、各学科の専門科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめた授業成果報告書などを作成している。

② 到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、学部運営に活かすと共に今後の FD 活動の方向性を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

③ 評価

本年度も昨年度に引き続き 2 年次以降の専門科目に関して授業報告書を作成し、様々な情報を共有しつつ、今後の教育方針に関する議論の土台を築くことができた。また、授業アンケートの結果に関しては、芸術学部の拡大教授会において、その結果を報告するとともに、学生の学修状況、その傾向などについての情報を共有することが出来た。

(2) 学外セミナー等への教員派遣

1)

① 概要（目的を含む）

全国私立大学教職課程協会の研究大会（日程：5 月 27 日、28 日／会場：京都市勧業館、京都精華大学）に中村慎一教授を派遣し、「中央教育審議会答申と今後の教員養成施策の展開」及び「課程認定に係る近年の動向と留意事項」についての情報収集と養成校との意見交換を行う。

② 到達目標

私立大学における教職課程の在り方や養成大学の課題や対応についての情報収集や方策についての情報を得る。

③ 活動内容

文科省初等中等局長、同教職員課員より施策や政策実施スケジュール、申請等の留意事項を聞くことが出来た。また、分科会に参加をして他大学の養成課程の実情や養成に携わる教員と意見交換を行うことが出来た。

④ 評価

課程科目を担保する教員の研究業績、シラバス整備、カリキュラムの体系性などの課題を改めて確認することが出来た。得た情報は養成に携わる教員と共有し、教師教育リサーチセンターとの連携を図りながら課程認定や実地視察に備える有益な情報が得られた。

2)

① 概要（目的を含む）

玉川学園・追手門学院共同研修会（8 月 2 日、3 日）に中村慎一教授が参加をした。

② 到達目標

追手門学院の施設や教育方法などの情報を収集すると共に、各校の良さや課題についての意見交換を行い各校の課題解決や発展につなげる。

③ 活動内容

追手門学院の理事長、学長、学部長、附属校の校長から追手門学院の特色や力を入れている教育の説明を受けた。また、演劇によるコミュニケーション基礎力養成とその体系的カリキュラムに関する実演と解説を見聞すると共に多様な意見交換を行った。

④ 評価

演劇によるコミュニケーション基礎力育成のカリキュラムや教育目標や成果を視覚的に伝達する展示施設などを見聞すると共に、様々な立場の先生方と意見交換を行うことによって多くの知見が得られた。また、自校史を学ぶことを通じて現在を正しく知り、未来を志向する意思が強く感じられ、本学の発展にも活かせる方策であることを感じた。

3)

① 概要(目的を含む)

アクティブ・ラーニング手法の研究及びイノベーション創出手法として認知されつつあるデザイン思考の教育への適用の可能性を検討するため、シンポジウム「三方良しと、デザイン思考」に教員派遣。平成 29 年 3 月 11 日(土)13:30~17:30 大阪ナレッジサロン 大阪市北区大深町 3-1 グランフロント大阪北館 7 階 主催：滋賀移住・交流促進協議会。

② 到達目標

デザイン思考の社会での活用、特に地方活性化のための問題解決としての効果を確認する。

③ 活動内容

大阪で開催されたシンポジウム「三方良しと、デザイン思考」に教員を派遣した。近畿周辺の参加者約 150 名（主に一般企業社会人）が集まり、パネラーの話を中心とした会であった。「分析思考（既知の問題解決：答えを導く）」と「デザイン思考（未知の機会の創造：問いを見つける）」の比較や、近江商人の商いの基本である三方良し（客よし、売り手よし、世間よし）の精神と人を中心としてとらえるデザイン思考の共通点、さらに、地域社会の活性化、地方創生まで幅広い話題であり、高等教育への適用に大きなヒントとなった。

④ 評価

実社会で実践されている事例を研究することで、大学教育による社会貢献の方向性の妥当性を検証することができる。常に変化する社会へ意識を向け続けるために、今後も定期的な研究を必要とする。

(3) 研修会

1)

① 概要(目的を含む)

「教職関連科目における授業形態の検討および再課程認定に向けての対策-その 2/再課程認定および新学習指導要領研修会-」平成 28 年 4 月 27 日(水)17:00~19:00 大

学教育棟 611/621 教室

教職担当が中心となり、教職課程に携わる教員にとって必要な情報を共有し、授業運営や業績作りの体制をつくる。

② 到達目標

- ・再課程認定の要点を知り、授業運営および業績作成に活かす手立てを考える
- ・新学習指導要領の動向を知り、授業運営および業績作成に活かす手立てを考える
- ・上記二点をふまえ、授業を実施し、業績をつくる

③ 活動内容

公表されている範囲の再課程認定の要点、新学習指導要領の動向を教職担当がまとめ、専任および非常勤講師（希望者）が情報を知る。その上で、前回行った「教職関連科目における授業形態の検討および再課程認定に向けての対策」の活動をふまえ、意見交換を行う。

意見交換では、つぎのことを要点とした。これまで実施してきた授業の利点、改善点を明確にし、他の教員からの参観した時の意見や他の教員が実施している授業方法を参考にし、これから実施する授業に反映できるように意識付けた。

また、自らの業績作りの際に、これまでの活動を反映させる方法を学修し、業績作りに着手するようにした。

（作成された業績は、今後、冊子にまとめる）

④ 評価

再課程認定にむけての業績を作ったり、新学習指導要領の動向をふまえて次年度の授業計画を立てたりする手立てを教員個人で行うのではなく、組織として動くことで体系的にカリキュラムを運営する姿勢が作られた。各専門分野を生かして、教職の各科目を運営していく際に、教員同士の情報開示や協力体制が必要である。また、信頼関係が作られていないと体系化は難しい。今回の研修を実施し、目標を達成する他に、こういった体系化の基礎作りができたと言える。

2)

① 概要（目的を含む）

芸術学部ハラスメント研修会(平成 28 年 10 月 27 日大学研究室棟 B104)を開催し、ハラスメントに関する理解を深めると共にハラスメントのない教育・職場環境を形成する。

② 到達目標

本学園におけるハラスメントの定義を確認し、大学におけるハラスメントの種類や加害者の分類について理解をする。またハラスメントの被害状況やどのような行為がハラスメントに該当するのかを理解し、働く人の心構え、加害者、被害者にならないための具体的行動を理解する。

③ 活動内容

学部の全教員を対象にして本学顧問弁護士が作成した「ハラスメントのない大学に-ハラスメントの防止に向けて-」を用いて、藤枝由美子玉川学園ハラスメント防止委員会委員が解説を行った。なお、非常勤教員に対しては同冊子を全員に配付した。

④ 評価

全専任教員及び非常勤教員(資料配付)に対してハラスメント防止の研修を行い、ハラスメントに関する正しい理解と防止に向けての情報共有と規範に沿った行動が出来る基礎研修となった。ハラスメント防止研修は望ましい教育・研究環境を形成する上で継続して実施すべきである。

3)

① 概要(目的を含む)

鷹峯陶芸教育実践報告

芸術学部芸術教育学科および教育博物館は平成 28 年 8 月～11 月にかけて、「21 世紀鷹峯フォーラム」の一環として、包括的な「陶芸教育プログラム」を考案、それに基づいたワークショップを、協同で実施した。「21 世紀鷹峯フォーラム」とは、日本の工芸の活性化を目標とした活動で、平成 27 年の京都を皮切りに、当年は東京、平成 29 年には金沢で行われる文化庁支援事業である。多数の美術館・博物館、大学、また産業界が連携して様々な事業を展開することによって、日本文化の発信を行っていることから、当方でも、その趣旨に賛同して、参加を試みた。

② 到達目標

広範な社会活動である「21 世紀鷹峯フォーラム」に参加することによって、芸術学部のミッションである社会貢献を実施することができる。次に芸術教育学科学生に対する効果的な教育方法を、社会との連携の中で具体的に実施することができる。また学内の別組織である、教育博物館との情報共有・協働をスムーズに行うことができる。さらに地域社会との連携を行い、地域とのネットワークおよびサステナブルなコミュニケーションの構築を促進することができる。

③ 活動内容

当方で行った活動は、「焼き物大好きの未来世代育成プログラム」と名付けられ、小学校 4～6 年生を対象に、[みる] (対話型鑑賞)、[さわる] (ハンズオン鑑賞)、[つくる] (制作)、[つかう] (家庭で使用)、[みせる] (博物館で展示) という 5 つのステージで構成し、包括的かつ連続的な工芸教育を実施したものである。それぞれのステージは、芸術教育学科美術・工芸コース教員及び学生と、教育博物館学芸員が、各々の専門性に基づいたアクティブ・ラーニング形式のプログラムを考案した。また町田市立博物館および教育博物館の資料活用による鑑賞教育と、陶芸制作という表現教育を有機的に連携した内容を考案し、文部科学省の提唱している美術教育の要請に応えた。

④ 評価

広範な文化活動の一翼を担うことによって、社会貢献の自覚を得ることができた。次に併設校および地域の小学生を対象としたワークショップを、近隣博物館や町田市青少年健全育成玉川学園地区委員会の協力のもとに行ったことによって、協働の教育方法を獲得することができた。さらに近年指摘されている総合的な美術教育法の展望を得ることができた。

4)

① 概要(目的を含む)

平成 28 年度芸術学部全体会(平成 29 年 3 月 23 日 玉川大学)を開催。芸術学部の専任教員と非常勤教員が学部の養成人材像と大学の方針を確認し、共通理解に基づき、チーム学校の一員として個々の教員が教育活動を推進することを目的としている。

② 到達目標

教育再生課題や大学の方針を理解し、学部の養成人材像実現のために必要な基礎情報や重点施策について理解する。

③ 活動内容

全体説明と所属各学科に分かれて専任と非常勤が一体となって次年度の教育活動を推進できるように打ち合わせを行うと共に、教員の親睦を図りチーム学校の体制を整える。

④ 評価

役割や担当科目が異なっても、チーム学校として同じ目的に向かって個々人が教育活動を推進することが出来る。

5)

① 概要(目的を含む)

デザイン・シンキング実践ワークショップ(平成 28 年 5 月 20 日 東京都千代田区外神田 4 丁目 秋葉原 UDX)に中島千絵准教授を派遣した。本ワークショップは、日経デザインが主催したものである。

② 到達目標

創造的思考としての「デザイン思考」に対する理解を深め、その考え方と実際的な適用方法を、演習を通して習得する。

③ 動内容

前半では、「イノベーションとイノベティブ」、「システムとデザイン思考」をキーワードに、新価値の創出のプロセスを身につける重要性についての解説がされた。後半では、グループワークによって、課題「コミュニケーションツールを考える」に対し、「問題定義」、「2×2 (Two-Axis)」、「インサイトの抽出」、「Value Graph」、「親和図法」「マトリックス法」などのメソッドをワークショップ形式で実践した。

④ 評価

ノウハウに終止することなく、デザイン思考の基本となるプロセスの構造を学ぶことができた。「2×2 (Two-Axis)」、「マトリックス法」を用いたコンセプトメイキングを、平成 28 年 10 月 13 日(木) 5 & 6 時限の「デザイン II」の授業時間において実践した。同授業は、芸術教育学科研究会「アクティブ・ラーニング参観授業」として公開され他の教職員と共有された。

(4) 調査・研究など

1)

① 概要(目的を含む)

第 53 回全国高等学校美術工芸教育研究大会(平成 28 年 8 月 18 日千葉県ポートブ

ラザ)へ中村慎一教授と椿敏幸准教授を派遣。全国から集まる高等学校教員による研究授業紹介およびワークショップ、生徒の作品展開催。現代は科学、産業、経済、芸術が統合して未来は築かれるという基調講演(外尾悦郎氏)があった。分科会では政策を反映したものや、アクティブ・ラーニングの成果をデータの的に証明しようとする研究発表や、柔軟な発想の教材研究発表などがあり、卒業生の教員の研究発表は秀逸であった。

② 到達目標

高等学校での美術科、工芸科指導の現状の掌握と問題点の収集。学部での教員養成の在り方を検証するための手がかりとする。

③ 活動内容

「伝える、受け取る～21世紀の美術、工芸教育」のテーマにて全体会、分科会での情報収集。研究授業やパネル展示、情報交換会にて高等学校教員との意見交換。

④ 評価

千葉県は全国でも工芸科を積極的に取り入れている県であり、他県の同大会に比して充実した議論が印象的であった。さらに、本学を卒業した複数の高等学校教員とも意見交換をすることができ、学部での教員養成推進の情報と課題を収集することができた。

4 昨年度(平成27年度)に提案された予定・課題の達成度について

セミナーへの教員派遣については、教員養成改革、教育制度改革の進行及び次世代人材養成へ対応が求められる状況で、社会の要求を踏まえた学部の運営や教育計画の実行に有効であった。

5 今後(平成29年度以降)の予定・課題について

芸術学部では各学科の教育活動を相互に参観することや協働体制を強化してきたが、各学科や各プロジェクトの横断性や学部を超えた連携はもとより、社会との連携を図り、理論と実践の往還による教育体制を推進し、現代ニーズに適合した人材養成機関と研究機関としての機能を高めるためにも、積極的かつ継続的に教員団の資質能力の向上を図る。

§ リベラルアーツ学部

1 FD 活動への取組理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

大学 FD 委員…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。

FD 研修会担当…学部で実施される専任教職員向けの FD 研修会についてコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3 平成 28 年度の活動内容

(1) 初年次教育の方向性に関する研修

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、次年度以降の 1 年次研修の具体的なプランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善することができる。

③ 活動内容

1 年次研修の 2 日目である平成 28 年 6 月 4 日（土）に湯本富士屋ホテルにて実施した。参加者は 1 年生担任教員、学部長、各主任であった。具体的には以下の各項目について検討を行った。

- ・次年度以降の新入生研修のあり方について
- ・新入生研修の成果のアウトプット方法について
- ・秋学期「一年次セミナー102」の日程と授業内容について

④ 評価

検討内容を実践に反映させるのは平成 29 年 4 月となるため、実質的な評価はそれ以降になるが、リベラルアーツ学部の初年次教育の要ともいえる 1 年次研修の内容について問題意識を共有できたことから、この時点での暫定的な目標達成はできたと考えられる。

(2) 「キャリアセミナー」の教育内容と方法の改善に関する研修

① 概要（目的を含む）

本学部 2 年生必修科目「キャリアセミナーⅠ」および「キャリアセミナーⅡ」の教育内容と教育方法を検討し、望ましいキャリア教育の在り方を考える。

② 到達目標

キャリア教育の一環として、この科目の教育内容・方法を具体的に改善することができる。

③ 活動内容

5 月 26 日、6 月 2 日、9 月 30 日、10 月 1 日、10 月 27 日の各日において、2 年生各クラス担任が参加し、教育内容・方法を改善するためのディスカッションと研修を実施した。

④ 評価

キャリア教育の在り方に関して教員間で問題意識を共有でき、実際の教育内容と方法を改善することができた。また、学生のキャリアに対する意識を高め、教育効果を上げることができたと考えられる。

(3) ハラスメント防止研修会

① 概要（目的を含む）

本学部教員のハラスメント(セクシャルハラスメント、アカデミックハラスメント、パワーハラスメント)に関する理解を深めるため研修会を実施し、その防止策および対応策について学ぶ。

② 到達目標

大学におけるハラスメントに関する理解を深め、ハラスメントのない教育・研究・職場環境を形成する。

③ 活動内容

平成 28 年 9 月 30 日(金)、大学教育棟 2014 7 階会議室において、本学園顧問弁護士桑島英美氏による講演と質疑応答を実施した。ハラスメントの具体的事例に基づいて、防止策と対応策について研修を行なった。

④ 評価

ハラスメントの具体的な事例から、日常の教育研究活動におけるハラスメントに関する基本姿勢と留意点を学ぶことができ、ハラスメントのない教育環境が形成されていると評価される。

(4) 平成 28 年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の教育理念を実現し、Tamagawa Vision 2020 に対応した大学教育の質保証を高めるため、学部の教育研究活動を点検調査し、専任教職員が認識を共有する。

② 到達目標

日頃の教育研究活動を教職員が点検し、教育目標や教育内容・方法、研究活動の在り方について教職員間で認識を共有することができる。

③ 活動内容

平成 29 年 2 月 27 日(月)、28 日(火)の両日、湯本富士屋ホテルにおいて専任教

職員による研修会を実施し、以下の各項目について集中的に検討した。

- (ア) リベラルアーツ学部の人材養成目的と3つのポリシーについて
- (イ) リベラルアーツ学部の新カリキュラムについて
- (ウ) メジャーの運用について
- (エ) 共同研究中間報告
 - ・リベラルアーツ学部学外実践実習における学修効果の質的研究
 - ・領域横断的な「場」づくりによる学際性の実践的研究
- (オ) 平成28年度教育活動の振り返りと次年度教育計画の検討

④ 評価

- (ア) 平成29年度からリベラルアーツ学部が改組される。その人材養成等教育研究に係る目的を確認し、それを実現するためのディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーについて教員間で共通認識を深め、問題点を議論することができた。
- (イ) 新カリキュラムの内容を把握し、その運用の仕方について検討することができた。
- (ウ) 各メジャーの具体的な運用の仕方について検討することができた。
- (エ) 共同研究中間報告では、本学部における函館プロジェクト、インターンシップ等の学外実践実習の学修効果に関する研究が報告され、今後のカリキュラム計画と運用に役立てることができた。また、学際性の実践的研究が報告され、本学部の特色である学際的教育・研究の在り方に関して議論を深めることができた。
- (オ) 平成28年度の教育活動を振り返ることにより改善点を捉えることができた。それを踏まえて29年度に予定される教育活動に関する検討を行い、具体的な教育計画を立案することができた。

以上の点から、極めて意義深い研修会であったと評価される。

(5) 学外FDセミナーへの参加

① 概要(目的を含む)

外部機関が主催するFDセミナーに本学部教職員が参加し、FDに関する研修を受けるとともに、大学教育やFD活動に関する最新の情報や研究動向を把握し、それを今後のFD活動に活かしていく。

② 到達目標

学外のFDセミナーに参加し、FDに関する最新の情報を得ることができる。

③ 活動内容

平成29年3月4日～5日に行われた公益財団法人大学コンソーシアム京都主催「第22回FDフォーラム」(於:京都コンサートホール他)へ本学部FD委員(小嶋)が参加し、「大学の教育力を発信する」等のセッションへ出席した。

平成29年3月25日に行われた「大学教育改革フォーラム in 東海」(於:名古屋、金城学院大学)へ本学部FD委員(小嶋)が参加し、「リーダーシップ教育とディープアクティブラーニング」等のセッションへ出席した。

④ 評価

大学教育とFDに関する最新の情報と他大学の活動状況を把握できた。特に、現代における教養教育改革の課題や新しいリーダーシップ教育に関する実践例と研究動向を知ることができたことは意義深かった。

4 昨年度（平成28年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

- ① これまでと同様、大学教育の質保証を図るため、FDに対する意識をより高めるとともに、インターラクティブな相互研修を基盤とするFD活動の機会を多く設け、本学部教員の資質向上を一層図り、近年の大学教育の変化に対応した教育力と研究力を一層高めていくことが第1の課題である。
- ② 学部運営のPDCA(PDSA)サイクルの中にFD活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していくことを検討したい。
- ③ 本学部と文学部の改組へ向けて、その方向性の検討と、学部学科の教育理念・教育目標の再検討、および教員間の問題意識の共有をいかに図るかが課題となろう。
- ④ アクティブ・ラーニングの本質を見極めた上で、科目の特性に応じて適切に取り入れ教育効果を高めていくことが昨年度に引き続き課題となる。さらにその教育効果を妥当性の高い方法で的確に捉えていくことが課題になると思われる。

以下、それぞれの達成度について振り返る。

- ① に関しては、FD研修会等の実施や日常的な教員相互のブリーフィングなどによってFDに対する意識は高まり、概ね実践されてきたと評価できるが、近年の大学教育の変化に対応した教育力と研究力の一層の向上を目指す試みが必要である。
- ② に関しては、概ね実践されているが十分とは言えず、引き続き検討すべき課題である。
- ③ に関しては、平成28年度にリベラルアーツ学部の改組作業が進められ、教育目標とカリキュラム等が定まり、29年度より改組学部のスタートが可能となった。今後の運営に当たっては自己点検を行ない、学部の発展を図っていく必要がある。
- ④ に関しては、各教員は科目の特性に応じてアクティブ・ラーニングを取り入れ、教育効果を高めているように思われたが、アクティブ・ラーニングの教育効果を妥当性のある方法で的確に捉えることに関しては引き続き検討課題となる。

5 今後（平成29年度以降）の予定・課題について

- ① 自己点検と自己評価こそがFaculty Developmentの原点である。これまでと同様、大学教育の質保証を図るため、FDに対する意識をより高めるとともに、教員相互の研修を基盤とするFD活動の機会を多く設け、本学部教員の資質向上を図り、近年の大学教育の変化に対応した教育力と研究力をさらに高めていくことが基本的課題である。
- ② 学部運営のPDCA(PDSA)サイクルの中にFD活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していくことを検討したい。
- ③ 平成29年度から本学部と文学部が改組されることに伴い、本学部のカリキュラムが

新しくなり、また、教員の編成替えや新任教員の加入が行なわれる。学部学科の運営、新カリキュラムの運用、教員間のコミュニケーション等が適切に行なわれるように自己点検することが質保証にとって課題となる。

- ④ アクティブ・ラーニングの本質（「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」）を見極めた上で、専門性や科目特性に応じて諸手法を適切に取り入れ、教育効果を高めていくことが昨年度に引き続き課題となる。さらに、その教育効果を妥当性の高い方法で的確に捉えていくことが課題になると思われる。

§ 観光学部

1 FD 活動への取組理念・目標

観光学部では、現在における観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材を養成する。

目標とする人材育成にあたり、教員全員が観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識を共有することを目標とする。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会・ワークショップの運営にあたる。

3 平成 28 年度の活動内容

(1) 研修会

「カウンセリング・ヒアリングスキルとその注意点」

講師：健康院カウンセラー

実施日：平成 28 年 12 月 22 日（木）16 時 00 分～17 時 00 分

場所：大学研究室棟 B107

目的：

① 概要（目的を含む）

「カウンセリング・ヒアリングスキルとその注意点」と題して、前年度から始まった担任によるヒアリング調査の実施、および、留学中にストレスを溜め込んだ学生に対するヒアリングの有用性を高めるため、本学のカウンセラーである神谷路子先生にご講演いただき、学生へのヒアリング時に活用できるスキルとその注意点を知る。

② 到達目標

学生へのヒアリング時に活用できるスキル、およびヒアリング時の注意点を説明できるようになる。

③ 活動内容

質疑応答も含め、下記の内容に沿って約 1 時間ご講演いただいた。

(I) 健康院カウンセラーとしての役割

・カウンセリング（学生・教職員対象）

話をすることで自らの考えをまとめ、進む方向を見出していく

・コンサルテーション（教職員・保護者対象）

各々が専門家としての立場で、学生への対応について一緒に検討する

(II) 観光学部の特色

・留学について

異なる環境によるストレス反応（引きこもりや、逆にハイテンションになることも

ある)

・卒業要件について

基準に達していない場合は、きっぱり伝える

「残念に思っているが、・・・・」 学生が今後どのように進みたいのかを真剣に考えて欲しいことと、できることは力になることを伝える

(Ⅲ) 学生への対応

どのような学生に対しても、基本的には同じ対応をする（心配な学生以外でも）

目を合わせて穏やかに話しかける

(不安が強い学生は目を合わせられないので、向き合わずに座る方が良い場合もある)

・気になる様子の学生への、最初の声かけは「どうしたの？」で学生の反応を待つ

困っているような様子や、話したい素振りが見えたらこちらから対応する

・困っている様子の学生が話を始めたら、黙って最後まで聴く

「傾聴」と言われるカウンセリングの基本

・心配していることを伝え、学生が困っていることに対応する

授業関係など直接対応できることはすぐに対応

・教員としてできることをして、専門家と連携する（コンサルテーション）

すべてを抱え込まずに、できることとできないことを区別する

・叱咤激励や常識での訓戒は、学生への負担になることもある

→叱咤激励されると、学生にとってできないことに対する負担が増す

→学生によっては、感情が不安定になることもある

・できていないことの指摘ではなく、できそうなことを伝える

(発表が不安でゼミに欠席) 発表は相談にのるから、とりあえず出席だけしたらどうか？

・「オープンエンド」で終わるようにする

特に心配がない学生に対しても「また話したいことがあったらどうぞ！」と伝える

気になる学生については、具体的な予定(次回の面談日など)を伝える

④ 評価

長年にわたり本学のカウンセラーを勤め、多くの学生との接点をもつ神谷路子先生の見識は実に深く、教員の質問にも的確にご回答いただいた。特に、完成年度を迎えた本学部の卒業延期者に対して、該当する学生自らが今後の進路を自身で考えさせて、その中で教員が協力できることを伝えることが大事とご助言いただいた。卒業延期者に対してどう接するべきか悩める教員が多い中、本 FD を通じて、学部として該当者にいかに対応するべきか課題も浮き彫りにできたため、非常に有意義な研修会であったと思われる。

(2) ワークショップ

平成 29 年 1 月 22 日 (木) 15 時～15 時 30 分

① 概要 (目的を含む)

「ハラスメントのない大学に」と題して、本学の顧問弁護士である桑島英美氏からご講演いただいた。本ワークショップの目的は諸々のハラスメントを理解し、その防止のためにどうするべきかを自覚することである。

② 到達目標

諸々のハラスメントを理解し、その防止のためにどうするべきかを説明できるようになる。

③ 活動内容

ハラスメントの諸々をご解説いただき、大学での事例をいくつかご紹介いただきながら、教員が加害者にならないための心構えをご教示いただいた。

④ 評価

数年に1度のペースで開催される全学的研修会ではあるが、開催のたび、普段の教育活動を振り返る良い機会となっている。あくまでも教員の価値観で考えるのではなく、教育を受ける側を尊重する姿勢が大切であることを再認識できたのではないだろうか。特に、研修中に桑島氏が何度も連呼されていた「時代が変わった」というフレーズは、教員が学生時代に受けてきた従前の教育スタイルがもはや通じなくなっている現状を悲しくも的確に表現しているといえよう。

(3) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業評価アンケートを実施した。今年度は春学期および秋学期に実施している。

② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に資すること。

③ 活動内容

観光学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。データの集計結果は科目担当教員に配付し、活用している。

④ 評価

観光学部授業評価アンケートの結果は下記の通りである。

春学期授業評価アンケート回答数は昨年度301に対して、今年度は723と倍増した。主な原因として、完成年度を迎え、授業評価アンケートの対象となる授業が増えたことによる。全体的な傾向として、19ある質問項目のうち昨年度と比較して12項目が増加（内6項目が0.2ポイント増加、6項目が0.1ポイント増加）、4項目に変化はみられず、4項目が減少（内1項目が0.2ポイント減少、3項目が0.1ポイント減少）していた。総じて上昇傾向にあると思われる。

秋学期授業評価アンケート回答数は昨年度608に対して、今年度は787と増加した。主な原因として、春セメスタと同様に完成年度を迎えて、授業評価アンケートの対象となる授業が増えたことによる。11項目に変化はみられず、6項目が0.1ポイント増加し、2項目が0.1ポイント減少していた。平成27年度は前年度と比較して減少傾向が見られたが、今年度は総じて復調傾向にあると思われる。

【春学期授業評価アンケート全体結果】

観光学部全体

回答数(全体): 723

分野	設 問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	6.7%	12.2%	34.0%	39.3%	7.8%	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.5	6.0%	10.3%	28.0%	41.4%	14.2%	6
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.1	39.3%	35.9%	18.6%	5.3%	1.0%	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.6	24.8%	29.2%	30.7%	10.4%	5.0%	0
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	42.7%	39.0%	15.5%	2.1%	0.7%	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.3	48.7%	35.1%	14.2%	1.4%	0.6%	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.2	46.0%	35.2%	15.0%	3.0%	0.8%	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	42.0%	34.8%	17.9%	3.9%	1.5%	1
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	43.2%	34.8%	17.5%	2.9%	1.7%	1
	10 基本的知識が得られた。	4.3	47.8%	36.0%	14.1%	1.1%	1.0%	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	41.7%	35.4%	18.5%	2.8%	1.7%	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	38.4%	32.7%	23.2%	4.0%	1.7%	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	37.0%	36.0%	22.2%	3.0%	1.8%	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.1	39.2%	34.9%	20.8%	3.0%	2.1%	1
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	45.6%	34.2%	17.6%	1.8%	0.8%	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	42.2%	35.5%	18.0%	2.9%	1.4%	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	41.6%	31.3%	20.9%	3.7%	2.5%	1
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	48.5%	32.5%	13.4%	3.5%	2.1%	0
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	47.6%	32.4%	16.2%	2.4%	1.5%	0

【秋学期授業評価アンケート全体結果】

観光学部全体

回答数(全体): 787

分野	設 問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.5	5.9%	11.0%	31.3%	34.1%	17.9%	3
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.4	4.9%	7.2%	28.8%	37.3%	21.9%	6
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.1	38.9%	37.6%	19.5%	3.1%	1.0%	2
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	26.7%	31.3%	32.1%	6.4%	3.6%	1
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.3	46.6%	38.1%	12.1%	2.4%	0.8%	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.3	49.4%	35.5%	11.8%	2.3%	0.9%	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.3	48.9%	34.8%	13.4%	1.9%	1.0%	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	42.9%	34.8%	17.1%	3.8%	1.4%	2
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	45.5%	36.8%	14.2%	2.5%	0.9%	1
	10 基本的知識が得られた。	4.4	52.5%	34.5%	10.6%	1.7%	0.8%	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.2	46.4%	34.0%	16.7%	1.5%	1.4%	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	38.8%	33.0%	22.6%	3.4%	2.2%	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	41.1%	35.8%	18.1%	4.0%	1.0%	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.2	45.4%	34.2%	15.6%	3.2%	1.7%	3
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.3	48.5%	36.7%	11.3%	2.5%	0.9%	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.3	46.8%	35.9%	14.8%	1.9%	0.6%	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.2	45.3%	35.0%	15.6%	2.4%	1.7%	1
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	56.0%	27.9%	12.1%	2.7%	1.4%	1
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	55.9%	27.2%	12.3%	3.6%	1.0%	1

(4) 教職員相互の授業公開と参観

① 概要（目的・到達目標を含む）

教員相互で授業を参観し、各教員の教授法、教授内容について授業改善を行う。

② 活動内容

春学期、秋学期にそれぞれ1名ずつの教員の協力のもと、参観授業を行い、授業改善につながるよう担当教員と参加教員による振り返りを行った。

③ 評価

昨年と同様、参観できた教員が少なかったため、次年度も参観教員数を増やせるよう検討の余地がある。

4 昨年度（平成27年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度の予定のうち、「新カリキュラム検討会」の実施には至らなかった。学部事情から、急遽予算を他に宛がう必要があったためである。これまでは必要と思われるFD活動を期中に適宜実施してきたが、本学部が完成年度を迎えて新たに増えてきた課題もあったように思われる。引き続き、必要と思われるFD活動は臨機応変に実施していきたい。

5 今後（平成29年度以降）の予定・課題について

平成28年度と同様に、学部FD研修会、講演会、参観授業、授業評価アンケートを実施する。次年度は観光学部が完成年度を迎えて新たに増えてきた課題も検討する必要がある。4年生の20%を占める卒業延期者は全員が卒業要件であるTOEIC700点に未達である。現状、卒業延期者に対しては、TOEIC700点の取得月に卒業を認めるなどの措置はあるものの、教育的支援の具体策はない。仮に、TOEICスコア向上のための教育的支援をするにせよ、学生らの金銭的負担やその全体的なロードマップの検討など議論すべき課題は少なくない。

次年度は、残念ながら今年度は開催が見送られた「新カリキュラム検討会」で改めて観光学部ビジョンの再確認、場合によってはその方向転換を検討してもよい。開講年度からのFD活動を通じて、目的として掲げられていた観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識の共有については、ある程度達成されたが、新たに浮き彫りになった課題もあり、今後も紋切型のFDになることなく、有用性の高いFDを実施していく予定である。

3. 教師教育リサーチセンターの活動

1 教職課程 FD・SD 活動への取組理念

本センターは、大学における教職課程を運営するため、大学附置機関として設置された。主な業務内容としては、教職課程における学生支援と、教職に関する研究活動支援がある。研究活動支援の中には、教員養成における教職課程 FD・SD 研修も含まれており、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

2 教師教育リサーチセンターにおける教職課程 FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、事務次長、課長を中心に教職課程 FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

3 平成 28 年度の活動内容

(1) 教師教育フォーラム

① 概要（目的を含む）

「教職課程の質保証と実践的指導力の向上」をメインテーマとし、フォーラムを開催した。本学の教育学研究科教職大学院と共催し、午前の部に講演・シンポジウム、午後からは分科会を実施した。本学教職員をはじめ、近隣教育委員会、全私教協加盟大学、教育実習先、学会関係者等、教師教育や教員養成に関わる多くの方々に広報を行った。

中央教育審議会による 3 つの答申を受け、今後の教員養成に関する課題、質の高い教員養成に向けた大学の取組や、大学の果たす役割等について、講演、シンポジウム、分科会を通して、多くの方々と共に考える機会とした。

② 到達目標

200 名以上の出席者を目標に掲げた。

③ 活動内容

平成 28 年 10 月 23 日（日）10:00～17:00 於：大学教育棟 2014

テーマ：『教職課程の質保証と実践的指導力の向上』

【プログラム】

午前の部：

1. 講演「3 つの中教審答申と今後の教員養成」

藤原 誠（文部科学省 初等中等教育局長）

2. ショートレクチャー「教員の資質能力の向上（答申）に向けた大学の教員養成」

小原芳明（玉川大学 学長）

3. シンポジウム「3 つの答申をふまえた教員養成大学の果たす役割—養成・採用・研修の各段階との連携—」

<シンポジスト> 高口 努（独立行政法人 教員研修センター理事）

天笠 茂（千葉大学 特任教授）

佐藤 光次郎（文部科学省 初等中等教育局教職員課長）

森山 賢一（玉川大学 教師教育リサーチセンター長、

大学院教育学研究科・教育学部 教授)

<コーディネーター>若月 秀夫 (一般財団法人学校教育研究所 理事長)

午後の部:

1.分科会

8分科会 (国語教育、道徳教育、理科、数学、体育、幼児教育、美術、国語)

④ 評価

講演・シンポジウム 参加者 223 名 分科会 181 名 延べ 404 名の出席者を迎え、盛況に終了し、目標達成となった。

(2) 平成 28 年度 教職課程 FD・SD 研修会

① 概要 (目的を含む)

「中央教育審議会答申をふまえた教職課程コアカリキュラムの方向性と再課程認定に向けて」と題して、以下の「③活動内容」通りに研修会を実施した。

なお、各学部長、学科主任、教務主任、教務担当、教職担当は原則出席とし、関係部署所属の教職員にも出席を促した。

② 到達目標

以下活動内容の「内容 (目的)」に示されているように、平成 27 年 12 月 21 日に示された中央教育審議会答申を受け、教員養成大学としての今後の対応と再課程認定申請にあたっての共通認識を持つ機会とする。

③ 活動内容

日 時：平成 29 年 3 月 7 日 (火) 10:00~11:30

場 所：大学研究室棟 B104

対 象：全学教職員

内 容 (目的)：「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(中央教育審議会答申 平成 27 年 12 月 21 日)により、教員の養成・採用・研修についての課題や、具体的方策が示された。現在では、「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」において、大学が教職課程を編成するに当たり参考とする指針が検討されている。さらに、教職課程を有する全大学において、平成 29 年度末には再課程認定申請が行われる予定である。

教員養成大学として、これらをふまえて、その内容をどのように捉え、どのように対応することが望ましいのか、再課程認定申請においてはどのような点に注意しておくべきか等を具体的に確認する。

【プログラム】

1. 開会挨拶 森山 賢一 (教師教育リサーチセンター長・大学院教育学研究科・教育学部 教授)

2. 講演「中央教育審議会答申をふまえた教職課程コアカリキュラムの方向性」
坂越 正樹 (広島大学大学院教育学研究科 教授)

「学校教育を担う教員の資質能力の向上について (答申) において示された教員養成に関する課題と今後の再課程認定の方向性」

山口 大地（文部科学省 初等中等教育局教職員課 専門官）

④ 評価

坂越先生より、中央教育審議会答申の背景や、特に教職コアカリキュラムの在り方、実際の策定についての事柄。さらに、広島大学での取組等を具体的な内容を盛り込んで講演が行われた。続いて、山口専門官からは、答申を基に、懸案される教員養成にかかわる課題、「養成・採用・研修」の流れを受けて、教員の資質能力向上に向けての課題のこと。さらに、再課程認定の今後の予定・基本的な方針などが示唆された。いずれも、教員養成大学にとっての課題と今後の実務に即した事項をご教授いただき、参加した教員、職員それぞれの立場で、理解を深めることができた。当日は、77名の出席者があった。

4 昨年度（平成 27 年度）に提案された予定・課題の達成度について

平成 28 年度は、「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」各 1 回を開催するように計画した。計画通り実施することができ、それぞれの目標も達成することができた。

5 今後（平成 29 年度以降）の予定・課題について

「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」各 1 回を開催するように計画したい。「教師教育フォーラム」は、引き続き「教職大学院」との共催により、大学全体としての教員養成への取組をふまえた内容で開催を予定している。

以上

4. ELF センターの活動

1 FD・SD 活動の取組に対する理念

教員ひとりひとりの教育の質が ELF プログラムの成果にとって重要である。したがって教員の資質向上が本プログラムの向上に必須であるというのが ELF センターの基本的な理念である。多くの ELF の授業が非常勤教員によって担当されているため、ELF センターは専任教員だけでなく非常勤講師の資質向上にも力を入れてきた。また、ELF センターにはさまざまな言語的・文化的背景を持つ教員がいる（ブルガリア、韓国、フィリピン、トルコ、アイルランド、マケドニアなど）ため、FD 活動は互いの知識や経験から広く学ぶことができる有意義な機会と捉えている。

2 ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センターの FD 活動の告知や内容は ELF センター会によって決められている。予算やサポート等もこの会議で審議される。FD 活動の内容が決定された後、ELF センターの作業部会の専任教員がその企画と実施を担当する。指導法、評価、e-learning など作業部会内にさまざまな分野に特化した教員のグループが存在し、Blackboard や ELF ワークショップなどの FD 活動を担当する。

3 平成 28 年度の活動内容

(1) 講演会・ワークショップの開催

①概要

ELF センターは平成 28 年度に多数の大規模な学会やフォーラムの後援を行ってきた。大学英語教育学会（JACET）や全国語学教育学会（JALT）の講演会を学内で共催し、さらに ELF センター主催の ELF フォーラムを開催した。

②到達目標

- ・それぞれの FD 活動において非常勤講師に参加を促す。
- ・これらの活動によりセンターと英語教育関係の学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
- ・これらの活動によってセンターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。

③活動内容

以下のワークショップや発表大会が玉川大学の ELF Study Hall 2015 で開催された。

- ・4月23日の ELF に関する、JACET ELF SIG の第一回研究会（大学英語教育学会 ELF 研究会）
- ・6月3日～6月5日のコンピュータを使った英語教育に関する、JALT CALL 2016（全国語学教育学会 JALT CALL 研究会の 2016 コンファレンス）
- ・9月15日の 2016 ELF フォーラム

- ・1月22日のコンピュータを使った英語教育に関する、Tech@Tamagawa 研究会(全国語学教育学会横浜支部)

④ELF フォーラムの評価

上記の活動においてそれぞれ約50名の参加があり、ELFセンター教員に日常の研究・教育の成果を発表する機会を与え、その内容を共有することができた点では有意義な会であった。しかし、反省すべき点として、木曜日に行った影響で他大学やK-16の教員の参加者数が少なかった。この問題の解決のため、他部署とのより綿密な日程調整、さらにフォーラムの発表等の動画を保存し、オンラインで共有し、以後のFD活動に利用する可能性など探っていきたい。またELF Study Hall 2015のラウンジでの講演が好評であったため、来年度(29年度)のフォーラムもELF Study Hall 2015のラウンジで実施したい。

(2) 研究会・ワークショップなど

① 概要

- ・Blackboardの使い方に関する理解を深めるワークショップや講演会を開催した。
- ・ELFの理念に関する講義や意見交換を実施した。

② 到達目標

- ・非常勤講師がBlackboardの仕組みを理解し、円滑に利用できるようになる。
- ・ELFの授業においてブレンド型学修(通常授業にオンラインを取り入れる学修)や自主的学修を積極的に取り入れることができるようになる。
- ・ELF研究について最先端の知識を深める。
- ・ELFの理念について教員間で知識を深める。
- ・言語教育について教員間で知識を深める。

③ 活動内容

- ・非常勤講師対象Blackboardワークショップ(平成28年4月18・19日、10月17・18日)
- ・ELFセンター、ディモスキ・ブラゴヤ助教による「ELF Speaking Activitiesワークショップ」(平成28年5月16・17日)
- ・ELFセンター、マクブライド・ポール助教、ミリナー・ブレット助教、ディモスキ・ブラゴヤ助教による「ELF Assessmentワークショップ」(平成28年6月13・14日)
- ・アリゾナ州立大学(アメリカ) Paul Kei Matsuda 教授による「A Conversation on Writing Assessment」講義(平成28年6月27日)
- ・文学部、工藤洋路准教授による「Approaches for teaching and assessment of English writing」講義(平成28年11月28日)

- ・ ELF センター石巻賢作非常勤講師による「Standardized English Tests in Japan レクチャー」（平成 28 年 12 月 2 日）
- ・ York St. John 大学（イギリス）Christopher Hall 教授による「Cognitive perspectives on ELF」講義（平成 28 年 12 月 14 日）

④ 評価

ELF センターの教員は Blackboard のコンテンツマネジメントシステムを学内で最も活用し多用している。非常勤講師も同様であり、ほぼ全ての ELF の授業でこのシステムを授業内の活動、評価、ブレンド型学修の目的で使用している。Blackboard に関するワークショップが効果的であることが見てとれる。ELF および言語意識に関するワークショップは教員の授業に対するアプローチに良い影響を与えてきた。ELF 所属教員対象のアンケート調査では、教員のほとんどが ELF の理念や概念をどのように授業に生かすかについて考慮していることが分かった。さらに、ELF センターが刊行する The Center for ELF Journal には多くの教員が研究論文を投稿し、研究に対しても積極的な態度が見られた。これらの教授方法の効果は学生の授業評価からも見ることができた。平成 27 年と 28 年の学生アンケートを比較したところ、平成 28 年の学生の方が ELF に対する理解がより深いという結果となり、学生自身に与える影響を理解しているようであった。テーマについては教員の興味のあるものを中心に選択しているが、普段は直接お話を聞く機会がない海外の著名な学者（Paul Kei Matsuda, Christopher Hall）が来日した際など単発的に講演をお願いすることもあり、そういった機会が教員に動機の向上にもつながっている。

(3) ELF センター教員オリエンテーション

① 概要

- ・ ELF センター教員のオリエンテーションを実施した。

② 到達目標

- ・ ELF 研究について最先端の知識を深める。
- ・ ELF の理念について教員間で知識を深める。

③ 活動内容

- ・ 非常勤講師を含む全 ELF 教員のオリエンテーション（平成 29 年 3 月 27 日）

④ 評価

45 名が参加した。オリエンテーションの後半、FD 活動の一環として参加者をグループ分けをし、20 分間のテーマ別（評価、Blackboard の利用、Extensive Reading など）グループディスカッション（5～10 人）を 2 回行った。参加者にとってとても有意義な機会となった。オリエンテーション後、専任教員間で実施内容についての改善点を協議する予定である。

(4) 学生による授業評価アンケート

① 概要

平成 28 年の春学期と秋学期の最後に、ELF センター独自のオンライン授業評価アンケートを実施した。学生は授業の中でスマートフォンまたはパソコンを使用してアンケートに回答するように指示された。アンケートは 42 項目あり、学生は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF、ELF Study Hall 2015 に関する意識、チューター制度、多読などについて評価した。調査結果は教育プログラム策定の基礎資料となり、それぞれの教員にも自身の授業運営改善のために共有されている。

② 到達目標

授業評価アンケート調査の目標は学生の ELF プログラムや教員の教授アプローチに対する観点や評価を得ることにあつた。また、調査結果はそれぞれの教員に自分の教授法に対する学生の評価をフィードバックするという目的もあつた。

③ 活動内容

春学期授業評価アンケートは 2,016 名（全学生の 90%）から回答を得た。秋学期授業評価アンケートは 1,622 名（全学生の 81%）から回答を得た。

④ 評価

これらのアンケートのデータは ELF プログラムに対する評価として使用され、平成 28 年度の教育プログラムの構築のために使用されてきた。概ね学生は授業に対してとても満足しているという結果であつた。それぞれの教員に学生からの評価を配付し、自身の指導の改善に役立ててもらつた。

(5) 教員による授業内容アンケート

① 概要

平成 28 年の春学期と秋学期の最後に、ELF センター独自の教員対象のオンラインアンケートを実施した。アンケートは 29 項目あり、教員は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF に対する意識、センターから受けるサポートの質について評価した。調査結果は教育プログラムの計画や研究の目的で使用された。

② 到達目標

- ・多様な教員のニーズにどのように応え、より効果的にサポートを行うかについての情報を収集すること。
- ・カリキュラムを改革すること。

③ 活動内容

春学期アンケートは 20 名（40%）の教員から回答を得た。秋学期アンケートは 29 名（58%）から回答を得た。

④ 評価

今年度の春学期はあまり多くの教員から回答を得ることはできなかった。秋学期のアンケートはメールに埋め込んだが 18%しか上がらなかった。ELF センターとしてどのように非常勤講師をサポートすれば良いかについて有意義な情報を得られる機会であるため、今後はより多くの回答を得られるようにアンケートへの協力を喚起したい。しかしながら今回のアンケートから得られた情報は教科書の選定に役立ち、教員のサポートをどのように効果的に行うかについて知ることができた。また、教員の ELF に対する理解が深まっていることがアンケートから知ることができた。

(6) ジャーナルの出版

① 概要

平成 28 年 3 月、2 人の査読者（外部一名）がそれぞれの投稿論文を審査する The Center for ELF Journal の第 3 号を発行した。

② 到達目標

ジャーナルの達成目標は以下の通りである。

- ・授業運営を改善する。
- ・自発的学修についてのアイデアを共有する場を設ける。
- ・教員間で高い学識を探究する。
- ・ELF に対する学識を共有する。
- ・ELF センター所属の教員に効果的な FD の場を設ける。

③ 活動内容

- ・The Center for ELF Journal 第 3 号を発行した。

第 3 号各 150 部を学内や学外に配付予定である。既刊分については玉川大学教育学位情報図書館にも寄贈し、ELF センターの HP にも掲載している。さらに、教員のアカデミックポータル (academia.edu, REAP, Google Scholar, Research Gate など) にも掲載している。

④ 評価

The Center for ELF Journal は教員に配付され、筆者自身も出版されたものに満足しているようであった。ELF センターはこのジャーナルをオンラインで閲覧できるように準備している。こうすることでより多くの研究者が我々の論文を手にとることができ、他の論文にも引用されるようになると考えられる。

図 1. The Center for ELF Journal 第 3 号



4 今年度（平成 28 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度初めに提出された全ての予定・課題が実施された。その中でも主要なセンター発刊のジャーナルでは、ELF ブレンド学修に焦点を当て、活発な研究活動を記載している。表 1 は平成 28 年度の ELF 専任教員の研究活動をまとめたものである。47 の学会発表を実施し、14 本の論文を投稿・出版した。

表 1. 平成 28 年度の ELF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国際発表	23
国内発表	24
論文を投稿・出版	14

表 2. 平成 28 年度の ELF 専任教員の論文を投稿・出版

査読の有無	論文・著書	著者
無	Milliner, B., & Dimoski, B. (2016). A report on faculty development and research inside the Center for English as a Lingua Franca. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 2(1), 49-67.	Brett Milliner & Blagoja Dimoski
有	Yujobo, Y.J., Ogane, E., Okada, T., Milliner, B., Sato, T., & Dimoski, B. (2016). Efficacy of promoting awareness in ELF communicative strategies through PBL. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 2(1), 1-17.	Yuri Jody Yujobo, Ethel Ogane, Tricia Okada, Brett Milliner, Takanori Sato & Blagoja Dimoski
有	Dimoski, B. (2016). A proactive ELF-aware approach to listening comprehension. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 2(2), 24-38.	Blagoja Dimoski
有	Milliner, B. (2016). Implementing a mobile-based extensive reading component: A report on student engagement and perceptions, In M. Iguchi, & L. Yoffe (Eds.), <i>JACET Summer Seminar Proceedings No.14</i> (pp.41-49). Tokyo: JACET.	Brett Milliner
有	Milliner, B. (2016). The Google accreditation process for language teachers. <i>The Language Teacher</i> , 40(3), 22-24.	Brett Milliner
無	Tanaka H., Ogane E., Sugiyama, A., Okuyama, K., & Kawamata, T. (2016). Lingua Franca for Asian Children. In Kawamata T., Tanaka H., Ogane, E. (Eds.), <i>English as Lingua Franca and East Asian Young Learners</i> (pp. 9-32) Tokyo: International Studies Department, Meisei University.	Hiromasa Tanaka, Ethel Ogane, Aya Sugiyama, Kurumi Okuyama & Takanori Kawamata

有	Milliner, B., & Cote, T. (2016). Adoption and application of the CMS: Crucial steps for an effective e-learning component. <i>International Journal of Computer Assisted Language Learning and Teaching</i> , 6(3), 53-65.	Brett Milliner & Travis Cote
無	Milliner, B., & Cote, T. (2015). Reflections on Japanese university study abroad students' digital literacy: Is more ICT training needed? 玉川大学の教師教育リサーチセンター 年報 第6号, 99-109.	Brett Milliner & Travis Cote
有	McBride, P. (2016). An Overview Perspective on Teaching ELF: Principles and Practices. <i>Waseda Working Papers in ELF</i> , 5, 186-197.	Paul McBride
有	McBride, P. & Milliner, B. (2016). Introduction to M-Reader: An Online Extensive Reading Aid for Schools. <i>The English Teacher</i> , 45(2), 96-105.	Paul McBride & Brett Milliner
有	Cote, T., & Milliner, B. (2016). Japanese university students' self-assessment and digital literacy test results. In S. Papadima-Sophocleous, L. Bradley & S. Thouësny (Eds.), <i>CALL communities and culture – short papers from EUROCALL 2016</i> (pp. 125-131). Research-publishing.net. https://doi.org/10.14705/rpnet.2016.eurocall2016.549	Travis Cote & Brett Milliner
有	Oda, M. (2017). Reflecting on my flightpath. In G. Barkhuizen (Ed.) <i>Reflections on Language Teacher Identity Research</i> (pp. 222-227). New York: Routledge	Masaki Oda
有	Mishina-Mori, S., & Yujobo, Y. J. (2017). Referent introduction and maintenance in bilingual narratives: Is there a cross-linguistic influence? In M. Hirakawa, J. Mathews, K. Snape, & M. Umeda (Eds.), <i>Proceedings of PacSLRF 2016</i> , (pp. 145-149). Hiroshima: Japan Second Language Association.	Satomi Mishina-Mori Yuri Jody Yujobo
有	Dimoski, B., Yujobo, Y. J., & Imai, M. (2016). Exploring the effectiveness of communication strategies through Pro-Active Listening in ELF-Informed Pedagogy. <i>Language Education in Asia</i> , 7(2), 67-87.	Blagoja Dimoski Yuri Jody Yujobo Mitsuko Imai

5 今後（平成 29 年度以降）の予定・課題について

平成 29 年度には、ELF の授業規模がさらに拡大し、2,500 人の学生の英語教育を担うことになる。また、6 人程度の新しい教員を迎え入れることになり、さらにさまざまな国籍の専任教員と非常勤講師で ELF センターが構成されることになる。FD 活動はこれらの背景を考慮した試みが必要であると認識している。我々は以下の項目の実施によって ELF プログラムをより効果的に運営するよう努めたい。

1. 効果的な教員オリエンテーション
2. Blackboard と e-learning のワークショップ
3. ELF の概念を生かした教授法に関する講義
4. 言語教育に関する講義や意見交換を実施する機会
5. 学会と共同で実施される英語教育に関する研究会
6. 学生や教員による授業評価アンケート

5. ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

平成28年度春・秋学期において、それぞれ最終授業にて実施（一部、科目担当者の都合等により補講・定期試験期間中に実施）した。対象科目はユニバーシティ・スタンダード（以下、US）科目である。

春学期：US 科目（但し、実験実習実技科目、教職関連科目群、資格関連科目群、工学部開講の US 科目、その他一部の科目は除く）

秋学期：US 科目（但し、実験実習実技科目、教職関連科目群、資格関連科目群、工学部開講の US 科目、その他一部の科目は除く）

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝223名／231名（96.5%）

秋学期＝203名／216名（94.0%）

実施開講クラス数：春学期＝372クラス／391クラス（95.1%）

秋学期＝334クラス／357クラス（93.6%）

回答学生数：春学期＝11,805名／14,597名（80.9%）

秋学期＝11,199名／14,296名（78.3%）

(2) 実施時期

春学期：7月18日（月）～7月22日（金）

秋学期：1月25日（水）～1月31日（火）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙を配付、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙（p.124 参照）

2. 集計結果及び公表（p.78～105 参照）

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」、人文科学科目群、社会科学科目群、自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記8分類についてはその平均値を学内のみを対象にホームページで公表している。

平成28年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数(全体): 11805

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	177

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	23
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	34
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	11
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	22
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	18

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	7
	10 基本的知識が得られた。	4.1	10
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	19
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	13
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	17
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	31

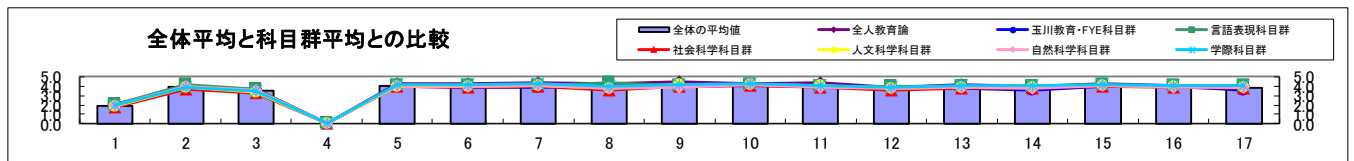
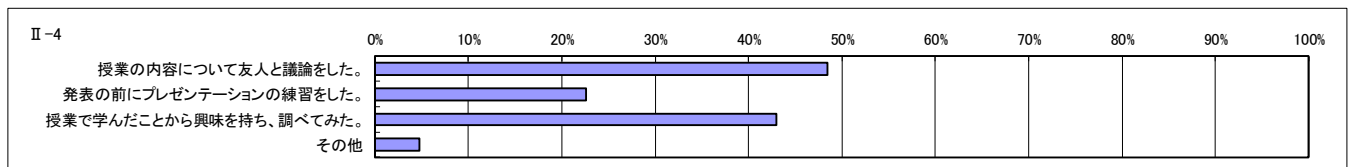
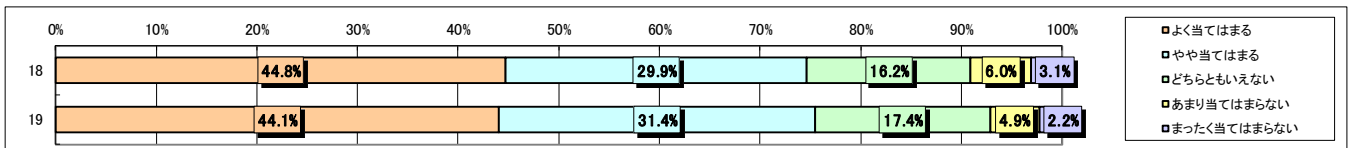
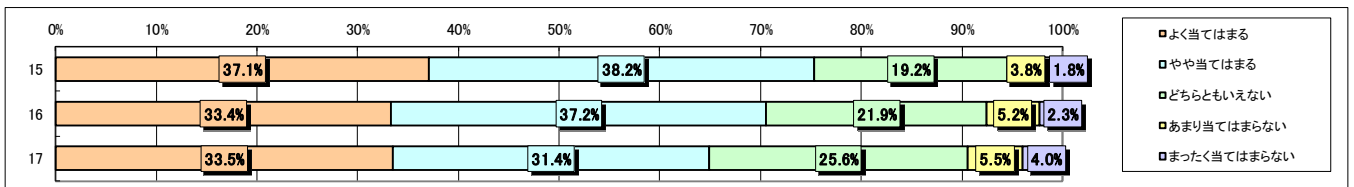
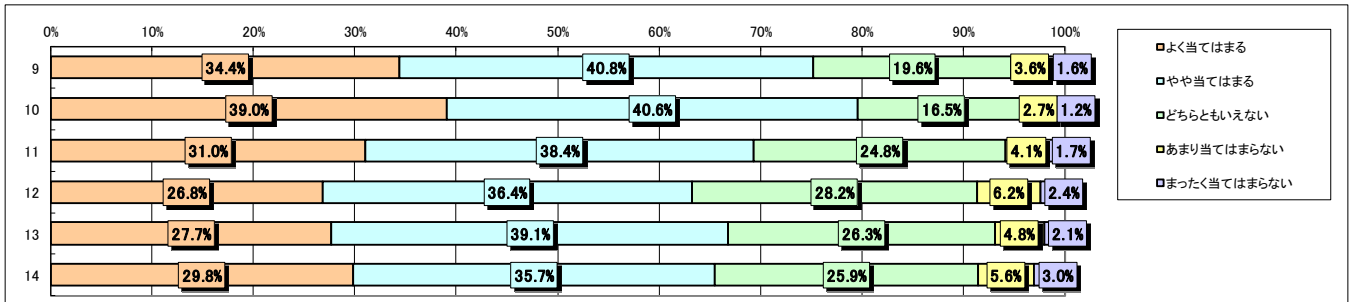
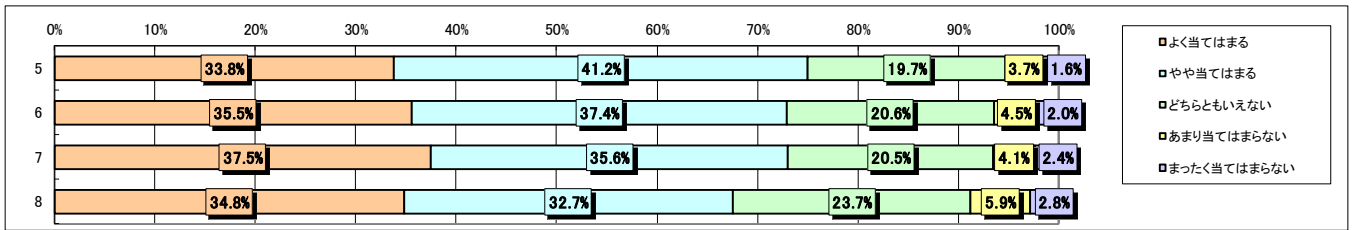
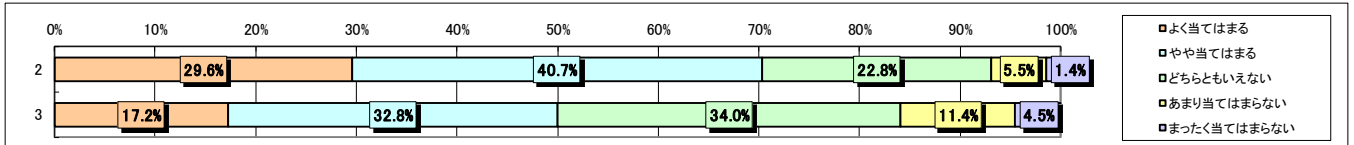
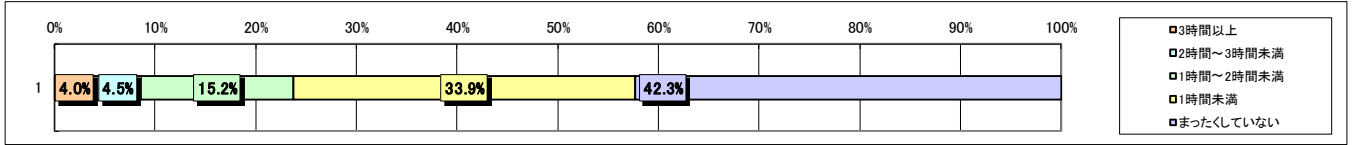
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	12
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	10
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	28

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	31
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	30

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	48.4%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	22.6%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	43.0%
	その他	4.7%

◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数(小数点第2位四捨五入)

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数



平成28年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次ゼミナ- 101

回答数(全体): 1681

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	20

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	3
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

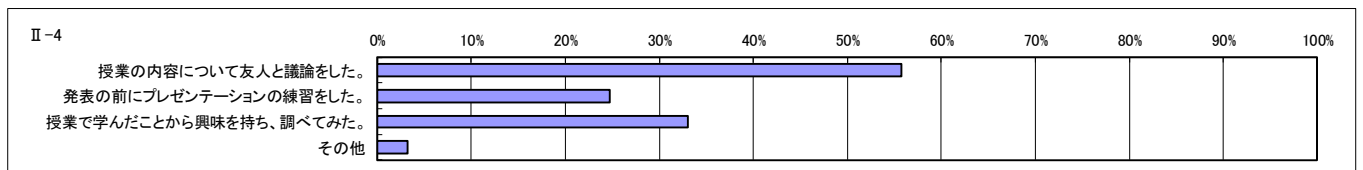
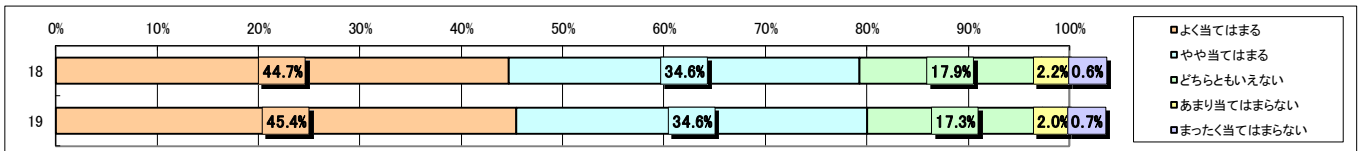
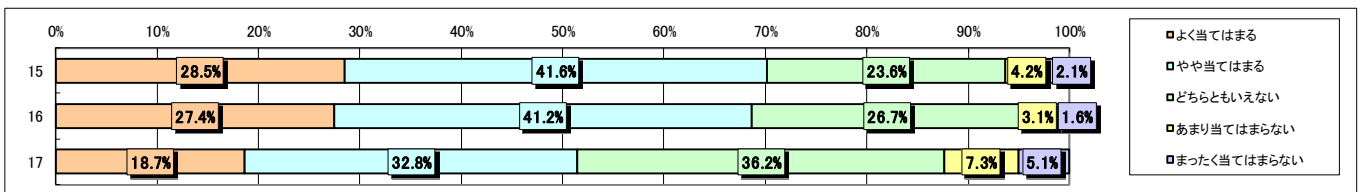
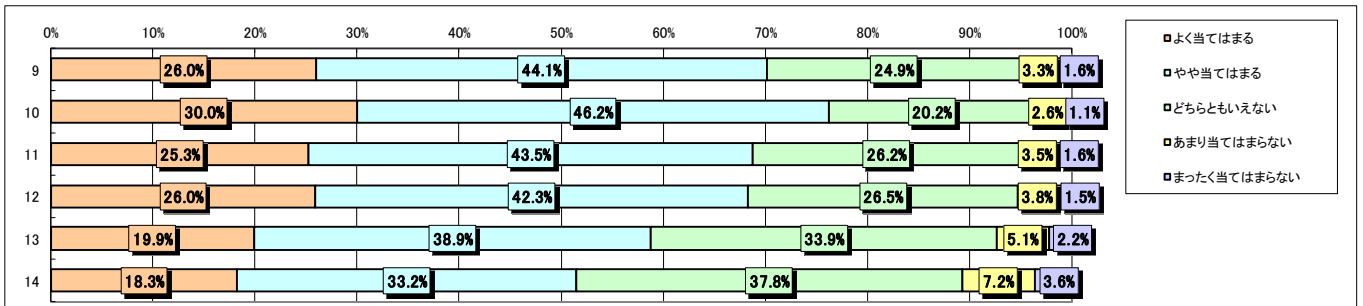
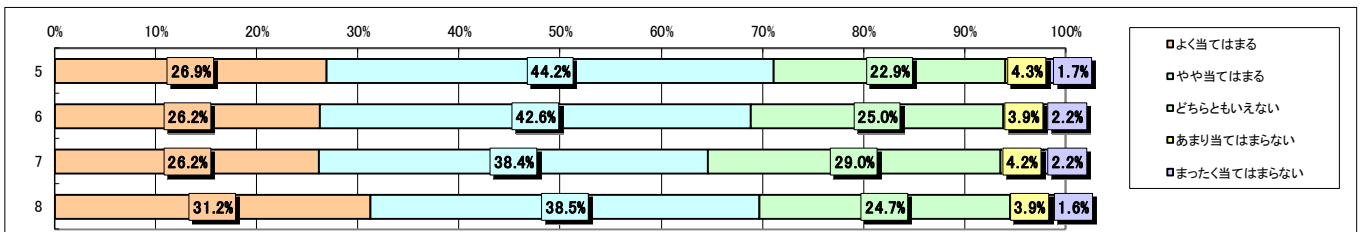
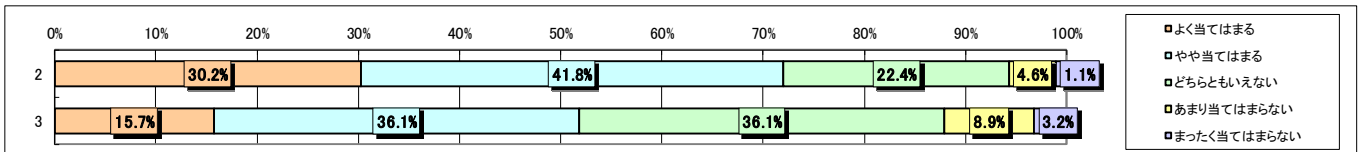
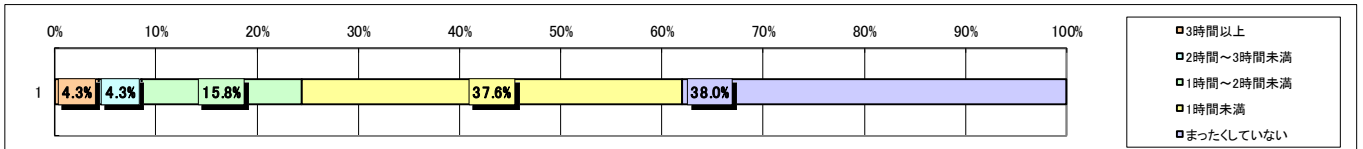
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	5
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.8	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	3

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	0
	10 基本的知識が得られた。	4.0	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.6	3

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.5	3

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	2

集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	55.7%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	24.7%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	33.0%
	その他	3.2%



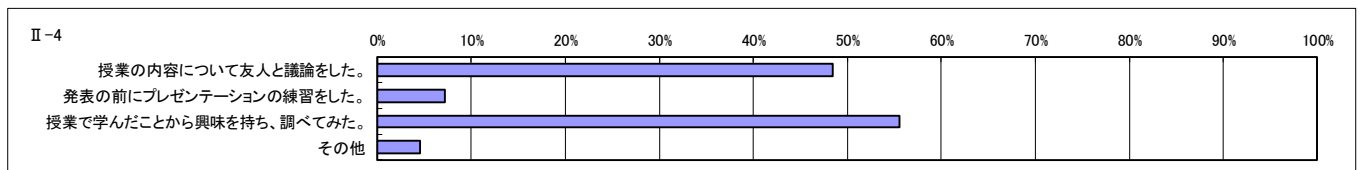
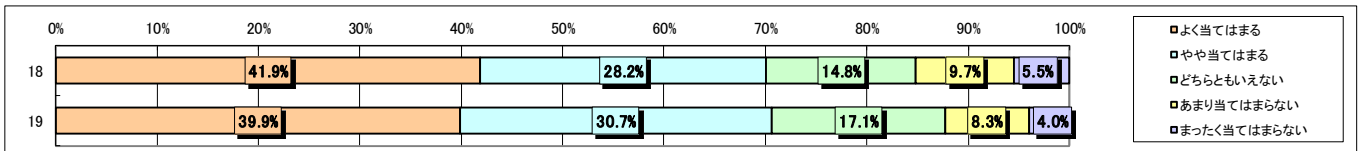
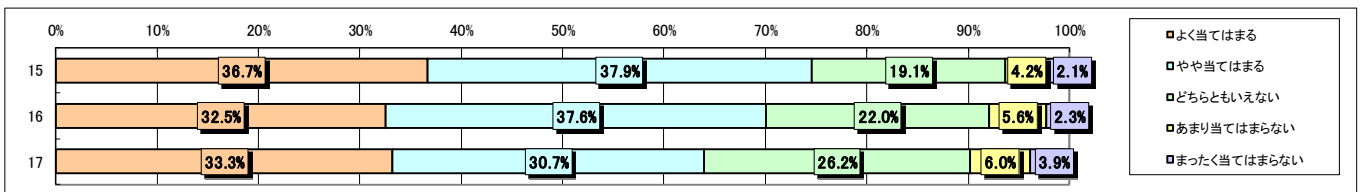
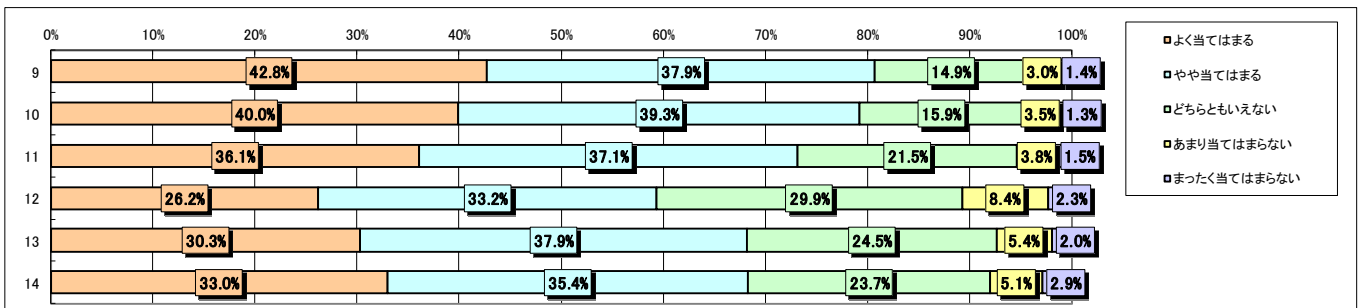
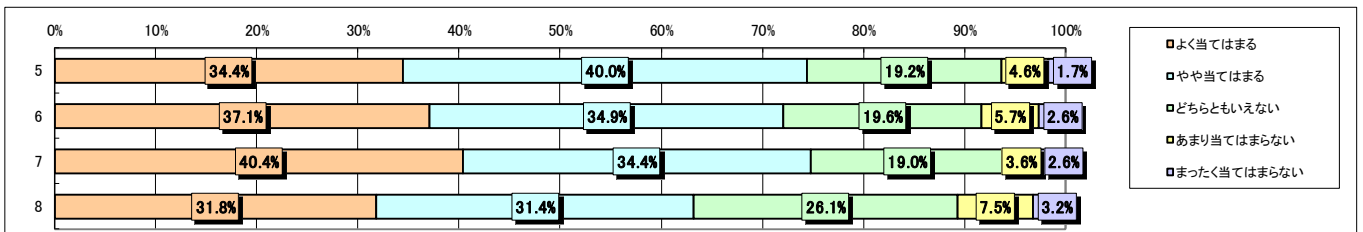
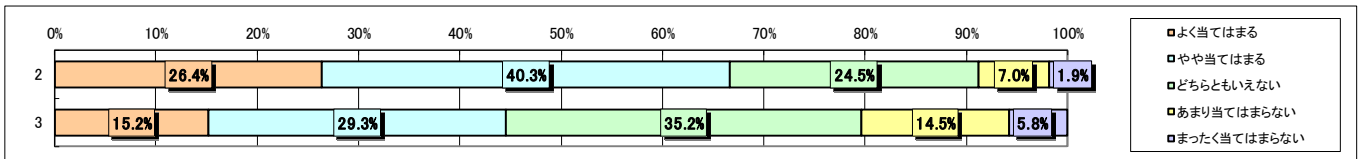
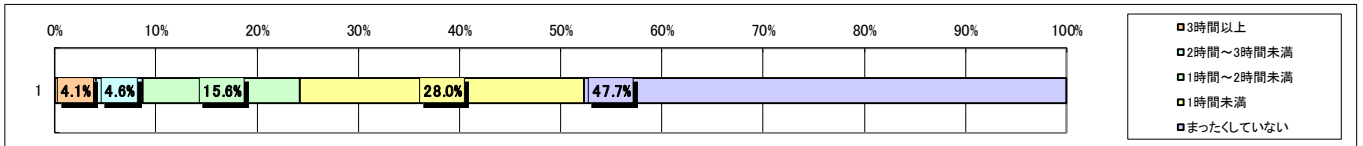
平成28年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 人文科学科目群

回答数(全体): 2156

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	39
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.8	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.3	6
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	4
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	3
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	2
	10 基本的知識が得られた。	4.1	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	5
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	5
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	4
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	6
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.9	5
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	6
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	48.4%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	7.2%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	55.5%	
	その他	4.5%	



平成28年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 社会科学科目群

回答数(全体): 2177

分野	この授業に対する学生の学修時間について		この授業の 平均値	無効 回答数
I	1	1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.8	25

分野	この授業に対する学生の取り組みについて		この授業の 平均値	無効 回答数
II	2	この授業に積極的に参加した。	3.7	1
	3	この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.2	7
	4	学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

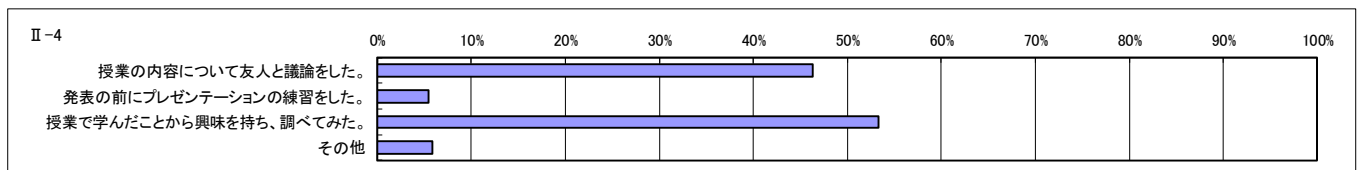
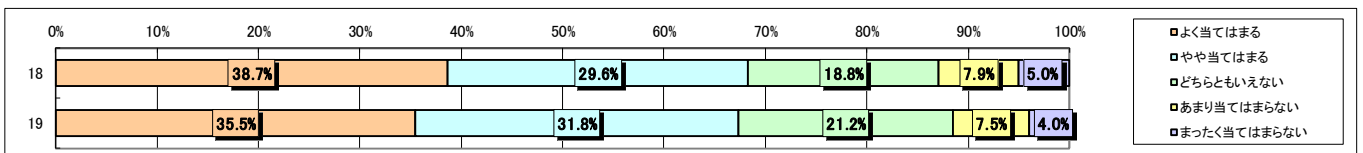
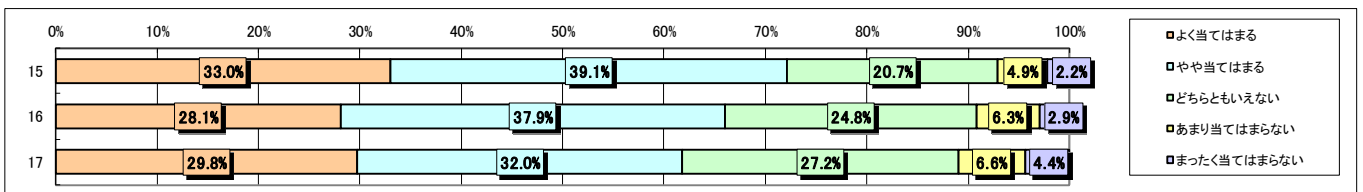
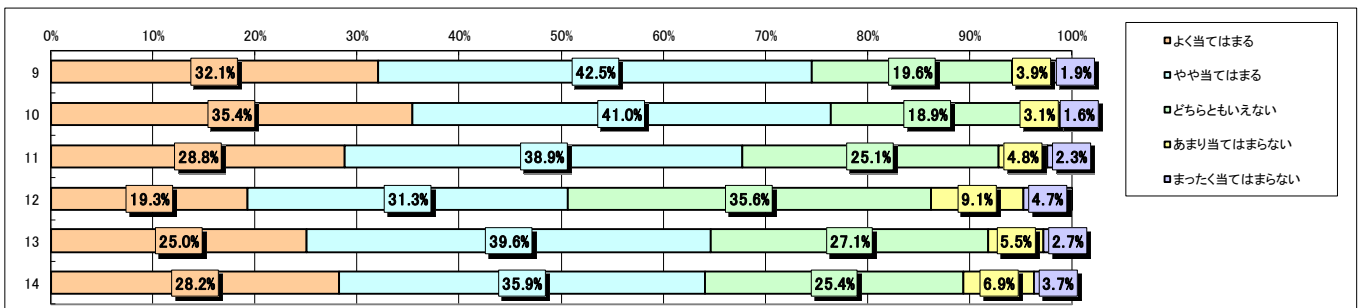
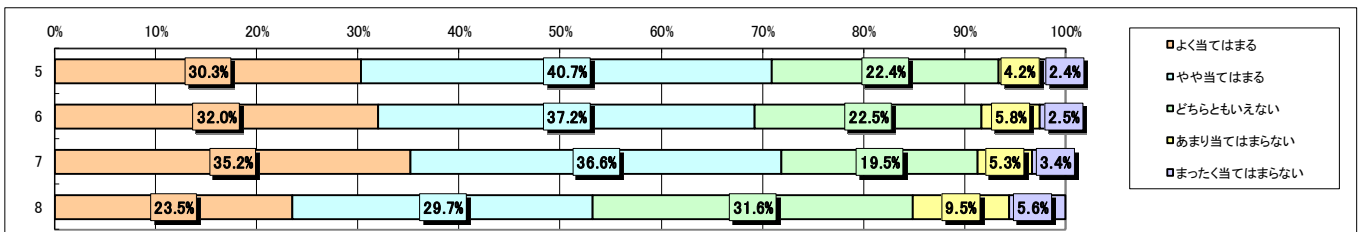
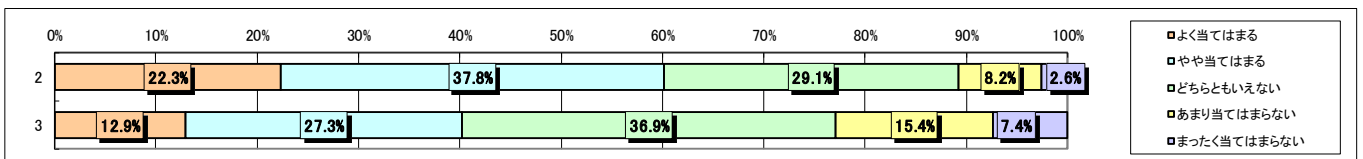
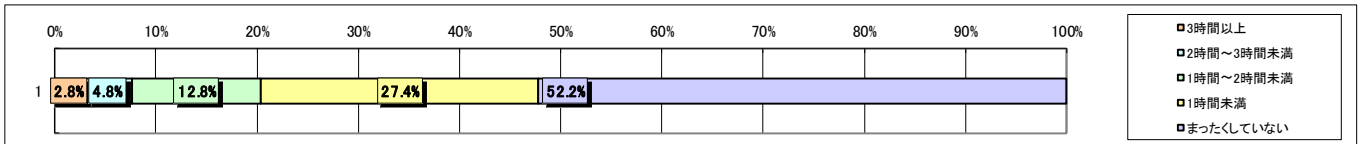
分野	この授業の進め方について		この授業の 平均値	無効 回答数
III	5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	10
	6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	5
	7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	6
	8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.6	2

分野	この授業を受けてみて		この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9	新しい考え方・発想に触れた。	4.0	2
	10	基本的知識が得られた。	4.1	2
	11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	3
	12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.5	6
	13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	5
	14	学問的興味をかきたてられた。	3.8	7

分野	この授業を総合的に振り返って		この授業の 平均値	無効 回答数
V	15	授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	3
	16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.8	4
	17	この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	10

分野	その他		この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18	この授業の教室の大きさは適切であった。	3.9	7
	19	この授業の受講者数は適切であった。	3.9	8

集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)			
		授業の内容について友人と議論をした。	46.3%	
		発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	5.4%	
		授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	53.3%	
	その他	5.9%		



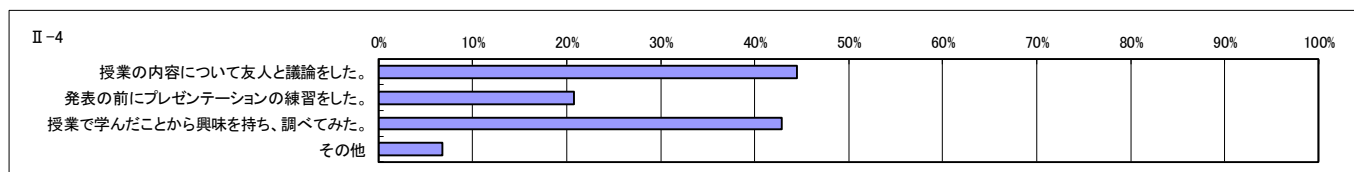
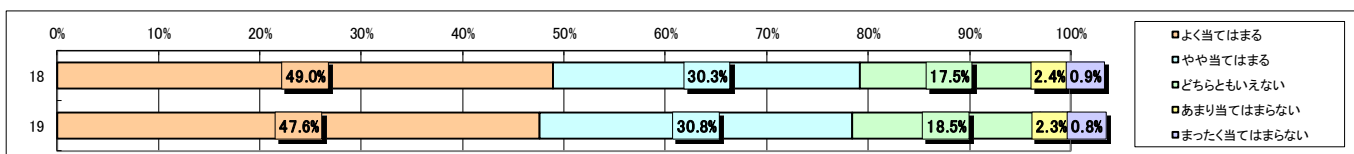
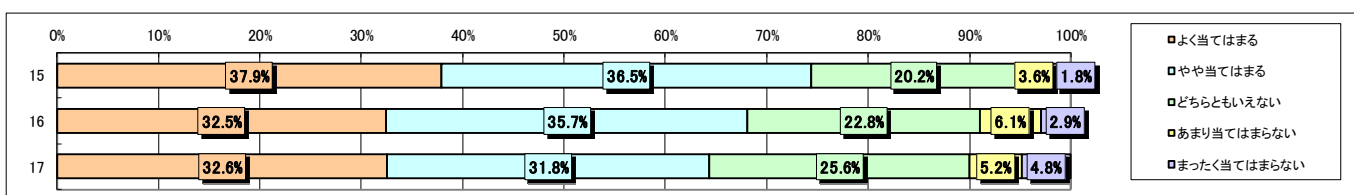
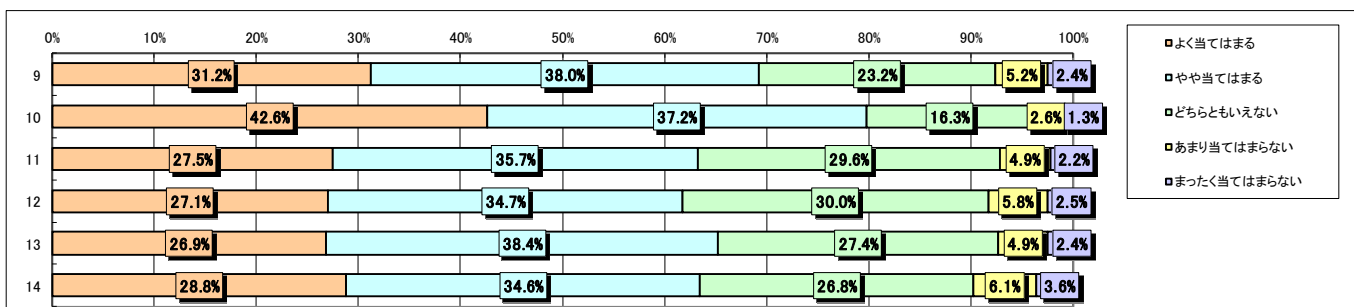
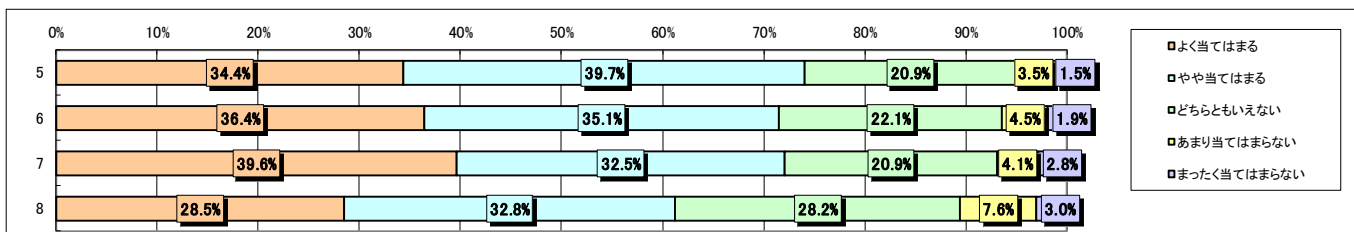
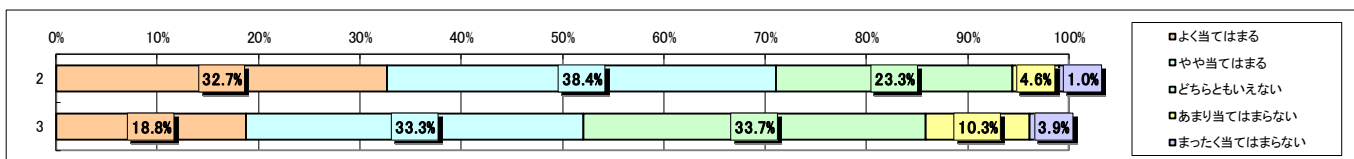
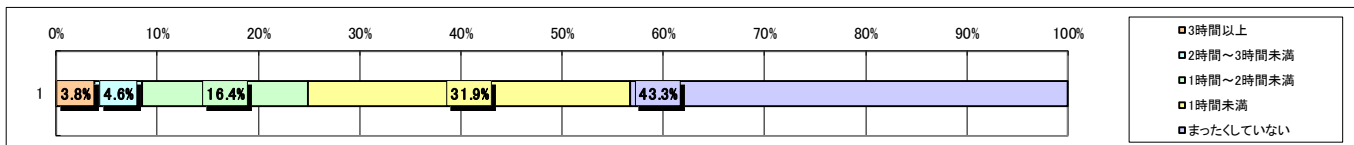
平成28年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 自然科学科目群

回答数(全体): 2018

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	37
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	3
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	6
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	5
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	1
	10 基本的知識が得られた。	4.2	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.8	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	0
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	4
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	3
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	6
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	5
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	44.5%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	20.8%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	42.8%	
	その他	6.8%	



平成28年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 学際科目群

回答数(全体): 975

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	23

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	1
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	2
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		

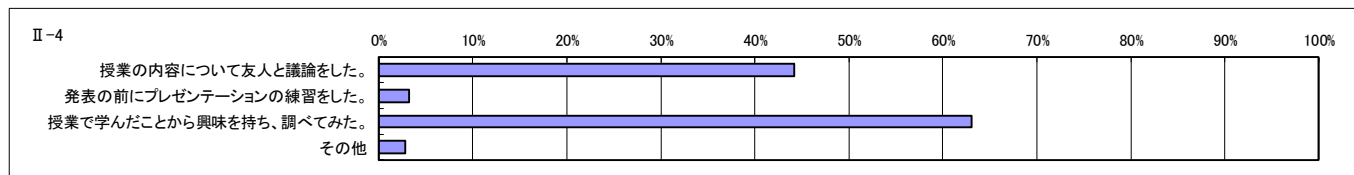
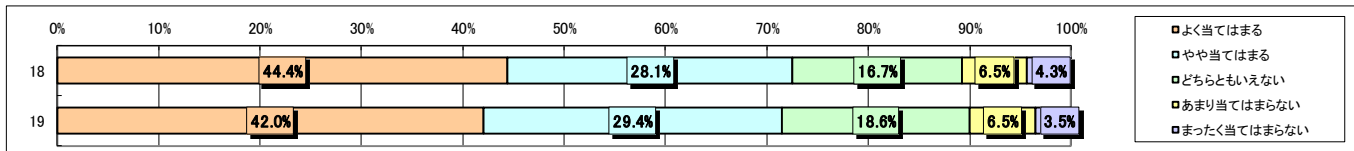
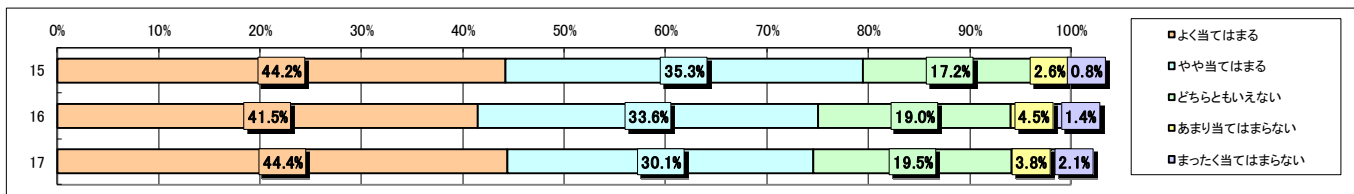
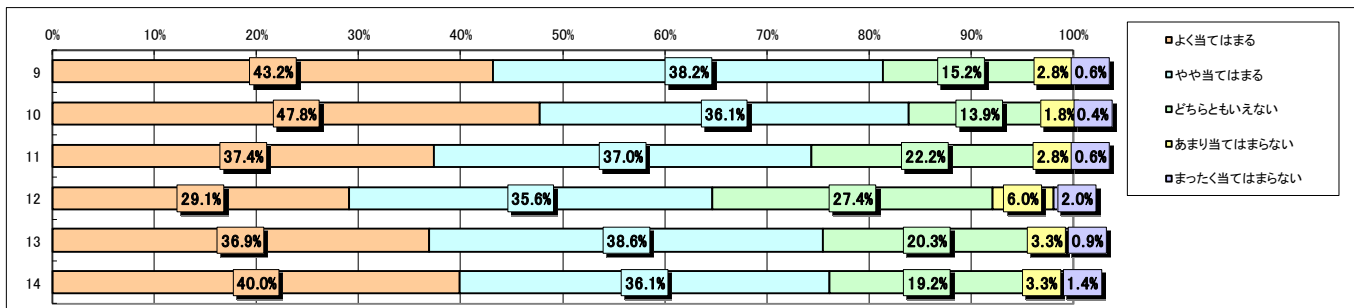
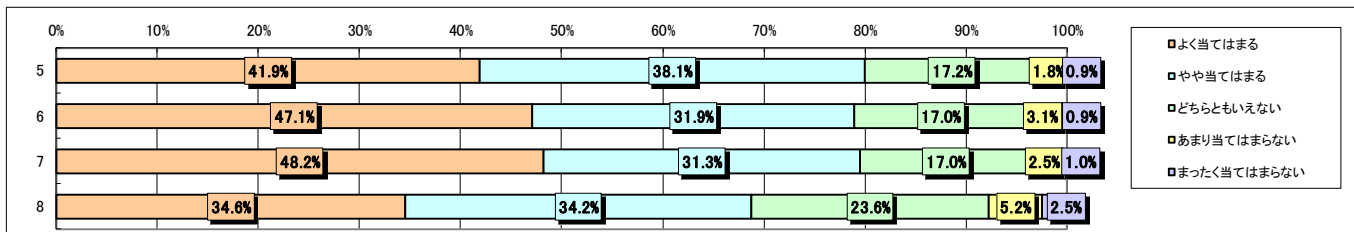
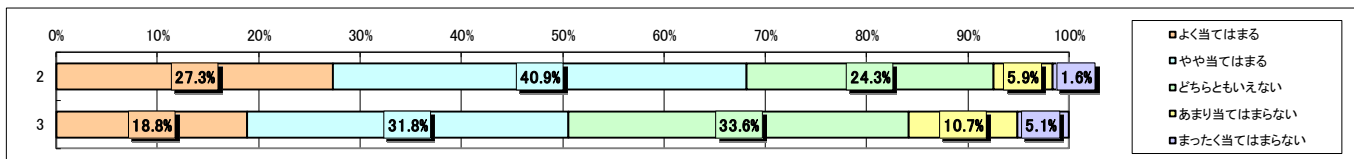
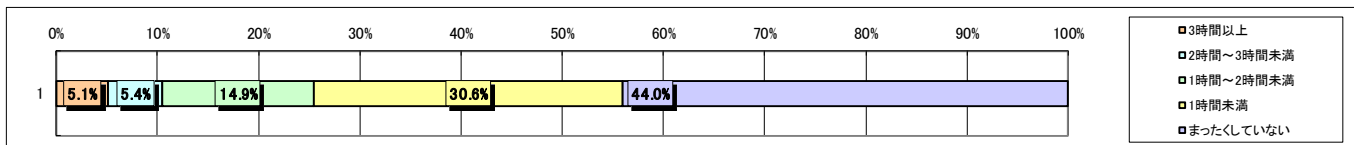
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.2	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	3

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	1
	10 基本的知識が得られた。	4.3	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.1	4

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	3

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	2

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	44.2%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	3.2%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	63.1%
	その他	2.8%



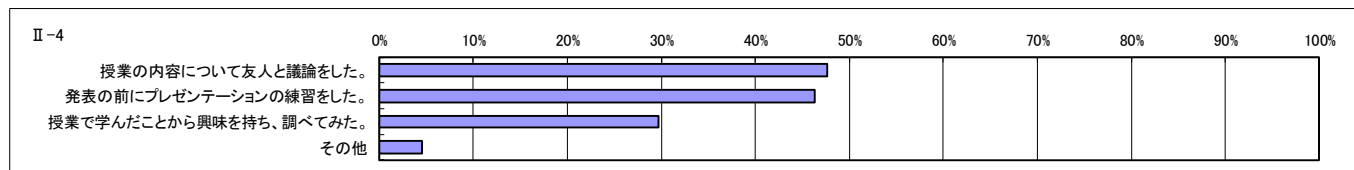
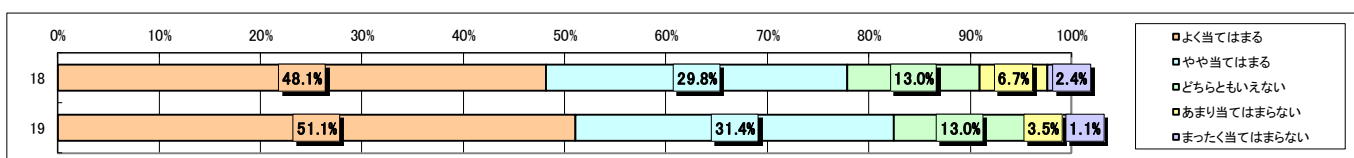
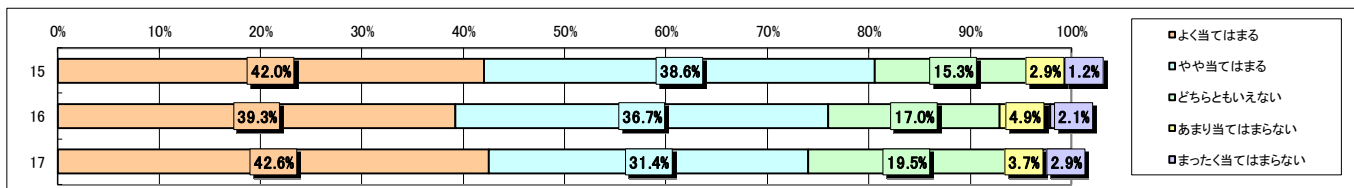
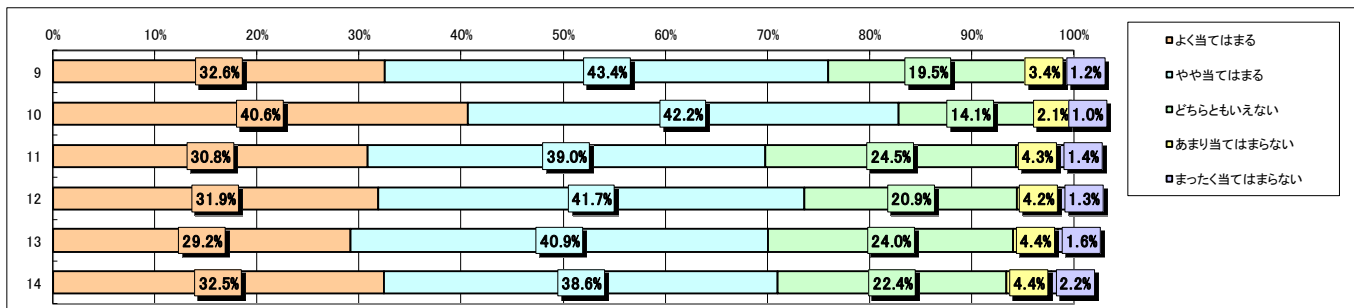
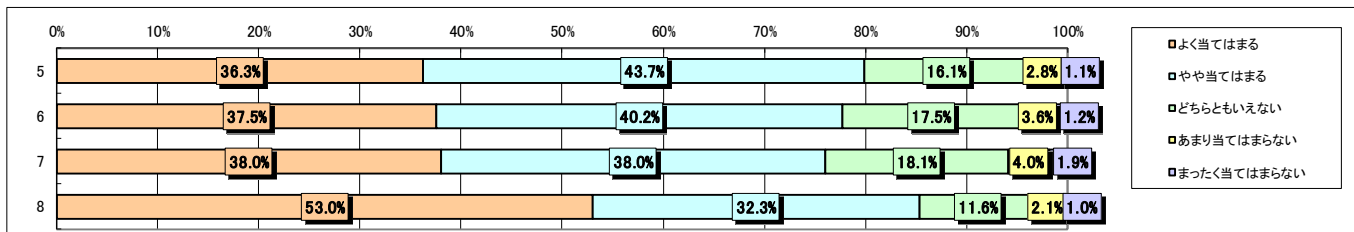
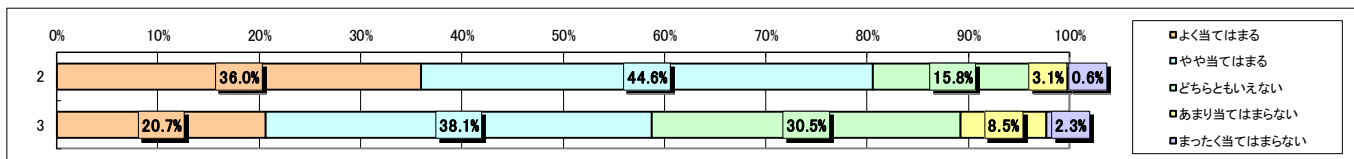
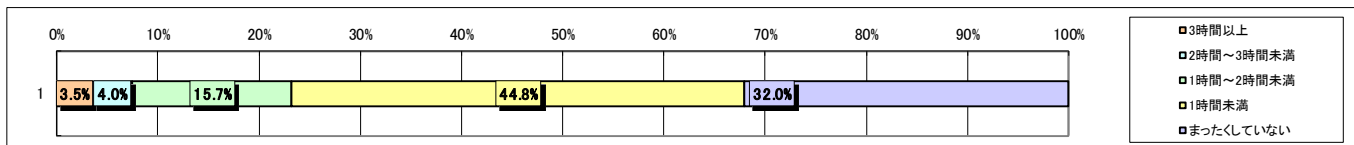
平成28年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2577

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	29
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.1	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.7	2
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	7
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	5
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.2	4
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	8
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	8
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	2
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	7
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	7
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	47.6%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	46.3%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	29.6%	
	その他	4.5%	



平成28年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数(全体): 11199

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	184

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	4
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	23
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	42
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	14
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	8
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	9

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	10
	10 基本的知識が得られた。	4.1	10
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	20
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	14
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	13
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	30

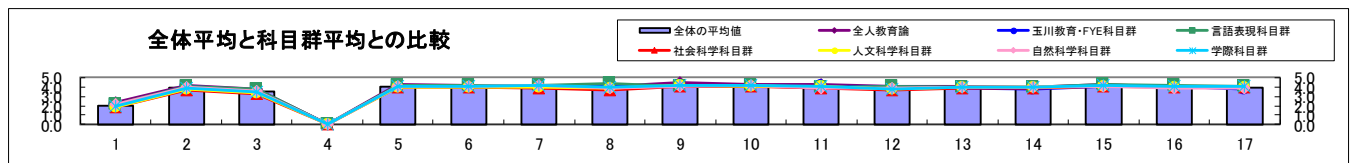
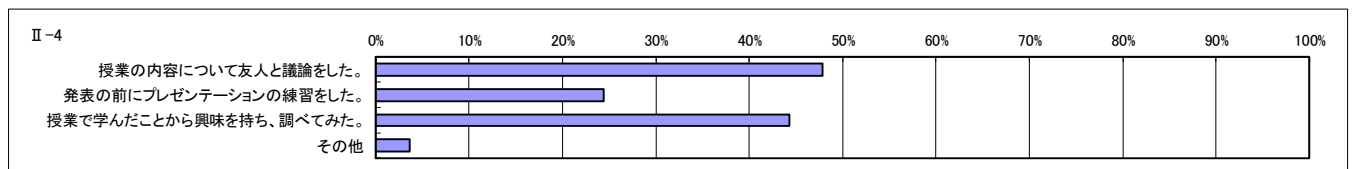
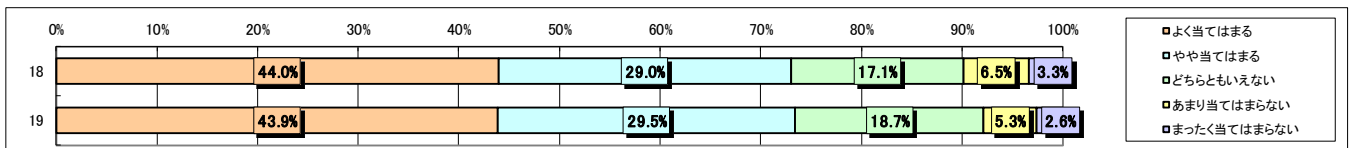
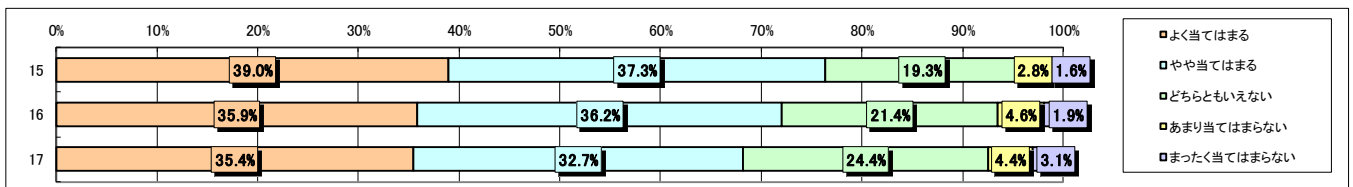
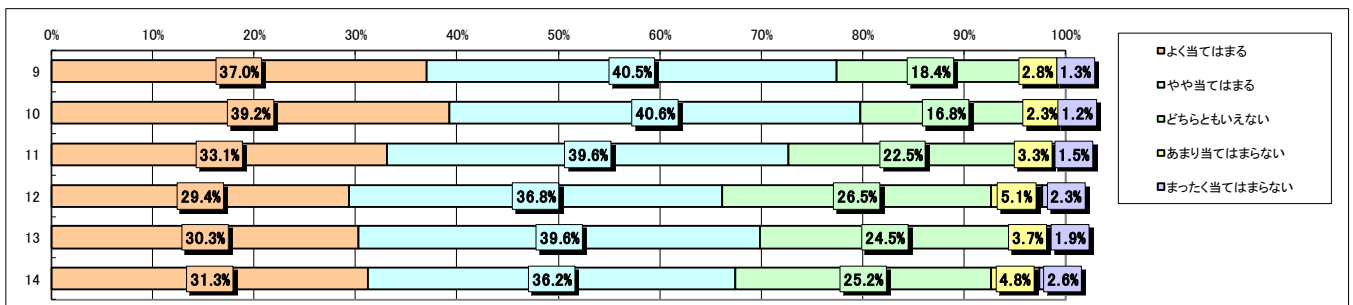
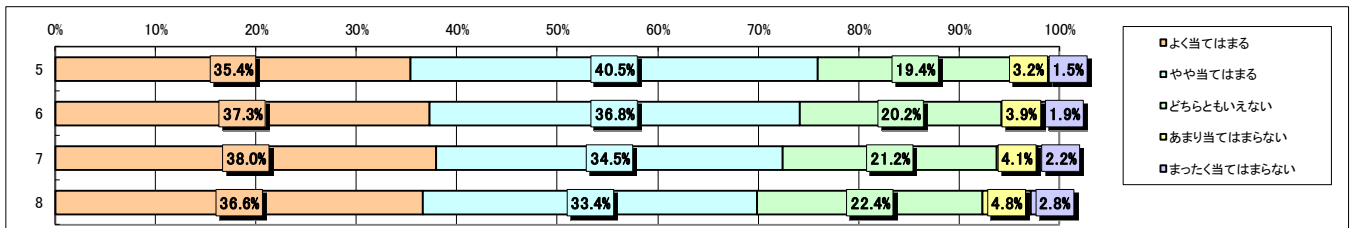
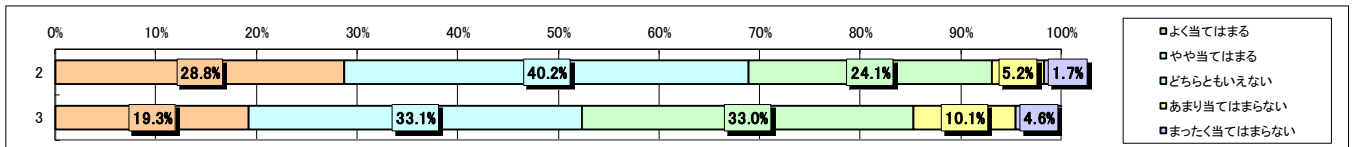
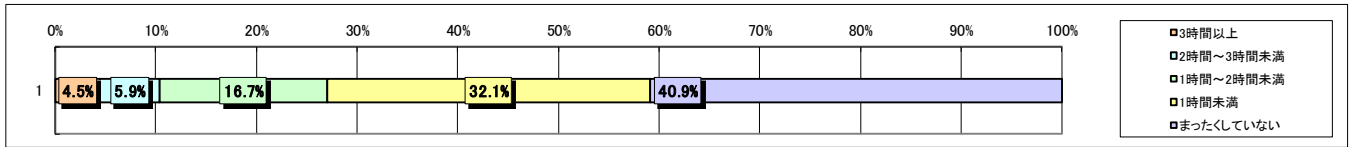
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	17
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	12
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	34

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	33
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	30

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	47.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	24.4%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	44.3%
	その他	3.7%

◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値 = (「5」回答数 × 5 + 「4」回答数 × 4 + 「3」回答数 × 3 + 「2」回答数 × 2 + 「1」回答数 × 1) / 回答数 小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数



平成28年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次ゼミナー 102

回答数(全体): 1658

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	24

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	1
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	3
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

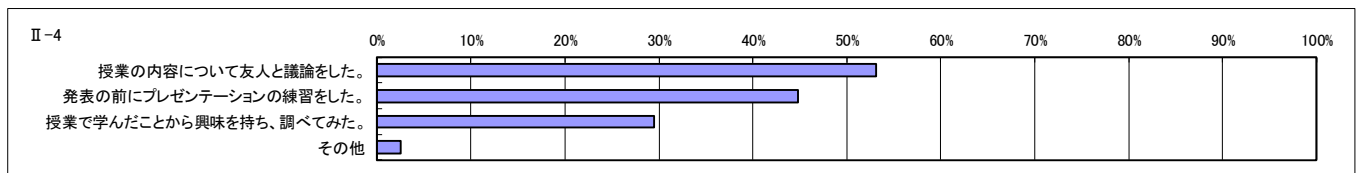
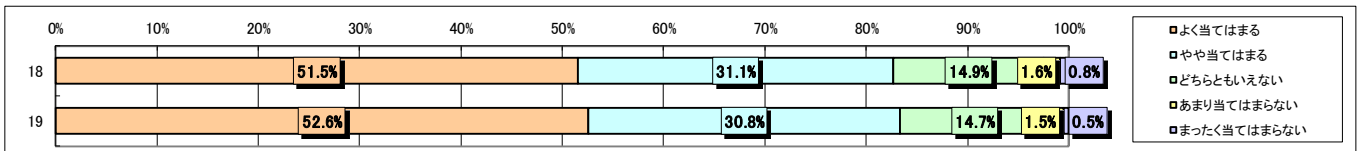
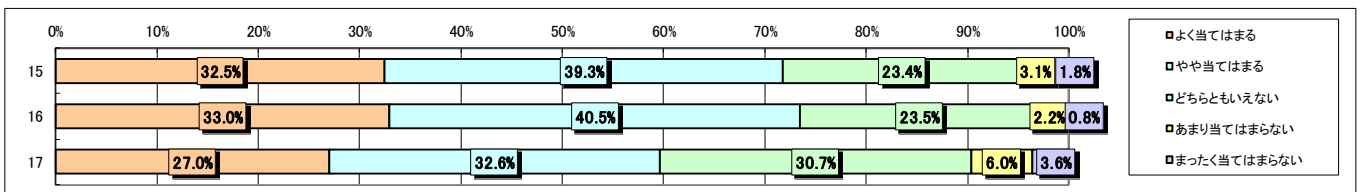
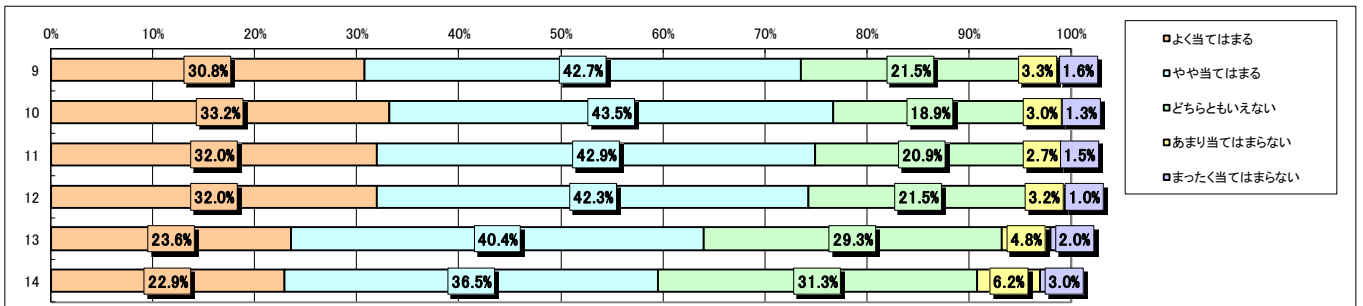
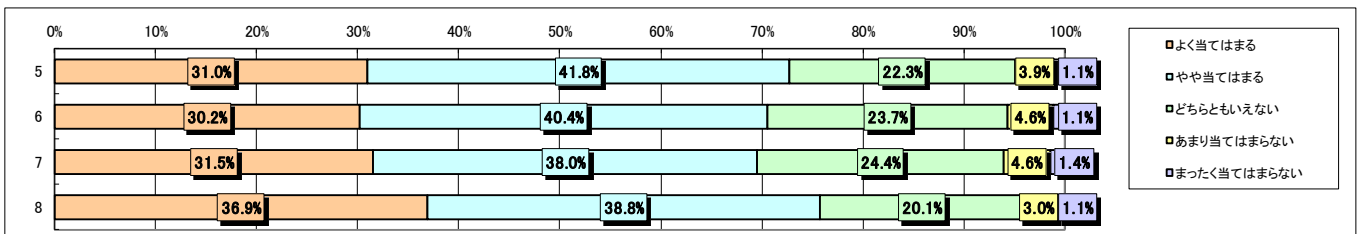
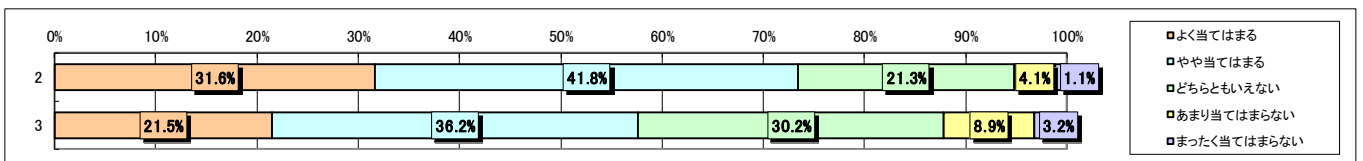
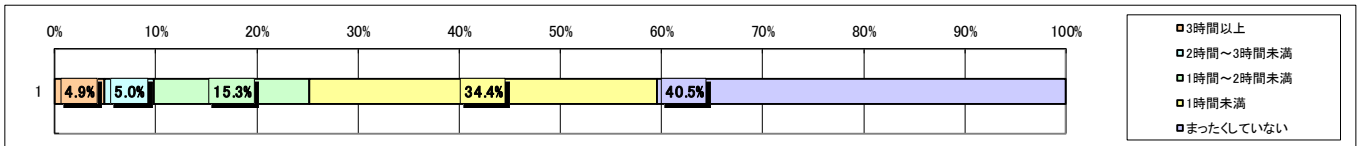
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	4
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	0

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.0	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	1
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.7	2

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	2

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	3

集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	53.1%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	44.8%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	29.5%
	その他	2.5%



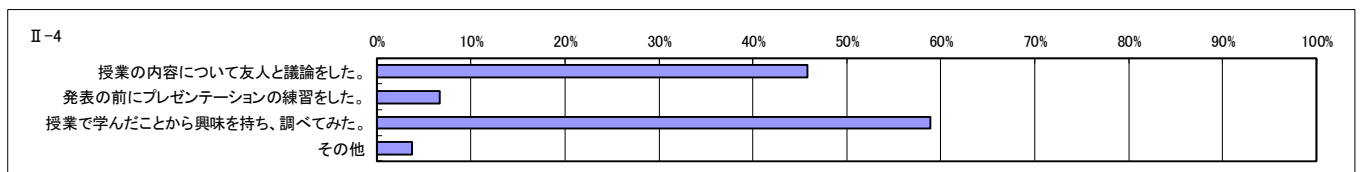
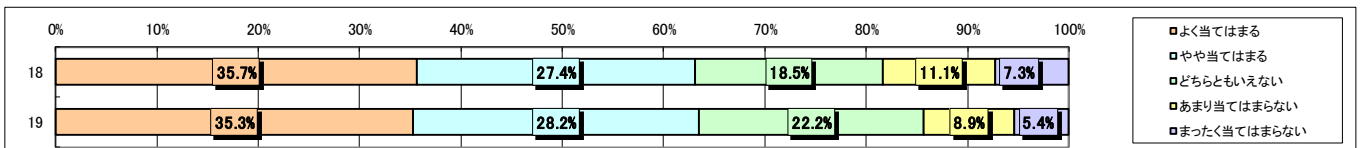
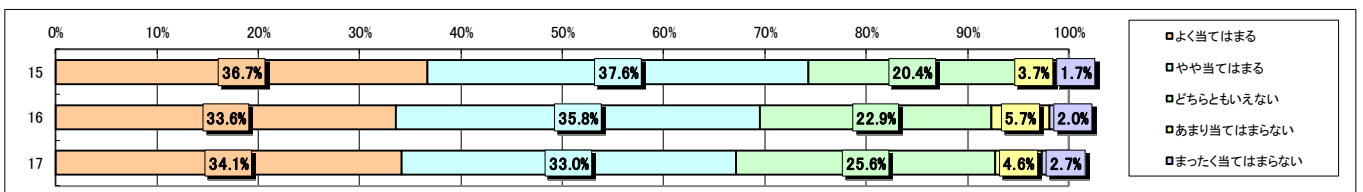
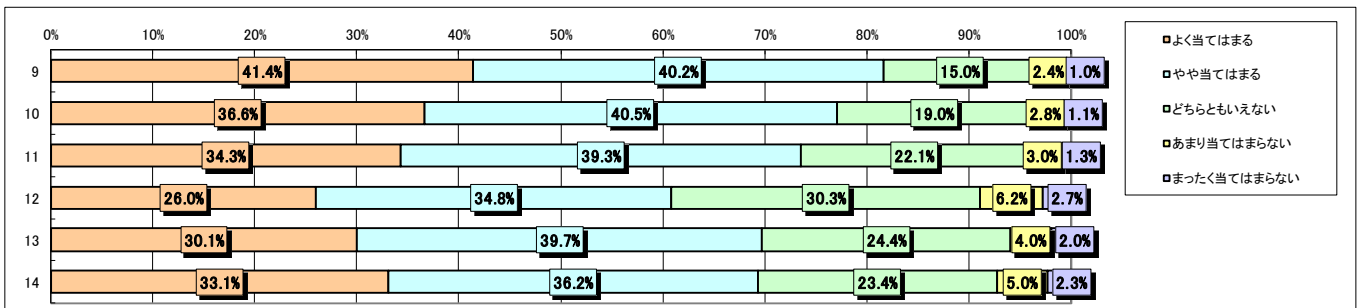
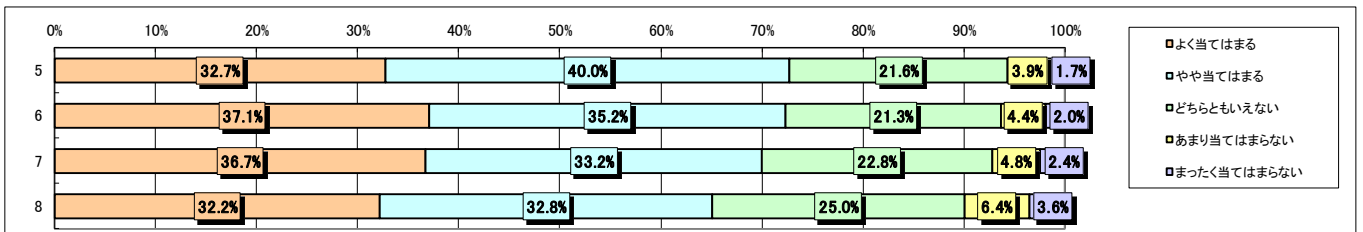
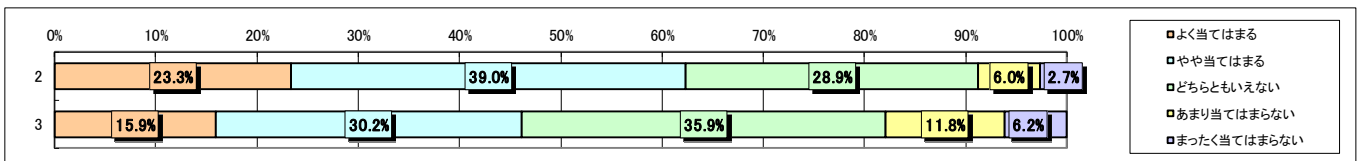
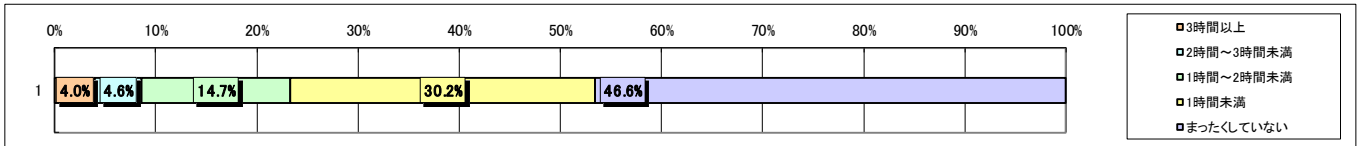
平成28年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 人文科学科目群

回答数(全体): 2249

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	45
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.7	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.4	3
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	8
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	3
	10 基本的知識が得られた。	4.1	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	6
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	8
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	7
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	6
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.7	11
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.8	7
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	45.8%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	6.6%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	58.9%	
	その他	3.7%	



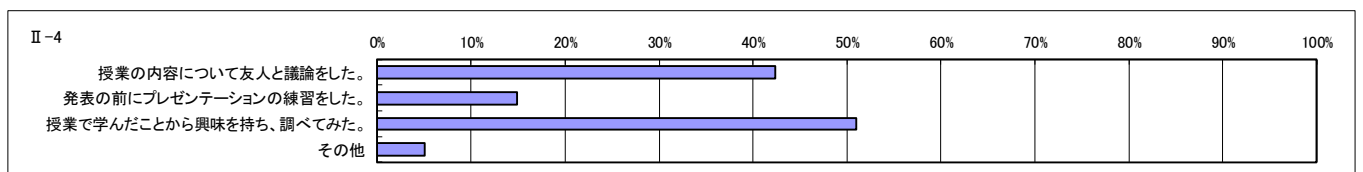
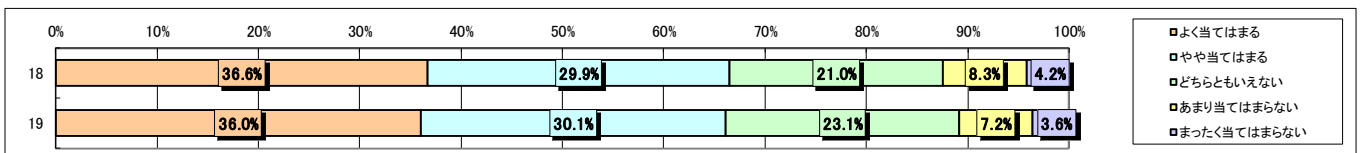
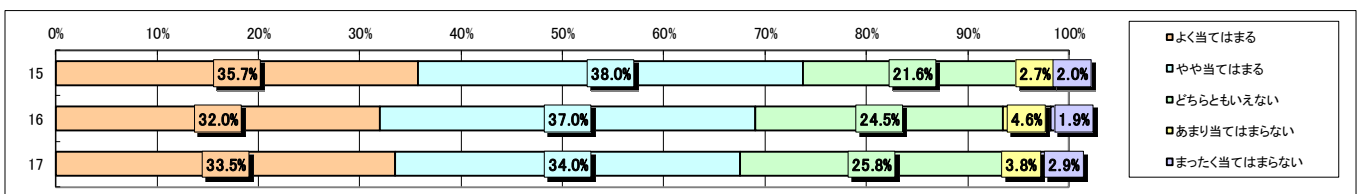
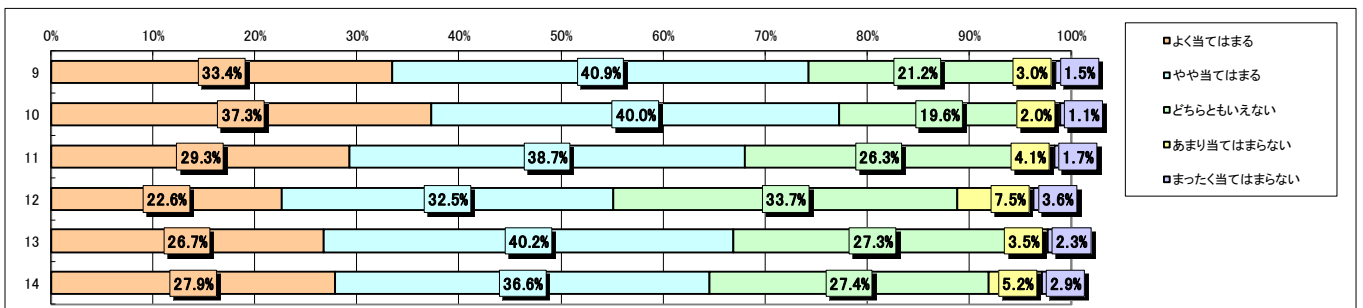
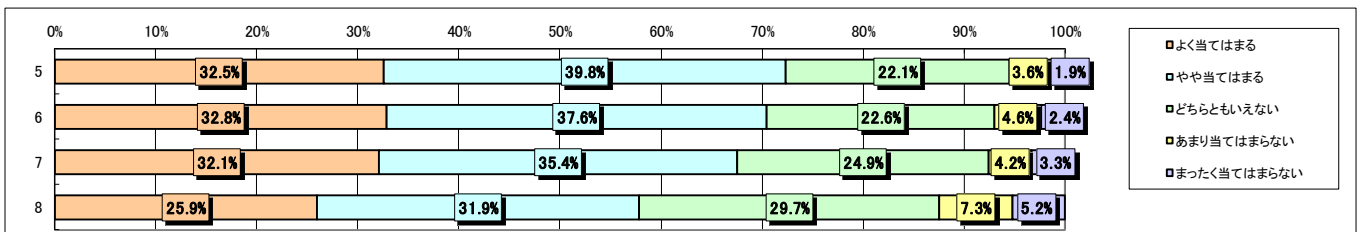
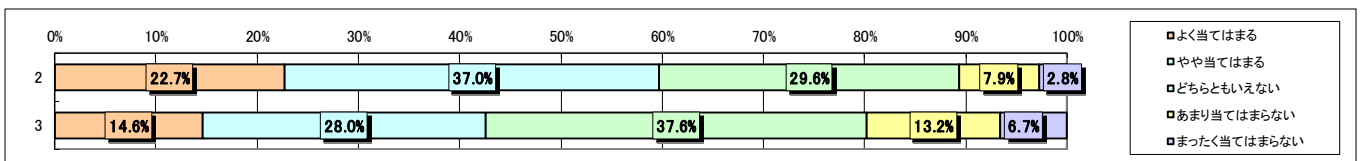
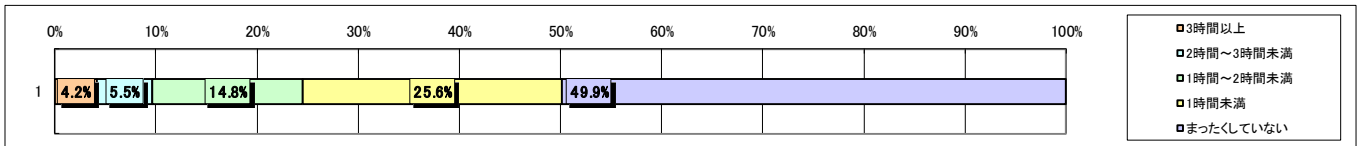
平成28年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 社会科学科目群

回答数(全体): 1926

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	27
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.7	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.3	5
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	7
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	7
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	3
	10 基本的知識が得られた。	4.1	5
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.6	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	5
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	5
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	4
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	4
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	8
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	3.9	5
	19 この授業の受講者数は適切であった。	3.9	6
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	42.4%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	14.9%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	50.9%	
	その他	5.1%	



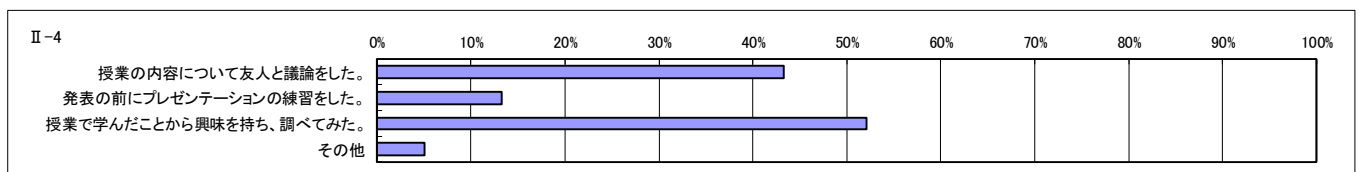
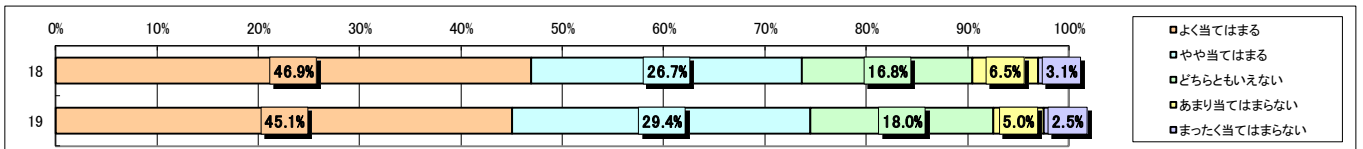
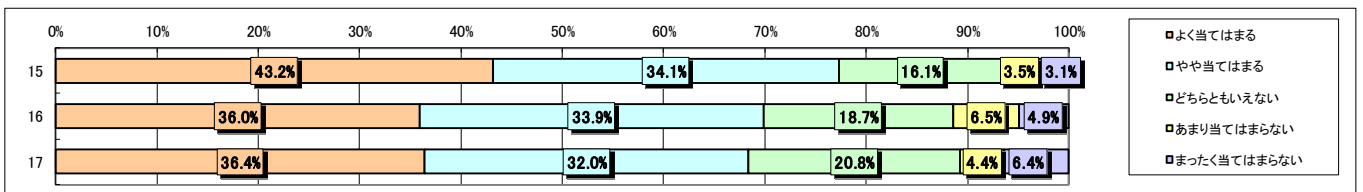
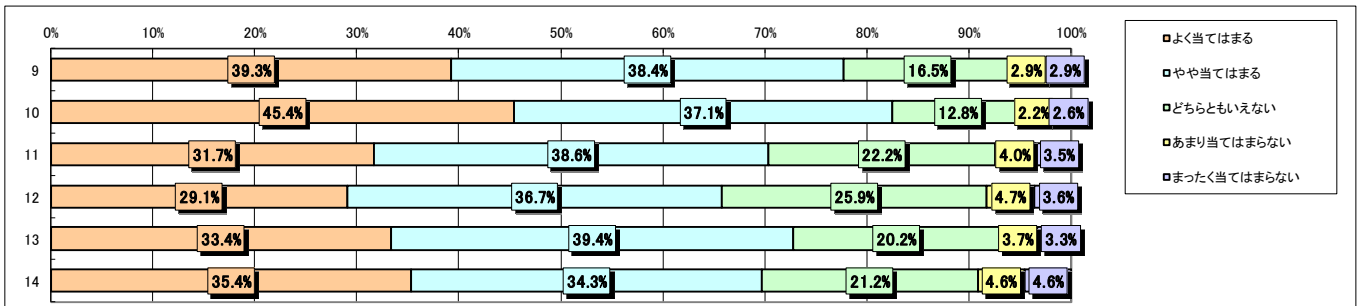
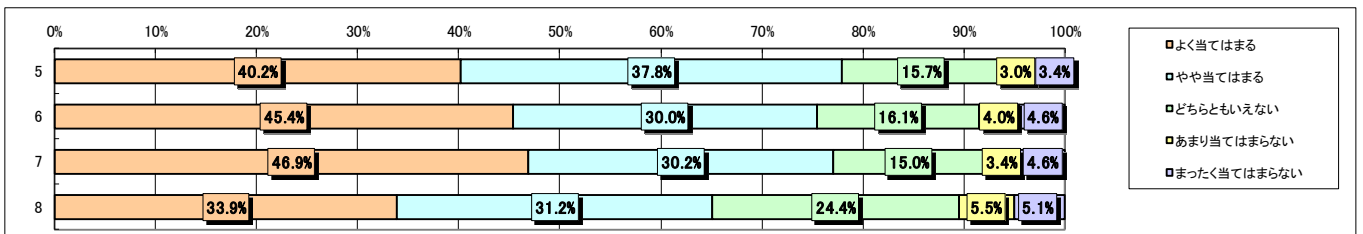
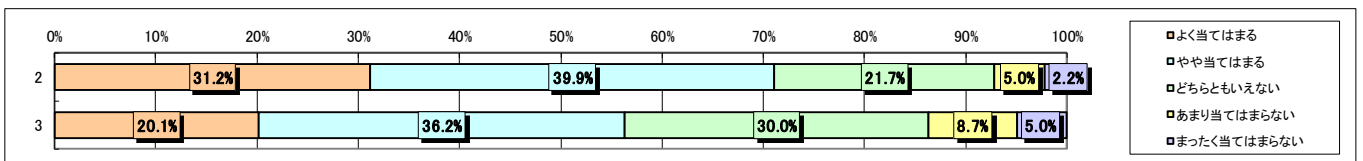
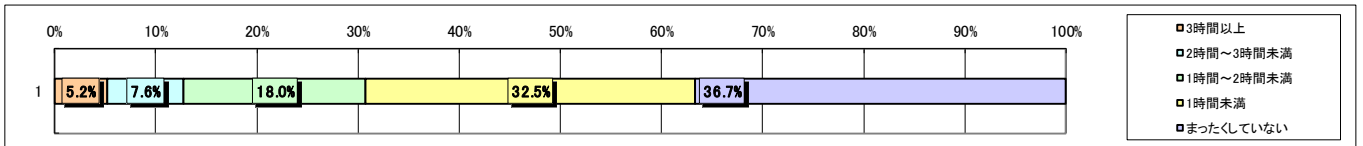
平成28年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 自然科学科目群

回答数(全体): 1208

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	12
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	2
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	3
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	0
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	2
	10 基本的知識が得られた。	4.2	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	1
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	3
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	4
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	4
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	43.3%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	13.2%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	52.1%	
	その他	5.0%	



平成28年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 学際科目群

回答数(全体): 1407

分野	この授業に対する学生の学修時間について		この授業の 平均値	無効 回答数
I	1	1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	40

分野	この授業に対する学生の取り組みについて		この授業の 平均値	無効 回答数
II	2	この授業に積極的に参加した。	3.8	1
	3	この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	3
	4	学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

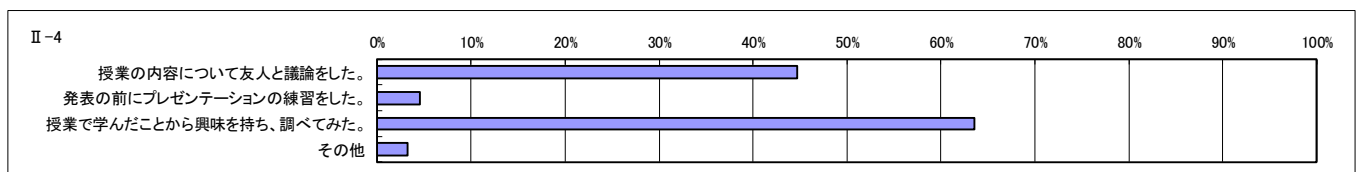
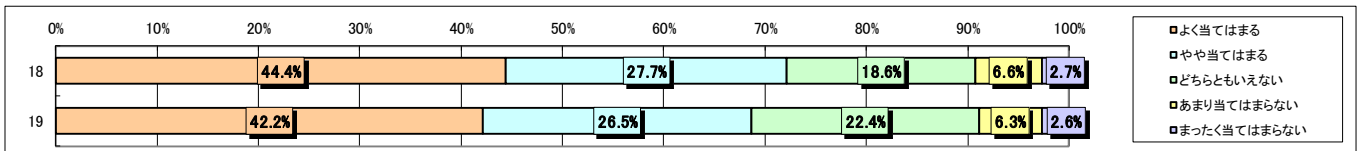
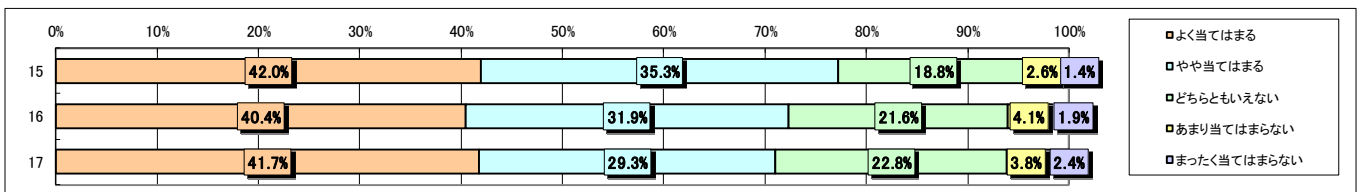
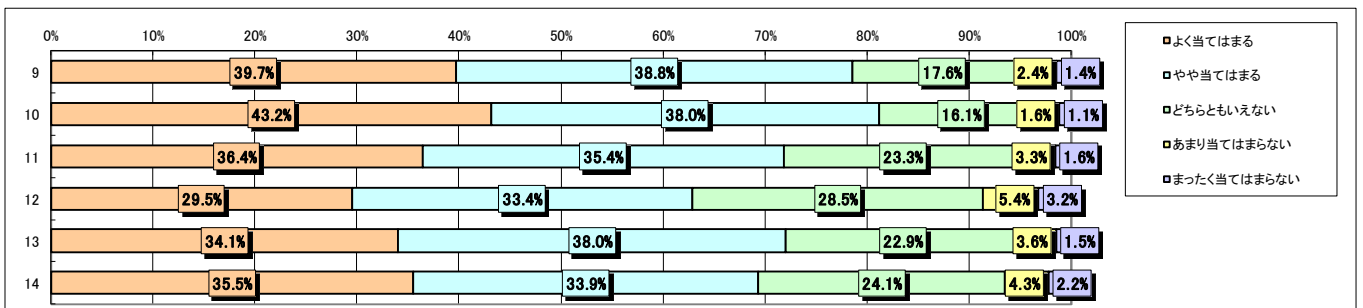
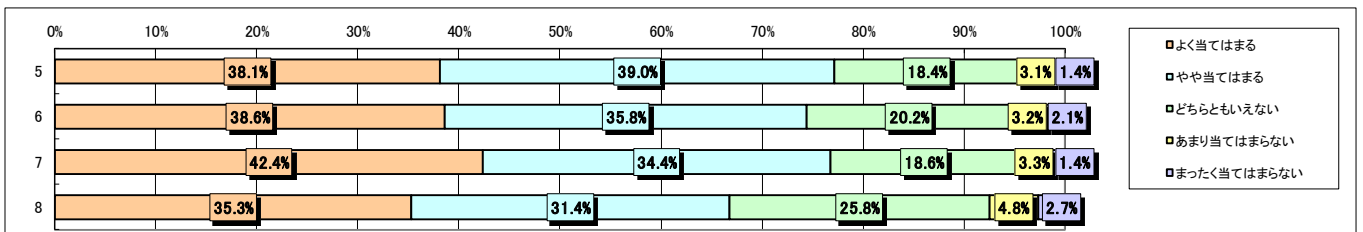
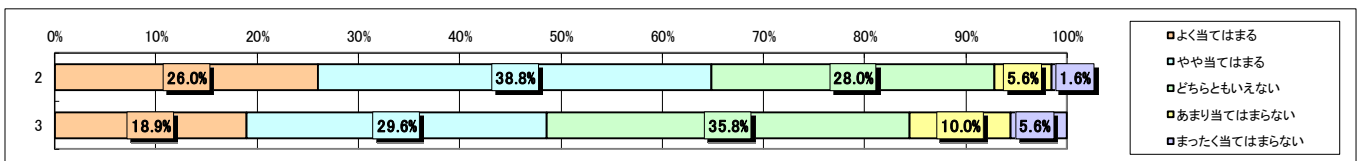
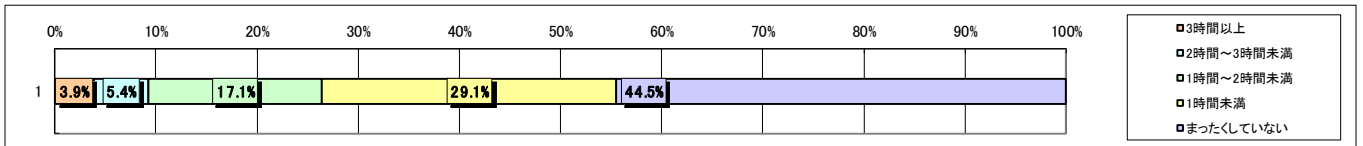
分野	この授業の進め方について		この授業の 平均値	無効 回答数
III	5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	7
	6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	3
	7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	1
	8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	3

分野	この授業を受けてみて		この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9	新しい考え方・発想に触れた。	4.1	0
	10	基本的知識が得られた。	4.2	1
	11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	1
	12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	4
	13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	1
	14	学問的興味をかきたてられた。	4.0	7

分野	この授業を総合的に振り返って		この授業の 平均値	無効 回答数
V	15	授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	3
	16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	2
	17	この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	8

分野	その他		この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18	この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	5
	19	この授業の受講者数は適切であった。	4.0	6

集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。		44.7%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。		4.5%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。		63.6%
	その他		3.2%



平成28年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2233

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	28

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.1	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.7	2
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

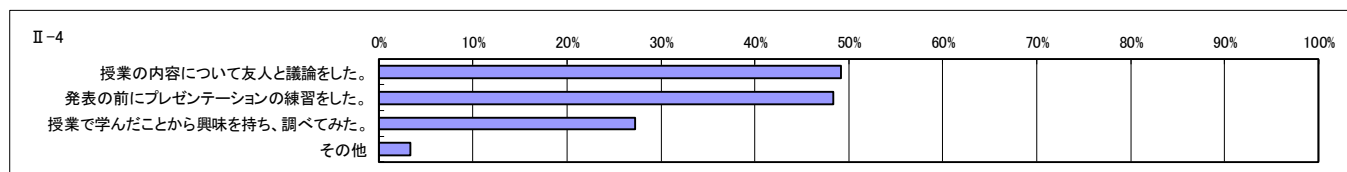
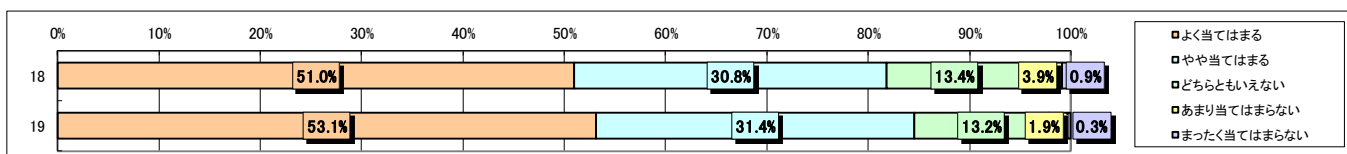
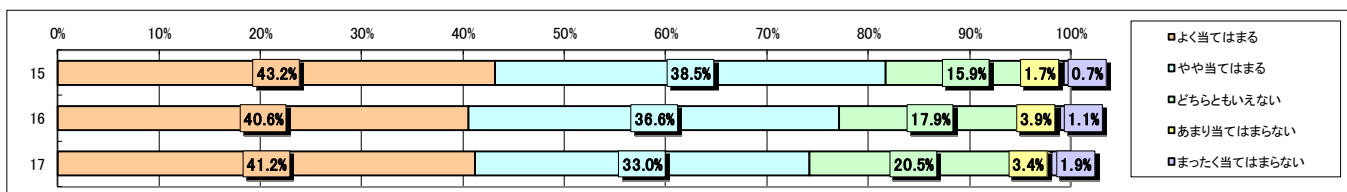
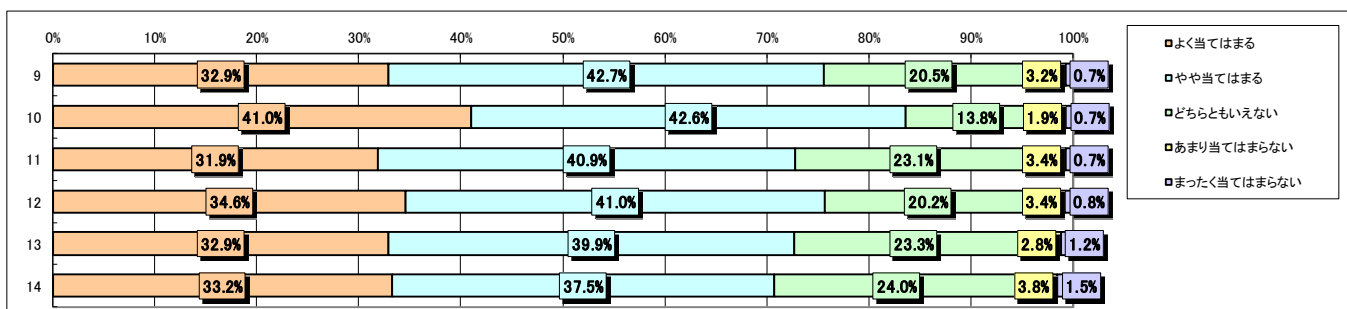
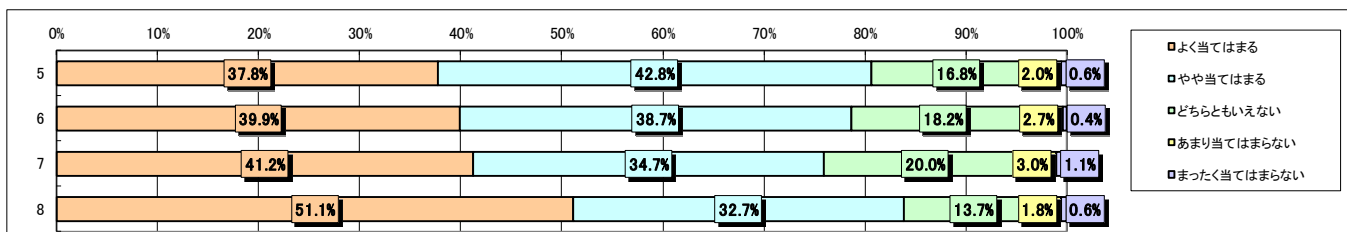
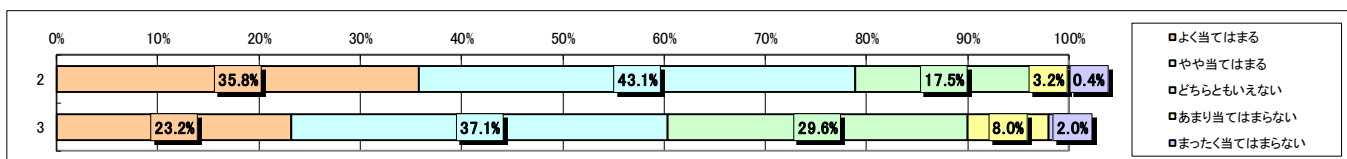
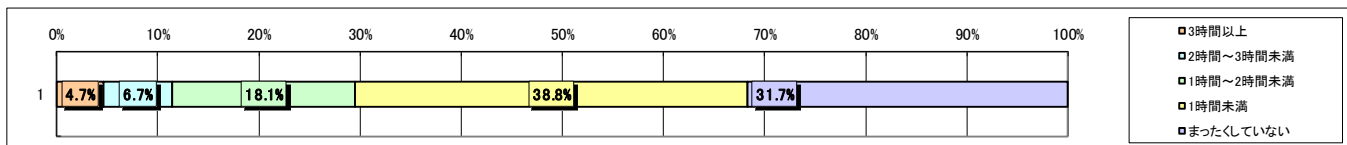
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	11
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	0

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	1
	10 基本的知識が得られた。	4.2	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	4
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	0
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	7

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	6

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	4
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	3

集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	49.2%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	48.3%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	27.3%
	その他	3.3%



Ⅱ 大学院 FD 活動報告

§ 文学研究科

(1) 第8回 ELTama 英語教育セミナーの開催

英語教育専攻では、8月22日に第8回 ELTama 英語教育セミナー（玉川大学英語教研究会主催）を計画し、学外の方を招き講演、卒業生現役英語教員の事例報告ならびに、ディスカッションを予定していた。大学院生は運営を担当する予定であった。しかしながら、直前の台風により中止となってしまった。セミナーを通して英語教育専攻の教員は英語教育の現場での授業実践や授業改善を知り、研究科での授業に役立てるよい機会となるので来年以降も計画したい。

(2) 人材養成のあり方の改善を目的とした取り組み

文学研究科の AP・CP・DP の見直しに合わせて、人間学研究科は人材養成のあり方の改善を目的としてプロジェクトチームを組織して CP の変更案を作成したが、CP の大幅な変更に対しては研究科内での合意がえられなかった。カリキュラムの変更は次年度の課題とし、CP に関して僅かの文言の修正にとどめた。

(3) 大学院特別講演会の開催

人間学研究科では外国における大学教育のあり方と問題を知るために大学院特別講演会を開催した。

日時 : 2016年7月29日(金) 17:00-18:30

講師 : カレ・ピーライネン(Kalle Pilainen)氏
(フィンランドから早稲田大学への在外研究者)

テーマ : フィンランドの教育と大学

両専攻の文学研究科教員(7名)および大学院学生が参加し、活発な意見交換が行われた。

S 農学研究科

(1) 授業改善の取り組み

①授業アンケートの実施と授業改善へのフィードバック

個々の院生への包括的な授業アンケートを実施した。

このなかで研究科目において「教員の細かな指示通り」に研究を進めるよう指導されたという回答が3割あった。研究科目のほとんどは研究指導教員や他の院生との共同研究であるが、あたかも教員の下働きのような指導をしているのであれば好ましくない。研究科会を通じて研究科目への院生の自主的な取り組みがなされるよう指示した。逆に「院生の考えで研究を進められた」という回答は7割を占めた。

②授業の英語化および英語教育

本年度より修士課程講義科目「科学英語表現」の授業を2人の教員が担当した。一人は農学研究者として学会発表や論文発表における実践的な科学英語表現を教え、もう一人は英語教育を専門とする非常勤教員が科学英語に特有な表現について文法的基礎を教えた。授業は好評で、修士論文の要旨を英語で記述する際に役立つことが期待される。

各教員には秋学期、授業科目における英語の使用をお願いした。15回の授業中、少なくとも1回は英語での授業を実施した科目が14科目中8科目あった。教員のプレゼン資料を英語で作成し、要約の説明や質疑応答を英語で行うなどの取り組みがみられた。また演習科目では院生が英語論文を英語で解説する試みもみられた。

③シラバスの改善

授業科目のなかにはこれまで「講義時間中に院生と相談して授業内容を定める」対応もあり、シラバスに授業内容が明記されていないものが見受けられた。H27年度末からカリキュラム開発の一環として各科目シラバスのテーマ、キーワード、授業概要、授業外指示の充実を進め、本年度の計画的な授業実施につながった。

(2) 研究談話会

新任の農学部教員2人、外部講師3人の講演会を研究談話会として開催した。このうち小果樹に関するふたつの外部講師による講演は、地域農産物の商品開発につながる研究指導を紹介したものであった。研究科目における教員と院生による取り組みが地域貢献につながった興味深いものであり、本学における研究科目指導の参考になった。

(3) 研究指導能力の向上

教員の研究指導能力の一部は研究指導を受けた院生の研究成果の公表として評価することができる。農学研究科修士課程研究指導担当教員においては「日本語での学会発表」を院生が行えるような指導が行われてきた。本年度は優秀な修士課程の院生に対して、さらに高度な指導が試みられた。その結果、2人の修士課程2年生が英語での学会発表、および英語での学術論文出版を達成した。今後、教員の論文作成、英文校閲などの論文執筆指導能力のさらなる向上につながることを期待される。

§ 工学研究科

(1) 全教員参加の必修科目「特別演習 I」の効果分析と今後の改善の検討

工学研究科の必修科目「特別演習 I」は、修士課程 1 年生を対象とし、全教員がその内容と評価に関わる科目である。この科目の狙いは、装置の製作等の実際的な課題による工学の基礎的な知識および技術の修得と、その成果の「大学院技術発表会」における発表・質疑応答を通じた技術者および研究者に必要なコミュニケーション能力の向上である。

今年度の技術発表会は 11 月 4 日に開催され、大学院生の発表 4 件に対して、26 名の参加者が訪れた。すべての発表について参加した教員および他の学生と活発な質疑応答が行われ、昨年同様に科目の狙い通りの効果が確かめられた。その後の教務担当者会では、履修者がより本科目の主旨にあった実際的な課題に取り組むよう、教員の指導や説明内容の改善と共有化をはかった。平成 29 年度の 4 月のガイダンスで、修士課程 1 年生に対して教務担当より、改善した説明を行う予定である。

(2) 大学院生による授業評価アンケートの実施と授業改善の推進

平成 28 年度春学期および秋学期において、大学院生による授業評価アンケートを実施した。修士課程と博士課程の大学院生に履修した科目の授業評価を行ってもらった。各科目の授業評価アンケート結果を科目担当教員にフィードバックし、授業改善に活用してもらった。また、各科目の授業評価アンケートの結果を専攻ごとに集計し、教務担当者会および工学研究科会に提示・検討を行った。

授業評価アンケートの結果、春学期と秋学期の授業実施においては、1 科目（「技術英語プレゼンテーション」）を除き、とくに問題は見出されず、良好であった。「技術英語プレゼンテーション」の評点が低くなった原因は、受講者の英語基礎力の不足であった。英語基礎力が低い学生に英語力を修得させる方法については、科目担当者だけでなく、工学研究科としての課題であると認識し、継続して検討していく。

以上、授業評価アンケートの実施-評価-改善活用までは達成することができた。しかし、改善の記録と効果確認のしくみについては不十分であるため、今後、検討していく必要がある。平成 29 年度も授業評価アンケートを実施し、授業の改善活動を継続していく。

(3) 大学院生の英語勉強会の効果分析と英語力向上に向けた改善点の検討

工学研究科では所属する大学院生全員を対象とする週 2 回の英語勉強会を開設しており、平成 28 年度は平成 28 年 6 月 25 日と平成 29 年 1 月 14 日の TOEIC 試験を受験するように指導した。この講座を開設する目的は所属する大学院生の英語力を向上させることであり、同時に各教員が所属する大学院生の英語力がどの辺にあるのかを把握することである。第 5 回工学研究科会（平成 28 年 7 月 21 日開催）と第 10 回工学研究科会（平成 29 年 1 月 26 日開催）においては、それぞれの直近の試験における成績と過去二年分（平成 27 年度と 26 年度）の成績を用いて分析した結果を報告し、大学院担当教員から意見を頂戴した。いずれの回においても、各教員の講義や研究指導を通じた所属大学院生の英語力を向上させるような指導方法を具体的に議論するには至らなかったものの、大学院生全体の英語力の傾向について着目した意見が出され、大学院担当教員全員で共有した。また、分析対象となるサンプル数が少なく統計的な視点で検討するまでには至っていないものの、継続してデータを蓄積すること

でより正確な現状把握とより具体的な指導方針の明確化が可能となるとの認識も共有された。
このことから、次年度も継続して TOEIC 受験対策講座は実施する。

§ マネジメント研究科

(1) 大学院授業評価アンケートの実施

予定通り平成 28 年度から授業評価アンケートを導入し、春学期、秋学期ともにアンケートを実施した。全院生による記述式のアンケートであり、回答のコピーは担当教員にも送付され授業改善に利用された。

アンケートでは、授業内容に関する感想、意見、注文、希望などに関して、点数での評価でなく、具体的に記述させたことにより、今後の授業改善に役立つ内容になった。具体的には、授業の内容とレベルが適切であったかとの問いに対しては、「自らの研究に活用できる内容で大変勉強になった」、「15 回の授業では足りなかった（この内容の授業を増やしてほしい）」などの回答があった。また、授業改善についての問いに対しては、「授業に、ビジネスの現場における演習があると更に良かった」、「内容・分量に対して授業時間が足りなかった」など具体的な指摘があった。勉学時間に対する問いに対しても、「予習 1 時間、復習 1 時間」、「当初、文献読み込みに 1 回 5 時間程度、最大 10 時間の予習が必要だったが、後半からは 30 分から 2 時間程度」など具体的な回答が得られた。これらの具体的な回答は、教員が今後の授業の中で取り扱う内容の質と量や課題の量などを決める参考となった。

(2) 教員、院生懇談会の実施

修士論文中間発表時および修士論文発表後に全院生と全教員による懇談会を例年通り実施した。研究上のアドバイスだけでなく、普段顔を会わせない教員と院生のコミュニケーションの場として機能している。

このような活動による具体的な教育上の効果としては、たとえば、リラックスした雰囲気の中で、院生は自らの発表内容に関して、指導教官以外、また、専門以外の教官から感想、質問、アドバイス等を受けることができる。それにより、院生は幅広い見地から自らの研究内容や論文を見直し、新たな視点や見落されていた論点などに気づくことができることなどが挙げられる。

(3) 新カリキュラムの決定

平成 29 年からスタートする、グローバル・マーケティング、会計学研究、グローバル・ツーリズムの 3 コース制の新カリキュラムを決定した。

グローバル・マーケティング・コースにおいては、DP において、世界を一つのシステムとしてとらえるグローバル・マーケティングの視点の理解と実践できることを目指し、それを可能にすべく幅広いマネジメント理論教育とケーススタディを充実させたカリキュラム編成を行っている。会計研究コースにおいては、DP で BATIC や USCPA など国際資格を通じた国際会計人養成を掲げており、それら資格取得を可能にする理論研究と問題演習からなるカリキュラムを設定している。グローバル・ツーリズム・コースにおいては、世界全体を一つのシステムとしてとらえるグローバル・ツーリズムの視点を理論的に理解し実践できる能力養成を DP に掲げ、ツーリズム産業や地域創生の現場やケーススタディなどから成るカリキュラムによりそれを可能にすることを目指している。

(4) 授業英語化への取組

引き続き授業英語化へ向けた努力を継続した。具体的には、教員全員に『大学教員のための教室英語表現』冊子を配付し、授業英語化の参考に供した。また、授業で使用する教科書と参考文献、およびケースについて、英語の文献を利用するよう促している。国際会計コースでは多くの文献が既に英語となっており、他のコースでも教科書が主要な参考書について国際的に使用されるテキストが指定されるようになっている。

S 教育学研究科

(1) FD 委員会の開催

毎月の教育学研究科会のあと、FD 委員会を開催し、教育学研究科のカリキュラム、学生に関する諸問題、今後の組織のあり方を中心として検討した。具体的には現在開設されている夜間コース（乳幼児教育研究コース）に加えて、IB 研究と教師教育研究の各コースにおいても夜間コースを開設することに伴っての科目の配置と、担当教員の過重負担が生じないような数年間を見通した授業運営計画の策定などを行なった。

(2) 授業公開

FD 研修の一環として、今年度新設された1年次必修科目「教育学研究方法」を研究科内で公開対象とし、全15回の授業全てに研究科の専任教員が研修のため参加した。これは、授業に参加した教員の研修として有益であっただけでなく、授業担当者にとっては授業運営の在り方（授業で提示する量的研究と質的研究の時間配分の再考）や授業内容の改善（量的研究と質的研究をどの程度まで扱うか、修論で文献研究を主とする学生についてはどのように対応するかの見直し）に寄与する取り組みとなった。

(3) 「人を対象とする研究倫理講習会」の開催

教育学研究科が独自に教員と学生を対象として4月13日（水）9・10限（17時～19時）、「人を対象とする研究倫理講習会」を開催し、本学が実施する「人を対象とする研究に関する倫理審査」及びCITIプログラム受講に関する講習会を行った。このことによって、教員と学生が研究倫理に関する必須事項を共有することができた。さらに、学術研究所の協力を得て、Bb上で研究を実施するうえで必要となるCITIプログラムが受講できるような仕組みづくりを実現し、教員と学生の研究活動を支援することができた。

(4) 授業アンケート等の実施

6月には新1年生を対象として学生生活や授業への取り組みの様子について自由記述のアンケートを実施した。生活も学業も概ね問題がない様子が窺えたが、SD学生に関しては共通して業務と授業の課題等への取り組みとの両立の難しさを記していたため、6名のSD学生の各部署の上司のもとを訪問し、SD学生の近況を共有するとともに、今後の対応について協議を行った。8月及び2月に1・2年生全員を対象に授業アンケート及び学生生活アンケートを実施し、その結果の分析を行った。8月の春学期アンケートについては、研究科のFD委員会において授業関連の結果を担当教員に提示し、授業の改善を促した。2月のアンケート結果についても同様の取り組みを行った。なお、学生生活アンケートのなかに院生室の机・ロッカー使用についての意見があった。

§ 教職大学院

(1) 玉川大学 教師教育フォーラムについて

2016年10月23日(日)、玉川大学教師教育フォーラムの午後の分科会において、次の2つの研究発表を実施し、活発な意見交換が行われた。

①松本 修教授：国語教育「読みの交流 新時代」 ゲストスピーカー：西田太郎氏（品川区立台場小学校教諭 本教職大学院修了生）他

②山口圭介教授：道徳教育「道徳の教科化は教員養成に何を求めるか？— 学校における道徳教育の充実を目指して —」 ゲストスピーカー：鈴木拓人氏（横浜市立都田西小学校教諭 本教職大学院修了生）他

フォーラムの各分科会に教職大学院の教員も参加し、発表されたことをもとにそれぞれの講義の改善を図ることを目的に、毎年FD活動の一つとして位置付けて取り組んでいる。①と②のいずれにおいても、これまでの教職大学院での講義を受けたゲストスピーカーが講義等から受け止めた内容をもとに発表をし、それについて担当教授や参加者から活発な意見交換が行われた。①の分科会においては読解の指導法について、②の分科会においては道徳教育の指導法について、それぞれの講義の良さと今後の改善点などが示唆された。

(2) 教職大学院 OBOG フォローアップ研修について

毎年のフォローアップ研修が、教職大学院 OBOG の学びの継続として、また年次の異なる大学院生のつながりを作る場として機能していることが本年度も再確認された。また、教職大学院の教員が毎回発表し、その発表についての意見交換を実施することで、本学の講義の質を高めるFDとしての効果もねらっている。また、来場したOBOGからはアンケートを実施し、大学院のどの講義が教育現場で役立ったかなどについて答えてもらうようにしている。本年度は次の2回の日程で実施した。

①6月27日(土)：山口教授による研究報告

教職大学院 OBOG (小林倫太郎氏 (SM7期)・比留川麻央先生 (SM3期)) による実践報告

②11月19日(土)：竹田教授による研究報告

教職大学院 OBOG (保坂美加子氏 (現職5期)・野崎良恵氏 (現職8期)) による実践報告

報告後、グループに分かれてサークルディスカッションを行った・OBOGからの発表と教授からの発表について、活発な意見交換が行われた。教職大学院の講義がOBOGたちのその後の仕事にどのように役立っているか、また今後どのような講義が求められているか等を確認することができた。議論をもとに、各教員が自分たちの講義の内容と方法との改善に努めている。

(3) FD 授業研究について

以下の1回の授業研究を実施した。

①5月23日(月) 11:00-12:40 (担当：田原教授) /12:40-13:20 協議会

「教育相談と特別支援教育の実践と課題 (第7回)」

実際に問題に直面したとき、周囲とどう連携するのか。学校内での体制作りや課題共有、さらに外部機関との連携を考えることをねらいとして実施した。

協議会においては、①「理論と実践の往還」のための授業づくりや教材開発の具体的な方策について、②ストレートマスターの実践経験不足を補う指導法について、③現職院生の実践経験を活用した指導法、等々についての議論が活発になされた。

教授陣も毎年必ず授業研究を行い研鑽に努めているという事実が、教職大学院の院生たちに良い印象を与えている。

今回のFD研究授業では、いじめ問題に直面したとき、周囲とどう連携するのか。学校内での体制作りや課題共有、さらに外部機関との連携を考える方策について議論された。協議会では講義で扱う事例にもっと具体性をもたせるためにはどうしたらよいか、現職とストレートではこれまでの経験が違っているので事例についての分かり方が違う中での講義の組み立てをどう留意するのか、資料の配付方法・タイミングなどについてあらかじめ配付して読ませておくことの難しさ等について検討され、今後の授業改善に生かしていくことが確認された。

(4) 教授陣に対する調査について

FDの一環として、ストレートマスターや現職院生の学習理解等に関する教員の所感を調査した。調査結果は教職大学院会で公表され、データをもとに議論がなされた。アンケートは4点法で実施され、全19の項目について得点化された。

全教員についての各質問に対する傾向としては春学期平均値が最低3.11、最高が3.51であり、概ね良好であったが、シラバスが自己学習に有効であったか、成績評価基準が有効であったか等、いくつかの課題については検討が必要であることが示された。秋学期には、最低3.24、最高3.96となり、ほとんどの項目が3.6以上となった。記述式の内容では「全てが満足」「実践に生かせる内容だった」など、ほとんどは肯定的な記述であったが一部「スピードが速かった」等の項目については今後改善が必要であることが明らかになったため、シラバス全体の内容と重点の置き方等について来年度以降さらに検討し、改善を重ねていく。

S 脳科学研究科

(1) カリキュラム改訂

科目数を限定し、1コマあたりの内容が濃い効率的な科目構成にする改訂を行った。各科目の履修者数が増えることにより、討論などを通じた双方向的な授業において、履修者間の相乗効果が期待される。これまでの大学院生からの聞き取り調査を元にコアとなる科目群を定め、それを中心にカリキュラム構成を行った。併せて、世界最先端の研究者に非常勤講師として科目の一部を担当してもらうなど、複数担当の授業を導入し、科目数を限定しても大学院生が触れる分野の広がりをもさらに広げる工夫を行った。

(2) 学生支援についての検討

各院生の研究状況を把握した上で、その研究をサポートするような授業のあり方について議論した。昨年度、選定・導入した教科書の妥当性について吟味し、足りない書籍を本年度購入した。また、大学院生が使いやすい書籍の保管場所を検討し、複数箇所を設置することを決めた。

(3) WEB アンケートの実施

大学院生全員を対象として、脳科学研究科の教育・研究環境改善に関するアンケートをWEB上で実施した。個別の授業を対象としないことで、匿名性を確保し、率直な評価を収集することができた。

(4) 全学研究科交流会の企画と研究科独自のワークショップ実施

昨年度まで脳科学リトリートとして実施してきた本研究科の自己点検活動を全研究科に広げるため、研究科交流会の企画を提案し、実現に至った(2017年2月23日実施)。これに伴い、本来、リトリートとして計画していた研究科独自の自己点検活動は、脳科学研究所で採択されている私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の報告会と共にワークショップとして実施した(2月15日～17日 ニューウェルティ湯河原 開催)。

- ①研究科所属の大学院生全員の研究指導状況を確認し、より良い方向性に向けた指導のための意見交換を行った。
- ②教員自身の教育と研究能力の向上を促すため、各教員の教育方針、方法と研究成果について確認し、優れた点と改善すべき点について、率直な意見交換を行った。
- ③全教員と大学院生が身近に交流し、生活面や将来への不安などの問題を早く察知、解決するための基盤を固めた。

Ⅲ 教員研修

新任教員研修会

平成29年度採用の新任教員(助教以上)に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は、今年度で15回目の開催となる。参加者25名で、2日間の日程で行われた。

日 時:平成29年3月9日(木) 10:00～17:40 *18:00より、懇親会開催
3月10日(金) 10:00～15:30

場 所:大学教育棟 2014 620番教室

対 象:平成29年度採用教員(助教以上)

研修目的:玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。

専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標:玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。

専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

(1) 研修プログラム内容

1日目:3月9日(木)

10:00	開始/研修説明	教学部教育学修支援課
10:05	開催にあたって	小原 芳明 理事長
10:25	新任教員自己紹介	教学部教育学修支援課
10:40	講演「これからの大学で働くということ」	稲葉 興己 教学部長
12:00	昼食	
13:00	キャンパス・ツアー	人事部人事課
14:20	休憩	
14:30	本学の ICT を活用した教育 玉川大学共通アカウントについて	教学部教育学修支援課
15:50	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部情報基盤システム課
16:10	「UNITAMA 教員業績」について (目的と操作方法)	教学部教務課
16:40	玉川学園の個人情報保護方針について	総務部総務課
17:00	質疑応答/翌日の予定説明	教学部教育学修支援課
17:20	キャンパス・カード用写真撮影	教育企画部広報課
17:40	終了(一時解散)	
18:00	懇親会	大学 FD 委員会
20:00	終了	

2日目：3月10日（金）

10:00	本日の研修説明	教学部教育学修支援課
10:10	教学事項に関する質疑応答	教学部
	・玉川学園の組織機構／玉川大学の概要	教務課
	・各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導	授業運営課
	・年間授業計画	学務課
	・学則・規程等	教育学修支援課
	（授業、休講、補講、試験、成績等）	
	・学生ポートフォリオ	
	・学生の身分異動	
	・授業および成績に関する諸制度	
	・教学事務手続要領（研究費、出張（国内外）等）	
	・学生支援-学修支援について	
	（ラーニング・コモンズ見学を含む）	
11:50	学生支援-学生指導について	青木 敦男 学生センター長
	・学生としてのマナー	
	（服装、自動車・バイク通学、喫煙等）	
	・学生の諸問題の早期発見・解決	
	・ハラスメント	
	・学生相談室	
	・奨学金	
	・クラブおよびサークル活動	
12:20	昼食	
13:20	講演「玉川大学の教育	菊池 重雄 高等教育担当理事
	-教育理念（建学の精神）の引き継ぎ手として-	
15:00	質疑応答	
15:30	終了	

(2) 配付資料・参考資料

資料No.	資料	担当部署
なし	平成 29 年度新任教員研修会<研修プログラム>	人事部人事課
	平成 29 年度新任教員研修会 出席者一覧	
	大学教員の勤務について	
	休暇願(大学)	
	看護休暇・介護休暇申出書	
	出勤簿	
	新規加入者向けリーフレット	
	WELBOX 会員の皆様へ	
	身上異動届	
	玉川学園 玉川大学 総合パンフレット 2016	
小原國芳『全人教育論』	玉川大学出版部	
玉川学園編『愛吟集』		
「全人」2017 年 3 月号		
1	これからの大学で働くということ	稲葉 興己 教学部長
2	玉川学園案内図(キャンパスツアールート)	人事部人事課
	平成 29 年度新任教員研修会 キャンパス・ツアー資料	
3	玉川大学における ICT 活用	教学部教育学修支援課
	1-1 新規 学内 LAN 利用アカウント申請書	
	5-1 学内 LAN 接続機器登録申請書	
4	UNITAMA 教員業績について -目的と操作方法-	教学部教務課
5	コンプライアンス方針について	総務部総務課
	個人情報の利活用と保護に関するハンドブック	
	研修受講報告書	
6	学校法人玉川学園組織機構	教学部教務課
	玉川大学の概要 担当業務等について	教学部授業運営課
	新任教員研修会 教務事項	
	平成 29 年度 年間授業計画	教学部学務課
	ご着任にあたって	
	平成 29 年度 個人研究費説明会について	
7	2017 教員ハンドブック(専任教員用)	菊池 重雄 高等教育担当理事
	玉川の教育理念 12 の教育信条について	
	玉川大学の教育 -教育理念(建学の精神)の引き継ぎ手として-	

(3) 実施の成果

本学における教育について、昨年度に引き続き、高等教育のコンテキストから参加者に理解を促すため、2つの講演「これからの大学で働くということ」そして「玉川大学の教育 - 教育理念(建学の精神)の引き継ぎ手として」を設けた。これにより、専任教員としての業務に必要な、教学事項や学生指導、個人情報保護に関する事項等と合わせ、大学やそこで働く教員に期待されていることが何かを明確に伝えることができた。受講者から提出された研修受講報告書では、研修内容、資料、説明に対してほぼ全員が「とても充実していた」または「充実していた」と回答している。ただし、今年度は説明に関して、「解り難かった」という回答があった。改善希望の⑤にも挙げられているように、それぞれの研修プログラムが充実している反面、受講者が得る情報が過多になっていることが原因として考えられる。そのため、各部署は、内容や資料の質を下げずに、より情報を精査した説明を行うことを、今後の課題として考える必要がある。

研修会の運営にあたっては、全体を通して参加者が参加しやすく過ごしやすい空間・環境を整えるように心がけた。

今回の研修の良かった点についてのコメントは、次のとおりである

- ① 資料がきちんと作られており、話もわかりやすかった。
- ② 理念的な点がよく理解できた。
- ③ 建学の精神、教育理念について、取組と結びつけて理解することができた。
- ④ キャンパス・ツアーは、4月1日からの学内生活に向け、場所の把握ができたので大変助かった。
- ⑤ 本学における教育方針(DP/CP/AP)や政府教育政策との関係がわかった。
- ⑥ 「わかっている」と思っていた事柄にたいして、「わかってなかった」と気づける点が多かった。
- ⑦ 自分の意識が高まった。特に、最後の菊池先生のお言葉・姿勢に敬服し、沢山のことを考えることができた。
- ⑧ 大学でのICTの取組がよくわかりました。
- ⑨ 断片的な知識や情報が整理され、体系化できた。
- ⑩ 玉川大学教員として、自身の研究や学生たちへの関わり方への理解が出来た。
- ⑪ 玉川学園での教育に関する理念や、具体的にどのようなことに取り組みされているかが、よく伝わってきました。

その上で、改善希望として、次のようなコメントがあった:

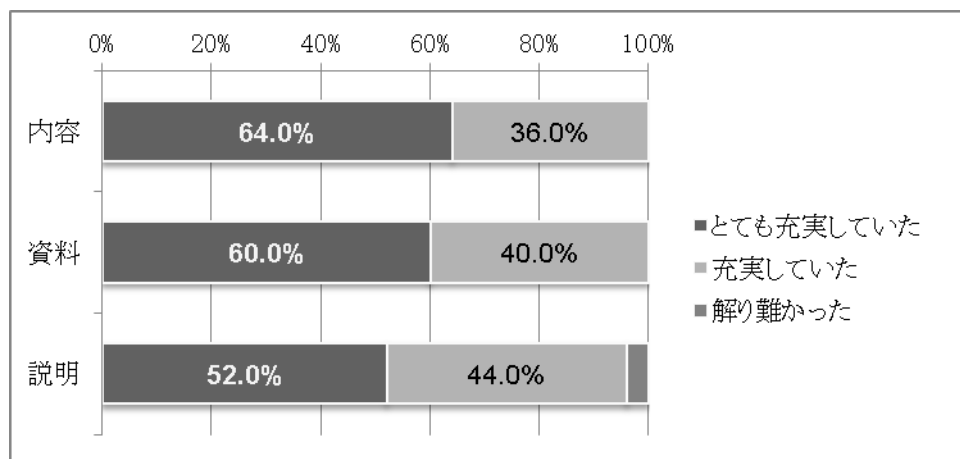
- ① 時間が短縮できると嬉しいです。4月にしてもいい内容であればですが。
- ② 90分に一度くらいで、休憩をいただけるとありがたいです。
- ③ 勤務に関することに関しても説明があると嬉しい(資料だけでなく)。
- ④ もう少し早い時期にこの研修会を行ってほしい。
- ⑤ 一つ一つの内容は確かに充実していたのだが、量が豊富でオーバーフローしてしまった。一日ではなく半日程度の方がよいかもしい。
- ⑥ 少しアクティブにしてみてもいいだろう。
- ⑦ 用語が特殊で良くわからないことがありました。

- ⑧ 玉川学園独自の用語について、説明をしてあるものがあれば、分かりやすいです。
- ⑨ 口頭の説明がなくても、資料を読むことで理解できる内容は、研修の内容から削減することも可能なように思いました。
- ⑩ 理念などに関する内容に加え、もう少し身近な実務に関する内容(例えば、講義以外にどのような業務があるかなど)について教えていただければより4月からの準備に有益だと感じました。

また、感想として、次のようなコメントがあった：

- ① まだよく分からない部分が残りましたので、業務にあたる中で把握していきたい。
- ② 時間配分も最適でした。
- ③ パワーポイント、とじこみ資料の天地が逆だと、見やすいと思います。

＜報告書データ集計 —内容、資料、説明について—＞



これらの意見から、本研修会の目的・到達目標は、ほぼ達成できていると評価できる。同時に、本研修会が新任教員との教育・研究活動に向けた良好な関係構築に役立つものであったと考えられる。

次年度の開催に向け、引き続き、研修内容や提示資料の工夫と質の向上に努めたい。

以上

参 考 资 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 28 年 4 月 27 日 (水) 17:30~19:00
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : (1) 会議日程に関する件
(2) US 科目 学生による授業評価アンケート 実施に関する件
(3) 春学期実施 授業参観に関する件
- 報 告 : (1) 各学部 今年度 FD 活動計画および授業参観計画の提出について
(2) 「平成 27 度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について
(3) 他大学等提供のシンポジウム等および資料提供について

第 2 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 28 年 6 月 17 日 (金) 17:30~19:00
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : (1) 研修会等の設計・運営の提案に関する件
(2) US 科目の学生による授業評価アンケートの評価に関する件
(3) UNITAMA での US 科目の学生による授業評価アンケートに関する件
(4) 各学部 FD 活動計画に関する件
- 報 告 : (1) 授業参観計画について
(2) 平成 28 年度 大学教育力研修について

第 3 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 28 年 9 月 23 日 (金) 15:00~16:30
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : (1) 新任教員研修会に関する件
- 報 告 : (1) UNITAMA での US 科目の学生による授業評価アンケートについて
(2) 授業改善の取組について

第4回大学FD委員会

- 日時 : 平成28年11月23日(水) 17:30~18:30
場所 : 大学教育棟2014 793会議室
議案 : (1) ルーブリックの活用に関する教員調査に関する件
報告 : (1) 大学教育力研修について
(2) 新任教員研修会について

第5回大学FD委員会

- 日時 : 平成29年3月15日(水) 17:30~18:30
場所 : 大学教育棟2014 793会議室
議案 : (1) 来年度のFD研修等に関する件
報告 : (1) 今年度の各学部FD活動について

参考資料 2. 「授業評価アンケート」用紙

記入日	月	日	回答者学年	①1年	②2年	③3年	④4年	⑤その他
-----	---	---	-------	-----	-----	-----	-----	------

授業科目名	5	4	3	2	1
開講時限	4時間以上	3時間〜4時間未満	2時間〜3時間未満	1時間〜2時間未満	1時間未満
曜日					
限					
担当教員名					

I. この授業に対するあなたの学修時間について

1	1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	5	4	3	2	1
---	------------------------------	---	---	---	---	---

5	4	3	2	1
よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない

II. この授業に対するあなたの取り組みについて

2	この授業に積極的に参加した。	5	4	3	2	1
3	この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	5	4	3	2	1
4	どのような自主的・発展的な学修をしましたか。 <input type="checkbox"/> 授業の内容について友人と議論をした。 <input type="checkbox"/> 発表の前にプレゼンテーションの練習をした。 <input type="checkbox"/> 授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。 <input type="checkbox"/> その他()					

III. この授業の進め方について

5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	5	4	3	2	1
6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	5	4	3	2	1

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
IV. この授業を受けてみて						
9	新しい考え方・発想に触れた。	5	4	3	2	1
10	基本的知識が得られた。	5	4	3	2	1
11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	5	4	3	2	1
14	学問的興味をかきたてられた。	5	4	3	2	1

V. この授業を総合的に振り返って

15	授業全体の目標・内容が明確であった。	5	4	3	2	1
16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
17	この授業をほかの学生に薦めたい。	5	4	3	2	1

VI. その他

18	この授業の教室の大きさは適切であった。	5	4	3	2	1
19	この授業の受講者数は適切であった。	5	4	3	2	1

その他、意見、感想など自由に書いてください。

--

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

参考資料 3. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

第1条 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第2条 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 4 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 5 本委員会には学部ごとの部会を設けることができる。
- 6 前項による部会は、各学部ごとに設け、部会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第3条 委員の任期は1か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第4条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第5条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(部会)

第6条 各部会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第7条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、教学部教育学修支援課とする。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

平成 28 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

平成 29 年 5 月 発行

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

平成 29 年 5 月発行

発行 玉川大学 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8866 (教学部教育学修支援課)